

ジータちゃんが闇堕ちしたら……

もうまめだ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通りギターちゃんが闇堕ちしてしまう話です。

グランブルーファンタジーの話です。ゲームのメインストーリーのifストーリーという感じですが。一応リーシャは加入しているところまで話は進んでいる感じですが、細かいところはまだ決めてません。

独自設定あります(そうしないとゲームの世界を小説にできないんです……)

「ギターちゃん闇堕ちします(タイトル通り)」

物語も全体的に暗めになるかもしれません

以上の3点は注意事項です。無理な方はお勧めできません。

追記Ⅱ

第6話からメインストーリーに絡めて話を進めていきます。話はメインストーリーの53話からです、詳細は第6話の前書きに載せておきます。またこの話からはネタバレ注意となります。

目次

揺れ動く心	1
再興の島	9
星晶獣アネバルテ	16
誓約	23
現実と夢の狭間で	33
何度も、何度も	42
帝国への潜入	49
知りたくない事実を探して	55
相対する	62
共同戦線	70
嵐の前の静けさ	77
侵入の裏で	83
魔法vs魔法	90
おまけ (第14話の没話)	99
蝕む	104
お土産	112
偶然か必然か	119
元凶を消しても	128
再会是最悪の形で	135
0から1は作れない 前編	146
0から1は作れない 後編	156
捕獲	164
声は届かず	170
すぐそこの遠い距離	179

告白

私のもの

最終話 背中

エピソード 初めての再会

188

197

209

215

揺れ動く心

——今日も蒼空を艇は翔ける……——

「はあ……」

朝。

ほかの団員たちはまだ深い眠りの中で、叶うとも叶わぬとも分らない夢を見ているんだろう。昨日までの一週間、戦いづめだった私たちは疲労もピークに達していて、グランが昨日突発的に決めた古戦場の次の日はみんな休日！、というルールに従っていた。いつもなら騒がしい食堂や甲板、起きて！、という叫び声と、まだ眠いとぐずる声の応酬もなく、艇全体が静寂に包まれている。その静寂が今の私にはありがたかった。

空の彼方、雲の隙間から橙の光が差し、グランサイファアを仄かに照らす。もうこんな時間か。独り言はまだ肌寒い空気に溶け込み、誰に聞かれることもなく存在を消す。寝静まった艇が起きて、また一日が始まる。

といつてももう起きている人もいるだろう。操縦室ではラカムが朝の制服を味わいながら、相棒グランサイファアの行き先を決めているだろうし、食堂ではこれからぞくぞくと起きてくる団員たちのための食事を——今日の当番はヴィーラと、あと誰だったかな——作っているところだろう。そしてそろそろ……

扉の開く音がして、一人の少女がその頭上に小さい竜を携えながら、甲板に出てきた。手を空高く伸ばし一度大きく背伸びしたその少女は、ちよこんと座っていた私の姿に気づき、はっとした表情を浮かべて。

「わあ、早起きなんですネ。ジータ、おはようございますー！」

「うん、おはようルリア。ビィもおはよう」

「おう、おはよう！　ほんとジータはいつも朝早いな！　疲れてるだろうし、もつと寝ててもいいんじゃないか？」

「ううん、大丈夫。それに私はこの騎空団の団長なんだから、みんなが疲れている時こそ頑張らないと……」

「そういうところも昔から変わらねえな。でもあんまり気負いしすぎないほうがいいんじゃないか。ほら、グランだっていびきかきながらぐっすり寝ていたぜ？」

「うん、ありがとビィ」

「ジータ、本当に大丈夫？　元氣ないみたいだけれど……、ちゃんと休めた？」

ルリアが心配そうな表情で私の顔を覗き込む。実を言うと、昨日から全く寝ていなかった。戦闘に疲れ切っているはずの身体は休養を欲しているのに、それを嫌がっているかのよう、いや、むしろ次なる依頼を欲しているかのように、心と頭は冴えていた。古戦場が終わり、そのまま団員たちは打ち上げをして、終わったのは夜1時ごろだろうか。ベッドに入ったのは2時ごろだったが、1時間後に眠れる気配のしない自分に嫌気がさし、外の空気を吸おうと外に出たまま朝を迎えていた。島に停泊していた艇を動かすため起きたラカムに見つからないように一度自室に戻っただけで、あとは風景が目の端から端へ流れていくのをぼーっと見ながら呼吸だけをしていた。

最近こういうことが増えた。よろず屋のシエロカルテのおかげで各地で名前が売れ始め、舞い込んでくる依頼の数は激増した。それに追従して徐々に増え続けている団員達も癖はあるがいい人達ばかりで、それは優秀な勧誘役である少女と小竜のおかげだが、私やグラン抜きで依頼をこなしてもらうことも増えた。依頼という名の信頼が人と人をつないでさらなる依頼を呼び、新たに加わってくる団員達もいい人ばかりで流れに乗っている私たちの騎空団。それなのに、いやそのためというべきなのか、いつからか私は気持ち沈んでいる私を頻繁に見かけるようになった。

理由はわからなかった。そして気落ちしている団長という姿は、団員たち、いずれは団全体に移っていくと思っただ私はそれをひた隠し、いつも以上に元気で活発な団長ジータを演じた。元気な自分を演じれば本当の自分も元気になっていく、とも願って精一杯元気になった。うまくいったと思う。ゼタなんかには、最近元気だね、いい男でも見つけた?、とからかわれるぐらいには。小さいころからの付き合いであるビイにもばれなかったし、命を共有してるルリアにも悟られなかった。そのことに安堵した私は、内面の、本心の私がさらに沈んでいくのを見て見ぬふりしながら、外見を取り繕った。

そして、見破られた。

古戦場が始まる前日、つまり一週間前、明日からがんばろうと自分の心にむち打ち、眠ろうとした私は、自室の扉がノックされる音を聞いた。

「俺だけど……」

「グラン?、どうしたの?」

「ちよつと話があつて」

「そう、うん、入っていいよ」

扉を開けて中に入り、椅子に座ったグランは私の顔をじつと見つめて、少し考え込むような顔をして、口を開いた。いつもの誰に対してもし分け隔てなく明るくしゃべるグランがあまり見せない表情だったので、私もすこし緊張しながら耳を傾けた。

「ジータ、最近何かあつたか?」

「えっ?」

「いや俺の気のせいならいいんだけど。少し前に急に元気になったじゃん。みんなはわからないかもしれないけれど、きょうだいの俺にはわかるんだ。明日から古戦場だし気を抜けないから、もし何かあったんなら……」

「えっ……っ」

悩んだ時間は一瞬だった。隠す。たとえグランであっても。私も……私は団長だから。

「……最近依頼増えてきたからさ、みんなも疲れてるかなと思って。ならまず私が元気にふるまって、みんなに元気をあげられればって思っただけだよ。もちろん依頼が増えたのもみんなのおかげだし、それのお礼っていう意味もあるけど。私はだ、大丈夫だから」

最後声が震えた。多分私の心に気づいてくれたのはグランだけだろう。それはつまり、私の心の助けに伝えてくれるのもグランだけだということになる。それを振り切り、大丈夫という偽りの言葉を発してしまうということは、グランに助けを求めることを自らで拒否したということでもある。声が震えたのは、私の本心の、最後の抵抗だったのかもしれない。

グランの表情は明るくはならなかった。むしろ少し翳ったようにも見えたが、それ以上追及することはなかった。それはそれでうれしかったし、淋しかった。もう一声、本当に？、とか、嘘ついているよね、とか言ってくれれば、私の本心があふれ出していただろう。たつたその一声のあるなしの違いが、いや、私がグランに本心を見せなかつたというその小さな強情さが、大きな変化を生むであろうことに私は気づくこともなく、おやすみと声をかけて出ていくグランの背中を見ていた。

次の日に見かけたグランはいつも通り私に挨拶をしてきた。私も

いつも通り返した。まるで昨日の会話はなかったかのように。そして、古戦場での戦いが始まった。

結果的に古戦場での戦いはうまくいった。私たちは団を創設してからの時間は短いにもかかわらず、ほかの団に引けを取ることもなく、多くの星晶獣を討伐していった。最初の2日間で行われる予選を難なく突破した私たちは本選に進み、星晶獣を討伐することで得られる貢献度をほかの本選に出場した騎空団と競い合った。本選はランダムに選ばれるもう一つの騎空団と一対一で貢献度を競い合うもので、制限時間は朝から夜の12時までで、それを5日間行う。最初の4日間を全勝して迎えた5日目は予選4位の騎空団とあたり、善戦むなしく惨敗したが団員たちの顔は清々としていた。健闘を祝った皆が楽しむのを私は静かに見ていた。私は、気落ちしていた理由を見つけていた。

本選3日目だった。相手はそれなりに強い団で、終了1時間前の時点で貢献度はほぼ同じという接戦だった。私とグランはサポートに回っていた団員達も討伐に加わってもらうことに決め、背水の意志で私たちのすべての力をぶつけることにした。そのとき私たちは比較的強い星晶獣の群れに遭遇して苦戦を強いられていたが、私はグランに戦闘の場を頼み、その旨を団員達に伝えるためすぐに艇に戻った。団員達は表情を崩すことなく了承し、それぞれの武器を持ち、星晶獣を討伐せしめんと古戦場を進んでいった。私もすぐにグランたちのごころに戻った。もしかしたら危険な状況に陥っているかもしれない。私が行って……助けないと。

けれど着いてみたらそんなことはなかった。予想は違った、いや、予想に裏切られた。艇に伝える行き戻るまでにほとんど時間をかけなかったのにもかかわらず、50体はいた星晶獣は皆倒されていた。グランたちは疲労のせいか地面に座り込んでいたが怪我をしている人はいなかった。

私の……

「グラン……、艇のみんなには伝えてきたよ。今はもう全員討伐しはじめてると思う」

「ああジータ、ありがとう」

「こっちは……、その……、どんな感じだったの？」

「ジータいなくなってやばいなって思ったんだけど、みんなもそう思ったのかな。みんな一気に動きがよくなって、気づいたら全部倒しちゃってた。さすがにその反動で今は動けないけどね、ははっ」

私の……

「ほんとすごかったんだよ。バザラガとか最後は無傷の星晶獣を、ぬんっ！、っていう一振りで倒してたし、ゾーイなんて今にももう一つの姿で顕現するかのような覇気を纏っていたし、ヴィーラなんて……ジータ？、どうかした？」

無意識に武器を握りしめていたらしい。不意にグランに声をかけられ、はっとして武器を地面に落とす。さくっという音を伴い突き刺さる武器に視線は動いたが、拾う気にはなれなかった。

「ううん、何でもない。みんな疲れてるならもう少し休んで……、私は大丈夫だからもうちよつと討伐してくる」

「ああ、うん、っておい、武器忘れてるぞ」

その場を離れようとする私にグランが声をかける。私はいつの間にか張り付いてた笑顔をグランに見せ、剣を拾い納刀する。そのまま無意識に音のないほうへと足が勝手に動いていくが気にはしない。私の背後で声を発する人はいなかった。

歩いた。残り時間が短いことに気づき走った。一体でもいい、弱くても魔獣でもなんでもいい。貢献しなくちゃいけない。私は……団長なんだから。けれど、そのあと私は星晶獣に会わなかった。まるでこの島全体が私に貢献をさせないかのよう。私は誰にも、何にも遭わずに制限時間を迎え、そのまま艇に戻った。戻りながら、心中に黒い感情が渦巻き、そして私は気づいた。

私はひがんでいたのだ。いつの間にか私よりも強くなっていた団員たちに。私は嫌になっていったのだ。団長という肩書を持っているのに、団員たちよりも貢献できていない私に。私は認められ続けたかったのだ、私に価値があることをみんなに知らしめることで……。

私のいる意味って？、価値って？

そのあとの2日間は苦しかった。気持ち沈んでいた原因が、他人へのひがみという醜い理由だったことに。他人よりも強いということとでしか、自分に価値を見いだすことができなかつたということに。あの日、グランたちのところに戻ったとき、まだ倒していない星晶獣が怪我をした団員がいることを願ったことに……私がいればこうならなかつたでしょ？、という私への価値づけをしたかつたことに。

生物的に女よりも男が強いというのは正しい。ただ強いだけが団長ではない、弱くてもみんなをまとめて支えられれば、それで立派な団長だ、というのにもわかる。でも私は納得できていなかった。団長なんだから誰よりも強くなくては、私がいるというその価値がなければ……

「……ータ、ジータってば、聞いてる？、本当に大丈夫？」

「えっ、ああ、うん大丈夫だよ」

少し考え事をしていたようだ。今日寝れずに外で過ごしていたのも、醜い私に気づいてもなお、みんなに認められたいという感情が渦巻いていたからだだった。休んでいない脳は無意識に考えたいことも考えたくないことも考えている。こんなんじゃ……だめだね。

涙目になってしているルリアの頭を撫でて、立ち上がる。息を大きく吸い込むと、空高く新鮮で潤った空気が全身に染み渡る。

「ねえルリア、私ってみんなの役に立っているかな？」

「ええっ？、そんなの当たり前じゃないですか！」

「そうだぜ！、いきなりどうしたんだよ？」

「ううん、ありがとう、ルリア、ビィ。朝ごはん食べに行こうか」

「は、はい。ちよつ、ちよつと待ってくださーい！」

聞きたかったこたえが返ってくる。そうだ。私はみんなのために役立つっているんだ。少なくともルリアとビィはそう思ってる。それでいいじゃない。心の奥底に渦巻く黒い感情をなんとか押し殺し、私は食堂へ向かう。そこに、運命を変える依頼書があることも知らずに。

再興の島

「みなさんおはようございます」

「わあ、シエロさん！ おはようございます！」

「おお、よろず屋じゃねえか！」

ルリアとビィを連れて食堂に行くと、いつの間に来ていたのか、よろず屋のシエロカルテがテーブルに座っていた。神出鬼没の彼女が私たちの団に来ることはよくあるが、古戦場のすぐ後にくるのは珍しかった。何か緊急の依頼でもあったのだろうか。私はシエロカルテに挨拶をし、今日の食事係だったヴィーラとエルメラウラに声をかけて朝ごはんをもらい、席に座った。

「それで、こんなに早くどうしたんだあ？」

「ええ、みなさんももうお気づきかもしれませんが、依頼のお話です」

「緊急の依頼なの？ グランが昨日団員たちに今日は休日にするって言っちゃったんだけど……」

「はい、それはヴィーラさんにお聞きしました。緊急を要するものではないのでご安心ください。ただですね、みなさんが今回の古戦場に参加するとお聞きしまして、今回の依頼が古戦場の開催地に近かったものですから」

「それでオイラたちが島を離れる前に来たってわけか！」

「そうですー！」

「でもシエロさんも昨日まで忙しくなかったんですか？ 一大イベントだったから、お仕事たくさんあったんじゃないんです？」

「最近の古戦場は事前に参加する騎空団の数や団員数を予想していただきますので、イベントが始まる前に商品を納入し終わってしまうんです。何かハプニングがあれば私も駆けつけるのですが、無事終わったみたいですねえ」

「へえ、そうなんですか！」

「はい。そういえば、みなさんの結果はどうだったんですか？」
私は比較的うまくいった今回の古戦場の結果を彼女に話し、そして
依頼の話を進めてもらった。

「それで今回の依頼ってどんな内容なんですか？」

「ええつとですね、ある島にいる星晶獣の力を弱めてほしいという
ものです」

再興の島。

その島はそう呼ばれている。夢に破れた者が再び日に当たること
を夢見て訪れる、再出発の島。この島で努力を惜しまず、自らの才能
をさらに開花させたものは、その才能を万人に認められるだろう。そ
んな言い伝えのもとに、一度道につまづいたものが大勢集まるため、
訪れた者たちの仲間意識は強く、それにより島は活気があふれ、ユ
ニークな発想が生まれることも少なくはないという。才能を開花さ
せこの島を出ていく成功者を見送ることはこの島全体の喜びだった。
しかし最近、この希望の島に異変が起きていたのだった。

「その島ではアネバルテという名前の星晶獣が言い伝えられていまし
て、アネバルテが夢をあきらめることなく努力を続けるといふ心を
支えているそうなのですが……」

その島の長老によると島を出ていくものが目に見えて少なくなっ
ているそうだ。島を出ていくというのはつまり、努力が実ったといふ
ことであり、皆から歓迎されることなのだ。それだけではなく、島
民の顔も暗く、いまでは希望の島の痕跡は残っていないという。どう
やらアネバルテが暴走したことにより心の支えがなくなって自信を
持つことができなくなっているみたいだ。

「それでルリアさんの力でアネバルテの力を吸収してもらい、前のよ
うな活気のある島に戻してほしいという依頼なんです。いつもル
リアさん含めこの騎空団のみなさんのお世話になっているのは申し

訳ないのですが」

「私はお役に立てるのなら大丈夫です！」

「いつもありがとうね、ルリア。そうですね、もともと心をサポートする星晶獣だからそこまで強くないのかもしれないです。だとすると依頼をこなすのにあまり人数はいらないから……うん、わかりました。依頼引き受けます」

「だとしたらラカムに行き先変更を伝えなくちゃね、ジータ！」

「それは大丈夫ですよ、先ほどラカムさんには行き先を伝えておきましたので」

「ずいぶん早いじゃねえか、よろず屋。そりゃあオイラたちが依頼を断ることはないけどよお」

「商人は未来を見据えることが重要ですよ」

彼女の話によると、目的の島までは早くても1日かかるということだった。少しあとに起きてきたグランに依頼の話をし、その日一日は空の旅ということで結局休日ということになった。

次の日。

昨日とは違い数時間寝ることのできた私はそれでもまだ薄暗いうちに起き、外に出て景色を見ていた。すでに目的地と思われる島は見えるところまで近くなっている。それと同時に心がざわめくのにも少し不安を覚える。自信がなくなったものが集う島。まさに私が行くにふさわしい島……なのかもしれない。

「ジータ、おはよう」

「うん、おはようグラン。今日は早いのね」

「休日はおわったからなあ……あれが『再興の島』か。見た目はなんとなく俺たちの故郷に似ているな。」

「そうだね」

「さっさと依頼を済ませてまた休みたいなあ、おお、ルリア、ビィ、おはようー！」

朝食を済ませ私たちは停泊した港から島に降り立った。港にはすでに長老と思われる人が立っていた。ハーヴィン族の初老の男性だ。それに気づいたグランが歩きよって話しかける。

「こんにちは、あなたが今回の依頼主の方ですか？」

「はい、そうです……。この島の長老をやっている弟の兄です。あなた方がよろず屋のほうから紹介された騎空団の方々ですか？ この度は依頼を受けてくださってありがとうございます。立ち話もあれなので、そのあたりの話をしながら島の様子を見ていただきたいのです」

「分かりました。俺たちも島の雰囲気を知ったほうが仕事がしやすいので」

「わぁーい、観光つてわけですね！」

「一応仕事だけどね」

港から町の中心地のほうへと歩いていくと、景色ががらつと変わり、店が続いてく商店街に入った。港のすぐそばにある商店街というのはどの島でもよく見る光景だが、何となく雰囲気がい暗い。人通りは悪くないのだが、あるで透明な灰色のベールで覆われているように少し暗い。依頼主に連れられ商店街に入っていくと、これも定番なのだが、あちらこちらから食べ物いい匂いがしてくる。

「ベイさん！、あそこのパン屋さんすごくおいしそうな匂いがします！ 行ってみたいなあ……」

「ルリアおめえ、さつき朝ごはん食べたばっかじゃねえか！」

「へへえ、このことを予想して食べる量減らしたんですよ。商人は未来を見据えることが重要なんです！」

「いつもとあんまり変わってなかったと思うがよお……」

「ジータ、いい？」

「うん、いいよ。私もついていくよ」

「わぁーい、ありがとう！」

グランに一声かけ、パン屋のほうへ歩くと、ルリアの言った通り芳しい小麦とバターの香りが鼻をつつく。ドラフ族の女性がつっているようで、十数種類のパンが並んでいる。

「うーん、どれにしようかなあ」

「おすすめを聞いてみたらどうだ？」

「そうですね！ お姉さん、おすすめのパンはどれですか？」

「そうだねえー、このアップルパイなんか出来たてだし、使っているリングもすごくおいしいものだからおすすめだよ」

「リングか！ リングを使っているのか！」

「ならバイさんこれにしましょう！ ジータも食べる？」

うん、と頷き、私はアップルパイ3つ分の代金を渡す。見た目以上にリングがぎっしりと入っているみたいで、小麦色の生地に黄金色のリングはさつき食べたばかりの朝食を忘れさせるぐらい食欲をそそる。

「うわぁ、おいしいですー！」

「生のリングもうめえけど、このアップルパイのリングもうめえなあ」

「こんなにおいしいならどこに行っても大繁盛しそうですね！」

ここにこしながら私たちの会話を聞いていた女店主の顔がさっと曇る。

「そう言ってもらえてうれしいけれど、もうお世辞は聞き飽きたんだ。ほら、買ったならさっさと行った」

「お世辞なんかじゃねえよ！ほんとにうめえんだって」

「みんなそう言うさ。あの時だって……突然手のひらを返したみたい……」

「そんな……」

「バイ、ルリア、行こう」

私はルリアの肩をたたき、待っているグランたちのところに戻る。一度振り返ると悲しい表情の女店主がうつむいていた。

「分かっていただけでしたか」

戻ると、依頼主が淋しい顔で話しかけてきた。グランたちも店で起こったことを理解したようで難しい表情をしている。

「はい。裏切られた、みたいなことを言っていましたけれど」

「彼女は以前有名なパン屋で働いていて、その才能もあり自分の店を持つことになったんです。元のパン屋の店主が出資してくれることになっていて。店は繁盛したのですが、その成功を僻んだのでしよう、出資してくれることになったパン屋の店主がその話を突然取りやめにして、さらに根も葉もない噂を流して……。それで経営は一気に悪化して店を閉めなくてはならなくなったんです」

「そうだったんですか」

「でもこの島に来て、元々才能はある方でしたからここでもう一度開業した店は繁盛したんです。けれどもいつの間にかほかの人たちと同じようにその時のトラウマを思い出すようになったみたいで。おいしいと心からの感想を言っても振り向いてくれなくて……」

歩きながら依頼主は話をつづけた。オーディションで失敗したせいで一度自分の夢をあきらめた大道芸人。クリーンで民に優しい議員になろうとした結果、大御所と呼ばれる有名議員に干され、自信を失った青年。奇抜な独奏で有名になったがオーケストラには合わないという理由でどこからも断られた女性ピアノ奏者……。

「それでも1年前まではみんな笑顔があったんです、演奏がうまい、芸がすばらしい、リンゴがおいしい。心からの感想は彼らの芯に響いていたはずなんです。けれどもいつの間にか遠く離れてしまつて。お世辞だ、だとか、心にもないことをつて、言われることが多くなつて。

そうしたら町全体の雰囲気まで……」
「そんなあ……」

依頼主の話が終わるとほぼ同時に商店街の店が消え、ある一軒の家が目の前に立っていた。

「ここが私の弟、この島の長老の家です」

星晶獣アネバルテ

この家は、島への居住を希望する者が最初に招かれる場所だと依頼主の説明を受けた私たちは商店街に立ち並んでいた店より二回りほど大きいその家に入り、廊下を抜けて、広めの応接間に通された。昔ながらの机や椅子に、他の島では見られない、奇抜だが目を引く装飾が施されたそれらはまるで価値のある芸術品で、壁には風景画とも抽象画ともいえる絵画が飾られたその部屋は、人という多種多様な存在をそのまま表現をしてるようで、そしてその奥に座っているひどく年老いた老人はこの場にはふさわしくないものと思われた。

「この島の長老で、私の弟です。名前は……」

「兄上、またこのような見知らぬ輩を連れてきたのか。私たちの島の問題は私たちで解決する、そういっただろうに」

ひどくしわがれた声の主は依頼主の弟のはずなのに、見かけだけでは20歳は余計に年を取っているようだった。しわの多い顔にさらにしわを増やし、吐き捨てるように言葉を発する。それに対し依頼主は、私たちに申し訳ない表情を見せる。

「みなさん、お気になさらずに。もとはこんな性格ではないのです。しかし、やはり1年前ぐらいからでしょうか、島の異変が始まってぐらいからだんだんと変わってしまった。以前は、若者を信じ、自信と勇気を与えることを一として生きていたのですが」

そして長老のほうを向き、優しい表情で話しかける。

「お前ががんばっているのも知っている。今まで雇った者が島を元に戻すことができなかつたことも知っている。だから、ほんとにこれで最後でいい。この方々にこの島を救ってもらわないか。もし今回失敗したら私はもう何も言うまい。それが我々の命運なのだろう、手の

打ちようはない。もしお前がこの方々を信頼できないのならそれでいい。だが協力してやってくれないか、この島の最後の希望に」
「俺からもお願いします。この島を助けさせてください」

グランが立ち上がって頭を下げる。それにつられて私も立ち上がり続く。気づくと、応接間にいる全員が長老に頭を下げている。

「……がいます」

「えっ？」

「よろしく……お願いします」

顔を上げると長老が震える手に杖をもつて体を支え、深々と頭を下げていた。その光景に私たち以上に驚いたのは依頼主だった。

「これは……すごい。ここ一年、弟が誰かに頭を下げるどころなんて見たことがなかった。ましてや、今あつたばかりの若者たちに。私もよろず屋の話を聞いた時点では話半分で聞いていたのですが、もしかしたら本当に、あなた方なら……。私からも、どうぞよろしくおねがいします」

と私たちに頭を下げるのだった。

「このりんご本当うめえなあ！」

「ベイさん、それで3つ目じゃないですか？」

「ああ、でも本当うめえんだぜ、手が止まらなくてよお……」

「さつき食べたアップルパイとどっちがいいですか？」

「うーん、難しい……」

「そんなリングゴに埋もれるベイ君に埋もれたい……」

「カタリナ、依頼中だよ、しっかりして？」

私たちの言葉と態度が心に響いたのか、長老は笑顔で私たちを歓迎

してくれた。まるで10歳若返ったかのような明るい顔で島で生まれた様々な料理を机に運びながら私たちの質問に答えてくれるのだった。主にグランが質問するのを聞きながら、私は心の奥底を、暗く渦巻く本心をつつく存在に気づきつつあった。

「やっぱり異変は1年前からなんですか？」

「そうだねえ、それまでは島には笑顔があふれて、活気があったんだが」

「その1年前に何か起こっていないんですか？」

「うーん、覚えはないな……、ああそういえば、あのときはほかの時期に比べて島を離れる者が集中していたかもしれん」

「なるほど、それが星晶獣アネバルテに異変を起こした、というのは？」

「それは考えられにくいですね。本来アネバルテは人の心の支えとなる力を持つもの。その支えにより自信を取り戻すことはアネバルテにとっても喜びであるはずなんです」

「そうですか……、ルリアー！、星晶獣の気配はどんな感じなんだ？」

「それが、島に入ってからずっとなんですけど、どこにでもいるっていうか、どの人にもいるっていうか。よくわからないんです、ある一か所にいるってわけではないみたいで……」

「この子がよろず屋の言っていた星晶獣を感じ、力を吸収することのできる子ですか。本当にすごい力ですね、まさにこの子が言った通りなんです」

「へへえ〜」

「一か所にいないで、どこにでもいるっていうことですか？」

「いや、どの人にもいるっていうところだ。先ほども言ったが、アネバルテは人の心を支える星晶獣だ。つまり人の心の周りに常にいないくてはいけないということなのだ。この子はそれを感じ取ることができたのだろう」

「そうなるアネバルテの搜索は難しいのかもしれませんが。本体しかないのであれば、ルリアーが気配を察知して場所を特定できるのです

が、今回の場合のように多数に分裂している中から本体を探すと
と。本体が必ず出現する場所があればいいのですが……」

険しい顔をした長老が口を開く。

「必ず出現する場所か、ないわけではないが……」

「本当ですか！ それならば今回の依頼も成功にぐっと近づくん
です！ それはどこなんですか？」

「それを教える前に、少しこの島のルールについて説明しなければ
なるまいな」

「島のルール？」

「そうだ。ルールというよりは、アネバルテが決めた制約だな……」

再興の島。異変の起こる1年前までは復活の島とも呼ばれ、一度夢
を失ったものが集う島として有名だった。しかしそれでは島民の数
が増える一方だ。アネバルテの支えることのできる心の数には限り
があるだろうし、単純に島の面積は限られている。

「たくさんの方々が再興の島の評判を聞きここにやってきます。けれ
どもほとんどの場合彼らは、アネバルテに認められなければ島民にな
ることはできない、というアネバルテ自身が古くに定めた制約につい
ては知りません」

「認められるですか？ それは試験みたいなの？」

「いいえ。どうやら心を支える力を持つアネバルテには我々人の心が
わかるようなんです。そしてその力を使って、大勢来る島民希望者の
中から、真に自らを再興したいものを選んでいるのです」

「でもそれを知る方法はあるのですか？ アネバルテ自身が条件に合
わなかったものを排除するんですか？」

「そんな野蛮ではない。その結果を知らせるのが長老である私の役目
なのだ。まあ、結果は当の本人がすでに知っているのだが」

話が複雑になりグランも首をかしげている。ルリアにいたっては、
ピンと跳ねる髪の毛がクエスチョンマークを描きそうだ。

「ふふつ、そんな難しいことではないんですよ。アネバルテに出会えること、それが島民となる条件なのです」

島民希望者はまず初めに長老の元へとやってくる。そして長老から話を聞かされる。アネバルテによる島民になるためのルールだ。それは、アネバルテが会いに来ること。島民になるにふさわしい者の元には島に到着してから1日が経つ前にアネバルテがやってくる。

「だからわしは希望者にこう言うのだ。『一日後もう一度来なさい。もしお前が島民にふさわしければアネバルテがやってくる。実際にやってきたのであればお前は私にアネバルテの姿を報告しなさい。もしそれが正しければ、その時からお前は正式に島民となれる』、とな」

「そうなんですか。それでアネバルテの実際の姿とは?……、ああこれは俺がこの島民になりたいから聞いているわけじゃなくて……」
あせって素がでてしまうグランに対して、ハーヴィンの兄弟は微笑む。

「私たちは知らないですよ」

「えっ? それじゃあどうやって……」

「アネバルテは島民になるにふさわしい者のところに来て、同時にその時から心を支えて始めてくれるのです。そしてそのやってくる姿は自分自身なのです」

「自分自身?」

「そうです。もしあなたを島民とふさわしいとアネバルテが思ったら、アネバルテはあなたの元へあなたの姿へやってくるでしょう。快活で自信を持ち、少しのおつちよこちよいを隠せないあなたの姿をして。まあそれは決してないでしょうが」

依頼主に性格を見透かされているグランは少し顔を紅くして、それでもまじめ口調で応える。

「俺のところには来ないんですか」

「はい。ここは再興の島。心が沈んだものを支え、再び興し、そして見

送る復活の島。あなたのように、すでに自信のある方は島民には向いてないのです。なのであなたの目の前にアネバルテがくることはない。アネバルテが出向くのは、自分の理想と現実の自分の差に劣等感を抱いて自信を無くし、それでもなおそれに抗い、努力しようとした結果心を病んでしまった者の元なのです」

がたつと大きな音がして私は驚く。そして音を起こした張本人が私自身であることにさらに驚く。周りのみんなが心配そうな目に向け、それに耐えきれなくなった私の心は小声で無意識に大丈夫と告げ、まったく大丈夫ではない心を落ち着かせようとする。と同時に島に近づくにつれ大きくなっていった違和感、心の奥底をつついていた存在に気づいた。私はこの島の島民としてふさわしいのだ、私は……。

「自信を無くし、自らの価値を見失った者の元へアネバルテ訪れます。その姿は今の自分とは全く異なり、自信に満ち溢れ、輝き、自分が願った理想の姿なのです」

「理想の姿ですか。でも人っていうのは自分ではない他人に理想を描くと思うんですけれど」

「それは違います。確かに人は他人と自分を比較して希望を抱きます。あの人のように強くなりたい、かっこよくなりたい、背が高くなりたい……。無意識に様々で些細な希望を、他人と自分を比較して抱きます。けれども抱く希望は他人ではなく自分なのです。強い他人ではなく強い自分、かっこいい他人ではなく、かっこいい自分。結局私たちは、他人に変わるのではなく、私自信が自らを保ったまま理想に近づけることしか納得できないのです」

咳ばらいをし飲み物を飲んで依頼主は話を続ける。

「話をもとに戻しますが、アネバルテは自分の理想の姿でやってきます。つまり長老への答えは、アネバルテは会いに来なかつたけれど、理想の自分が会いに来た、というようなものです。もちろん勘のいいものは、その理想の自分が、アネバルテが姿を変えたものと気づきますが。私は島民ではないので会っていないのですが、ここに住む島民は長老を含め、自分自身の姿に変化したアネバルテに一度会ってい

ます。しかしそれはアネバルテの偽の姿。無論、島民にふさわしくないものところへアネバルテは来ないので、アネバルテの真の姿を見たことがあるものはほとんどいないでしょう」

「ということはつまり少なくとも仮の姿のアネバルテを探すには、自分に劣等感を持ち、」

「自信を失ってはいるが、その状況を払拭したい、理想の自分に近づきたいと強く願い、努力しているものがあることが条件です。その方のそばにいればやってきたアネバルテの仮の姿に会うことはできるでしょう。確実とは言えませんが、アネバルテに会うのにはそれが一番の方法なのです」

グランが一瞬、こちらを見た気がした。

誓約

「それにしても、どうしてグランはあんなことを言ったんでしょか」
商店街を歩きながらルリアは私に聞いてきた。多分、私についてい
けて言ったことだろう。その理由は私が誰よりも知っているのだ
が、それをごまかすように私は言う。

「グランにも何か思惑があったんじゃないかな」

――

アネバルテについて長老と依頼主に話を聞いた私たちはアネバル
テの搜索を開始した。といっても、島民となるにふさわしい資格を
持った者の前にしか現れない星晶獣であるから、いくら島をしらみつ
ぶしに探そうとも見つかる可能性はほぼない。

「だがな、島民になるにふさわしい者の前には来るのだ。だからそ
れを利用すればアネバルテに会うことはできる。今の時点で、この島
に来てから1日経っていない島民希望者が全部で5人いる。残念な
がら、その5人の居場所はわからないが。1日の間は自由に過ごして
もらっていいと話してあるからな。ここに5人についての簡単な情
報が載っている。その5人を見つけて、もしその者がふさわしい者で
あれば、アネバルテに会うことはできるかもしれん。すでに会ってし
まった可能性もあるがな」

「どのくらいの割合の人が島民になるにふさわしいと認められるん
ですか？」

「島民希望者の中ですか？ 100人に1人いるかいらないかな。」

「けっこう渋いんですね……」

「そんなことはない。これは決してテストなどではないからな。自分
の胸に、自らを高めんとする強い心があればたやすいことだ。だがそ
のような強い心の持ち主はそういないというだけだ」

「じゃあこの5人を見つけても会えない可能性は？」

「無論高い、可能性が0というわけではないが。だがまあ、今でも毎日
2, 3人の島民希望者が来ているから、いずれかは会うことができる

だろう。見つけるのは時間の問題だな」

「分かりました。受けた依頼はちゃんとこなすので、それまでお世話になると思います。よし、じゃあこの5人の捜索にでも行こうか。ルリアとビィを合わせて全部で10人いるから2人で1組という感じ。あと……、ルリアはジータと一緒に捜索してもらえる？」

「えっ、はい！、わかりました！」

「ありがと。5人の誰かを見つけたらうまく話しをつけて一緒にいって行つて。長老に頼まれて、とか言えば大丈夫だと思います。もしそれでアネバルテが現れたら……どうすればいいですかね」

「アネバルテは星晶獣ながら結構話すのが好きなようだな。わしも会ったときはその場で雑談をしたものだ。わしと瓜二つの存在と会話をするのは奇妙な体験だったが。だから話しながらどこかに連れていくことができよう。この家まで連れてきてもらうのが、あとのことを考えれば一番簡単だろうか」

「そうですね。ここまで連れてくるのは難しいかもしれないけれどそこは頑張つて。失敗してもまた次があるから気にしないように」

「ここまで連れて来たらわしがこの島全体に響く鐘を鳴らそう」

「了解です。鐘が鳴ったらルリアとジータは戻ってきて。よし、それじゃ捜索を開始しようか！」

――

「思惑ですか。まあグランのことなんで、そうですね」

私は頷き、ルリアの手を引きながら歩いていく。私たちはドラフ族の男性を探すことになっていった。けれど写真を見た限りでは悪人面の彼は、長老から見ても島民にふさわしくなかったらしく、アネバルテとの遭遇は見込めないと断っていたが、グランはその人の捜索を私とルリアに任せた。依頼主と長老、カタリナを含めた団員たちはこの決定には首をかしげていたが何も言わなかった。これもグランに対する信頼のおかげだろう。私も何も言わなかった。こうすることで、ルリアがアネバルテに会う可能性が一番高くなるからだ。

グランは気づいている。多分古戦場の前の日、私の部屋に来たあの

日よりも前から。古戦場での私のがんばりも、その努力が空回りしたことも気づいている。そして、この島にきて、この島の島民となるための条件に、自らに自信がなく心を病みながらもあきらめることなく努力を続けている、という条件に私があてはまっていることにも。だからグランは、私にルリアを付かせ、いや、ルリアに私を付かせたのだろう。

それがグランの作戦だろう。なら私もその作戦に従い、成功させないと。

「あれ？、なんだか星晶獣の気配が近づいてきます。それもこの島のみんなの周りにいつもいる小さな気配じゃなくて、もつと大きな……」

「ほ、本当に？」

私もその存在に気づき始めていた。島に近づくとつれ私の心の奥底をつついていた謎の存在が、いままさに私のもとに向かっていることを。

「ど、どうしてでしょう。この近くにさっきの5人の中の誰かがいるのでしょうか、わあっ！」

「ルリアちよつと急ぐけどいい？」

私はルリアの手を引き小走りになる。星晶獣が暴走し、その力をルリアが吸収するときには戦闘になることが多い。人通りの多い商店街で、それはまずい。

「ジータ？、こんなに急いで、どこに行くんですか？」

「ちよつとねー！」

私は急いで商店街から出ようとするが、さすがに始めてきたばかりで道がわからない。視界の隅に薄暗い小道を見た私は、無理矢理に方向転換し、その小道に駆け込んでいく。ルリアも振り回されながらも何とかついてこれているようだ。

残念ながら勘は外れた。長く薄暗い小道の先には明るく開けた場所が、中央にきれいな噴水のある円形の広場があった。商店街と同じくらいの人通り、けれどもその中で私はある一点に視線を奪われていた。少女が、噴水の淵に腰かけていた。

声にならない息が口からもれる。足が止まる。急に止まった私に、ルリアは転びそうになったが、私はそれに気にすることもせずただその女の子を見ていた。

白銀に朱と蒼を纏った煌びやかでドレスのような衣装、黒いショートパンツにすらっとした脚。その美しい姿には全く似合わない金の刺繍がほどこされた大きな剣。そして、いつも見慣れた顔が、いつも以上の笑顔をして、私に視線を向けていた。

『ようこそ私の島、再興の島へ。もっところっちへ来て』

その女の子は口を動かす。聞こえるはずのない微かな声が、私にははつきりと聞こえていた。

「ジーター、いきなり走ったり、止まったりどうしたんですか？ もう、無視しないでくださいよ、いったい何を見ているんで、えっ、あれ、ジータが2人いる……！」

そう、噴水には私が座っていた。姿もそうだが、服装までもが瓜二つだ。服装は以前、バルツでデیفエンドオーダーが発令されたときに私たちも参加して、その時にザカ大公にもらったものだ。一目で気に入る、剣を使うときは着ることにしていた。

私は再びルリアの手を引き、ゆっくりと彼女のもとへ歩み寄る。服装や剣の細やかな刺繍が見えてくる。と同時に、目の前の私が本当の私とはまるで異なる存在であることが分かってくる。最も大きな違いは……自信だ。

あふれんばかりの自信。他人から信頼されている、認められている

という自信。団長という肩書きを裏切らない強さを持っているという自信。そして、私がいま最も切望しているもの。

「これが……私の理想の姿……」

『そうです。そのためあなたはこのまで来たんでしよう』

こうなりたい。こうなるためだったら艇を降りてもいい。唐突に頭の中に浮かんでいた思いがあふれる寸前、私の手が強く引かれた。

「ジーター、あなたは私の、私たちの大切な仲間です！ みんながジータのことを信頼してるんです、だから、だから自信を持つてください……！」

本当に？、と尋ねかけた私は自分の過ちに気づいた。なんて馬鹿なんだろう。信頼されたい、認められたいと思うがあまり、私がみんなのことを信じることを忘れていた。それでいて勝手に疑心暗鬼になって、自信がなくなって、落ち込んでいたなんて。簡単なことだったのに……！

「あなたには大切な仲間がいるのですね。あなたなら大丈夫、この島に住まうともあなたならすぐに答えを見つけられる」

いつのまにか噴水のところまで来ていたみたいで、目の前には瓜二つの私が優しく話しかける。そして手を強く握ったルリアが、目に涙を浮かべて私の顔を覗き込んでいた。心が軽くなる。奥底のもやもやした感情が抜けていく。

「ごめんねルリア。でもおかげで私は変われそう……」

「本当に？ 私、ジータがすごいがんばっているの知ってますから。みんなのことを一番に思っているの知ってますから。だから……」
「大丈夫。心配させてごめん、ほら、泣かないで。依頼をこなしちやおうよー！」

目をぬぐい、ルリアは笑顔を見せる。

「はいっ！ ……星晶獣アネバルテ。あなたがこの島の方々を支えているたくさんの星晶獣の本体ですよ。私たちはあなたのことを救いに来たんです！」

「私を？」

私たちはアネバルテの横に座りこの島の実情を告げた。1年前から外にでていく島民が少なくなっていること。今いる島民たちが以前のように快活ではなくなってしまったこと。そして、みんなが自信を無くし島全体に疑心の空気が漂っていること。

アネバルテは私たちの目をしっかりと見て私たちの声を聞いてくれた。すべてを聞くと、悲しい顔をして数瞬言葉をためらい、そして開いた。

「申し訳ないです。私も気づいていたんです。けれどもどうにもできなかった。1年前にちよつとしたことがあり、それから私が少し心を痛めていたようです。その感情が、心を支えている私から島民の方々へ流れ出し、この島を変えてしまったのかもしれない。」

「やっぱり1年前に……。何があつたんですか？」

「いえ、些細なことなので……。それで私は私のしていることに意味があるかわからなくなってしまうと、何も改善しないままずると……」

「そんなことないです！ この島のみなさんもすごく感謝しているんです！ さつきアツプルパイを買った店主の方だって、私がおいしって言ったたら一瞬だけすぐうれしそうな顔をしてました。だから、あなたのやっていることに意味がないなんて、そんなこと言わないでください！」

ルリアの言葉に、アネバルテは微笑む。

「私はその言葉が聞きたかっただけなのかもしれません。他人に認められない人を助けようとしながら、私自身も誰かに認められたかった。ありがとうルリアさん、ジータさん」

ルリアの表情も明るくなり、自然と私の表情も和らぐ。

「さつきまで悲しくうずくまっていたあなたの心が今はとても暖かく感じます。もう、この島は大丈夫でしょう。そうだもう少しおしゃべりしませんか？ ねえ、いいでしょジータ？」

「うん、いいよ。私はグランに任務完了を報告してくるね」

それに謝りたいこともあるし。

ルリアとアネバルテの笑顔を確認して私は長老の家に戻る、はずだった。いつもなら気づく範囲の危険に、この時の私は気づけなかった。

私のすぐ横を何かが過ぎ去った。驚いて振り向くと同時に、どすつという鈍い音がする。目の前の光景に私の頭は全く反応できず、理解もできなかった。

エルーンの若い女性が震える両手にナイフを持ち、それを私の姿をしたアネバルテに深々と突き刺していた。

「な、んで……」

「おまえが、おまえさえいなければ彼は死ななかつたのよ！」

「な、なにをしているんですか！」

私はすぐに女性をアネバルテから引き離す。女性はほとんどの抵抗なく離れる。私はすぐにアネバルテの様子を見るが、星晶獣だからナイフで刺された場所から血は流れてこない……。ほつとしたのもつかの間、悲痛な叫びが響きわたる。

「あ、ああ、だ、だめです！　そ、そんなっ！」

「ルリアー、どうしたの！」

「ア、アネバルテの心がすごく暗くなって、今にも壊れそうなんです！」

「このままだと……」

「ナンデ。ドウシテ。ワタシハ、タダワタシハタスケタイダケダツタ
ノニ……」

「アネバルテー、私たちがいるからっ！」

「アネバルテー、しっかりしてください！　はっ！」

直後アネバルテの様子が変わりだした。心の黒い感情があふれ出したかのように、来ていた銀色の服が黒みがかっていく。持っている

剣は、離れていてもわかるほどの冷たく黒い空気纏っている。そして、瞳が何もうつさぬ虚ろな目へと変わっていく。

「ああ、そんな……」

ルリアが膝から崩れ落ちる。でも私はあきらめなかった、あきらめたくなかった。私を変えてくれたかけがえのない存在を放っておくわけにはいかない！

「ルリアー、あきらめちゃだめっ！ 立って、何か方法があるかもしれない」

「方法ですか……、もしかしたら今の状態のアネバルテの黒い部分だけを吸収できれば救えるかもしれません……けど、できるかどうかは……、うわっ！」

「……ワタシハ……」

黒く冷たい剣をルリアへと振り下ろそうとすべく腕を上げるアネバルテの間にすぐに私は入る。剣を抜刀し目の前に持つてくると同時に火花が弾けた。あまり戦闘が得意ではないのかそこまで力強い剣ではないが、傷つけることができないため、こちらから仕掛けることができない。

「くっ、ルリアやってみて！ 私がアネバルテの動きを抑えるから」

「わ、わかりました！」

両手を前に伸ばし目をつむるルリア。そのまま動かないが、だんだんと交わる剣からの力が弱くなってくる。

「どう？」

「大丈夫そうですね、うっ……」

ルリアがいつも以上に苦しい表情を見せるが、私にはルリアを信じることしかできなかった。数秒間時が止まったかのようにすべてが静止し、そして突然意識を失って倒れるアネバルテを私はなんとか支えることができた。胸に刺さったナイフをゆっくりと抜き、先ほどまでとは変わって穏やかな表情をした身体を地面に優しく横たわらせる。ルリアも全力を尽くしたのか、荒い呼吸をしている。ルリアにお礼を言おうと近づくと私はさらなる異変に気付いた。

「ルリア？……」

「来ないで……ください……来るなっ！　だ、だめだって、違うんです……うわあっ！」

「ルリア！、どうしたの！」

「アネバルテの暗い感情が……、……どうしてどうしてそんなことを思っているの、ジータ？」

「な、なにを言っているの……」

「私は……旅のじゃ、邪魔なんですか？　帝国軍に引き渡す？　存在が怪しい？　そ、そんな、どうして……？　今まで一緒に旅をしてきたじゃないですか……」

「そんなこと思っていないよ！　ルリアは私の大切な仲間で……」

「だってあなたの心がそう言っている……。今の言葉も全部嘘……。ジータ、そうだったんですか……。どうして今まで仲良くしてくれたんですか、これなら……」

そんなこと思ってなんかいない！　そう叫ぼうとした私は、すぐに異変の理由に気づいた。アネバルテの中に瞬間的に生まれた莫大な量の暗い感情を無理矢理吸収したせいじゃないか？　そのせいで、存在しないはずのの悪意が聞こえてくるのかもしれない。だとしたら……

「ルリア！、今すぐ吸収したものを外に出して！」

「わ、私はあなたを信じることができない……。ち、違う、私は何を……。わかってるんですジータ……。なんで、ドウシテ……」

いやそれじゃだめだ。外に出して私が倒せたとしても、この暗い感情はさまよい、また犠牲者を生む。ルリアは今にも意識を失いそうで、このままだと吸収したものが外にあふれてくる。このままだと、いや、手はある！

不意に浮かんだ策を省みる時間はなかった。すぐに私は、ルリアに叫んだ。あとはルリアの意志の強さを願うだけだ。

「ルリア、とにかくミスラを召喚して！　お願い！」

「もうやめて！、グランもそんなこと言うの……！　ミスラ……。分

かりました、いやだ、こつちに来ないで！、ああ……」

ルリアの身体が輝き、多数の歯車を組み合わせたような奇妙な恰好をした星晶獣が姿を現す。と同時に、力を使い切ったのかルリアの身体が倒れる。とっさに飛び出し、なんとか私は体を支えることができたが、その体から黒い瘴気が流れてくる。時間はもうなかった。

「ありがとうルリア……。ミスラ！、ルリアがアネバルテから吸収した暗い感情は私が受け持つ！。そして永久に、外に出すことなく私の心の中に持ち続けることを誓約する！」

歯車が高速で回り始める。ミスラが誓約を承認したのか、レンズのような場所が光から照らされるとともに私の意識は薄れていった。視界にぼんやりと、ルリアの身体から出てきた黒い、黒い何か、私の元へと吸い込まれていくのを目にしながら。

現実と夢の狭間で

「おーい、ジーター！」

名前を呼ばれた気がした。あれ、私は今どこにいるんだろう。何をしていたんだっけ……。目を閉じていたことに気づき、ゆっくりと開いた私の視界には新鮮な緑が飛び込んでくる。どこまでも続いているような空には雲ひとつなく、柔らかな日の光が心地よい風と共に私に伝わってくる。懐かしさを体全身に感じ、私は気づく。ここは、外の世界を夢見た昔の、私の故郷の……。

「ジータってばあ、怒るなよ〜！」

名前が呼ばれた。振り向くと走ってくる1人と、飛んでくる1匹のシルエットが見えた。それは、だんだんと鮮明な形を描いていき、気づけば見知った二人へと変わっていた。

「グラン。それにビィ。あれ……！」

あれ、なんか、幼くなった？ 私の知っているグランはもつとたくましくて頼りがいがあった……。――

「どうしたんだあ、ジータ？」

「ううん、何でもない。……それより、2人はどうしたの？」

「どうしたのって。そりゃ俺がジータのことを怒らせたみたいだから、こうやって謝りに……！」

「ジータが出て行ったあと、こいつすごい落ち込んでよお。言いすぎちゃったなあ、とかぶつぶつ言ってたからさあ。ジータも許してやってくれよ〜！」

そうだ。お昼を食べているときにグランに、やっぱり力関係で考えれば女の子は男の子には敵わないって言われて。それに私は怒って家を出て、いつもの修行場所に行こうと思って……。

ついさっきのことが、まるでずっと昔のことに思えてくる。違う、やっぱり昔の出来事のはずだ。でも、実際に今私はここにいる。私は、もつとたくさんの冒険を、たくさんの仲間としたはずなのに。仲間……。みんなはどこに……。

「なあ、ジータ。本心じゃなくてさあ、たまたま口に出ちゃっただけな

んだよ。だからさ、ほら、今日も修行しようぜ」

「えっと、うん」

「よっしゃあく、仲直り終わり！ ほらビィも行くぞ！」

強く手を握られ、引かれる。鍛え上げられているはずの掌とは違い、思った以上に柔らかいその感触に違和感を覚えながらも、私はグランに走ってついていく。向かう場所は、毎日修行している、修行していた場所だ。

いつもの修行場所についてから、私とグランは剣を構えて向かい合った。といっても木刀だ。普段使い慣れた、魔物も人も斬れる剣じゃない……、普段ってなんだっけ。私は今まで木刀しか使ったことが……あれ……。

「気を引き締めろよジータ！、とりやあつ！」

勢いよく走りながら木刀を振り下ろしてきたグランの動きは今の私にとっては緩慢だった。必死な表情に対してゆっくりな動作に少し驚いて反応が遅れた私だが、その一振りを難なくかわし、そのまま自分の木刀を横に薙ぐ。力を込めたつもりはなかったが、それは腹部にクリーンヒットし、グランは3mほど飛んでいった。

「えっ！ お、おい、グラン大丈夫か。あ、あれ、ジータってこんな力あつたっけ？」

私とビィは急いでグランのところへと向かう。幸い大事には至っていないようで、苦しい表情でお腹を押さえながらも笑顔を見せている。

「い、いやあ、ジータも考えたな……。元々の、自分の力だけだと、はあ、弱いから、木刀に魔力を、ふう、纏わせただろ。それなら、力の強い奴とやりあっても、戦えるからな……」

「なるほどなあ。考えたなあジータも。さっきのグランの悪口に怒って出て行ったときに思いついたのか？」

そういえばそうだ。無意識にやっていたけど。それにこれはカタリナに教わった方法で……、カタリナ？、カタリナって、あれ……？ そうだ、カタリナはどこ？

「にしてもよお、いつの間にそんな魔法覚えたんだ？ グランはジータがこんなことできるって知ってたか？」

「いや、俺も初めてだ。まさか隠れて練習して、うわっ、なんだあれ！」
私の思考はグランの叫び声によってかき消された。村の方角、見上げれば帝国軍の戦艦が灰色の煙を空を覆うかのように漂わせながら、悠々と飛んでいる。

「ん？ ま、待てまてまて！ なんだありや！ ありやあ、どつかの国の戦艦か？ なんだってこんなド田舎に……」

「あっちは村のほうだ。なんだか嫌な予感がする、事故が起きたかもしれない。ジータ、ビィ、戻ろう！」

グランが走りはじめ、ビィがそれに続く。私も遅れまいとついていく。修行場所を抜けて森に入り、また森を抜けて少し上り、すぐに下って小川を越え……、そうこの川の少し先で……

「きゃあ！ いったた……」

グランが蒼い髪をした女の子にぶつかると。そうだった、ここで会ったんだ、ここが始まりだったんだ。

「な、なんだこのお嬢ちゃん？」

「ルリア……！」

「えっ、ど、どうして私の名前を？」

「そ、それは……うっ……」

不意に視界がぼやける。まるで夢を見ているかのように暗闇に覆われ、方向感覚も失ったかのように私は行き場を見失う。この状態は永遠に続くのか……、不意に不安を抱いた私だがすぐに視界は晴れ始めた。ただ少し時間が経ったのか、次に飛び込んでいた光景はだいぶ異なっていた。グランが剣を抜き、その視線の先にはポンメルンがいて、さらに7つの首を持つ竜、ヒドラが獲物を見定めるかのように首を動かしている。

「まずはそのガキからですネエ！ 己の運命を呪うといいです

よオオツ！」

そうだ。ここで私は……

考える間もなく体が動く。まさにヒドラの凶爪がグランを引き裂こうとするその刹那に、飛び込んだ私の両手がグランの身体を押し倒していた。グランという対象を失った星晶獣の凶器は、そのまま私の身体に襲い掛かる。

「がっ、はぁ……」

鋭い痛みと朦朧としていく思考を感じながら私の身体は地面に叩きつけられた。身体全体の血管がどくどくと脈打ったかのように感じられる。けれど私はほっとしていた。今回もグランを無事に助けることができた。それに、大丈夫なはず。私はこの後……。

「なっ、おおい、しっかりしろよ！」

「ジータ！ おい、ジータ……」

「そ、そんな。これじゃあ、私にも、もう救えませんか……」

えっ……ルリア？ だって……前は……

「それに私の命だって安くないんです。あの時だって私、命の共有を本当はしたくなかったんです、あの後何度後悔しましたっけ。やっぱり自分の命なんだからちゃんと考えて行動しないとですよね？」

な、なんで……

「1つの艇に2人の団長はいらねえよなあ！ まあ、2人でもいいけどよ。でもグランのほうが人望は厚いし、ジータは邪魔だから、ここでいなくなつてよかつたんじゃねえか？」

ビィまで……

「ジータ。俺は昔からお前のことが嫌いだった。何かとお姉ちゃんだからって俺に対抗してきて面倒くさかったし。俺が親父のいる星の

島に行くって決意した時も、なら私も行くってついて来ようとしやがって。まあ、うまく事が運んでよかった、ありがとうポンメルン大尉。このことは、一人の少女が野生の魔物に襲われて亡くなった、『不幸な』事故だとして処理されるんだろう？」

「そうですねエ。そしてあなたは、姉を魔物に殺されたという悲劇のヒーローの肩書を手に入れ、幸先良く冒険を始められる、っていうわけですネエエエエ！」

何を言っているか理解できなかった。何も考えたくなかった。目に熱いものがこみ上げ、そのままこらえることもできず、あふれて流れていく。口を開けてもすでに声を出す力はなく、すでに意味もなくなった呼吸だけで精一杯だった。これ以上、何も聞きたくない。いつそ、もう死んでしまいたい……！

「そうか、なら殺してやるよ」

木刀を持っていたはずのグランの手にはいつの間にか真剣が握られていた。それを逆手に握り、切っ先を私の首に軽く当てる。

「苦しそうな表情だな、みじめで敗者の顔だ。今楽にしてやるよ。お前なんかこの世に存在すべきじゃなかった。人に憎まれて死んでいく自分の人生を恨むんだな……」

最後の力を振り絞って血がにじむほど歯を食いしぼる。目を閉じたかったが、魔法で縛られているかの如く私の身体は動かず、最後の望みさえ許されなかった。そして……嘲るような表情をして剣を振り上げたグランは、何のためらいもなく獲物を私に……。

もう目覚めたくない。途切れる意識の隅に聞こえてきたのは、今まで信頼してきたグランの、ビィの、ルリアの、仲間たちのあざ笑うかのような卑しい嗤い声、そして胸の奥にあり私を今まで支えてきた私の心が崩れていく音だった……

――

夜。

空の上を艇は、次なる目的地へ向けて静かに飛んでいく。微かに船

が、まるで自らが生きていることを主張しているかの如く音を発しているが、それ以外は音もなく、静寂に包まれている。すでにほとんど
の団員達は眠っているようだ。一握りの人間は起きているだろう、趣味で夜更かしをする者、外の様子を確かめている者、そして看病をする者。

あの日。搜索開始から1時間後、俺は島に響きわたる鐘の音を聞いた。すでに島民希望者を1人見つけ同行していた俺とビイはその音を聞くや、すぐにその場を離れ長老の家へと向かった。ジータが俺の目論みに気づいたのはわかっていたから、ジータとルリアがうまいことやっただろう、とすでに依頼をこなし終えたかのように俺の心は気楽になっていた。

けれども俺の予想とは全く異なることが起こっていた。長老の家に着くと、依頼主がひどく不安そうな顔ですぐに俺たちを家の中に案内した。そして何が起こったかを俺たちに説明した。

「3人が倒れているという連絡があったんです。うち2人は双子のようにそっくりな少女で、もう一人は蒼い髪をした少女だと言われて。私たちはすぐに救急隊を派遣して、ここに連れてくるように頼んだんです。今は容体は安定しています」

応接間の奥にある部屋に入るとベッドが3つ並んでいて、それぞれのベッドで1人の少女が眠っていた。ルリアと、ジータと、あとはジータの姿をした星晶獣アネバルテだろう。ほかに数人の看護師が部屋にいて、見守ってくれている。

「でもどうして3人が倒れていたんですか」

「それについては目撃者が多数いたので話を聞きました。今、弟が事件の発端となったエルーンの女性に話を聞いています」
「分かりました」

十数分後、応接間から長老とエルーンの女性が出てきた。女性は一

度俺たちに深々と頭を下げ謝罪すると外に出て行った。

「うーん、目撃者の話を総じてても何が起きたかがいまいちわからないのだ。あとは当事者の3人が起きてくれればいいのだが」

「彼女は？」

「ああ。彼女の話によるとアネバルテをナイフで刺したらしい」

「アネバルテを？ どうしてですか？」

「彼女はこの島に来て恋人を作ったのだが、その彼が半年前に自殺をしてしまったらしい。島の記録にもちゃんと残っている」

「自殺を……」

「ああ。もともと責任感のある真面目な方だった。だが、真面目な人のほうが、心を病みやすい。実際彼もそうで、さらにアネバルテの心の支えがなくなったことで自らの才能をあきらめ、人生を悲観し、命を絶った」

「そ、そうでしたか」

「その時から彼女はアネバルテに恨みを持っていたようだ。それで今日たまたまジータさんとルリアさんたちを見かけたときに、ジータさんにそっくりなもう一人に気づいて、すぐに感づいたのだろう。そこからはほとんど無意識だったようで、家にすぐに帰り、凶器を持って戻り、そして……」

けれど、戦闘を主とした星晶獣ではないとはいえ、凡人のナイフの一撃でダメージを受けるわけがない。それにそれだけならルリアとジータまで倒れたという不可解な事実は残ったままだ。

「そのあと女性はジータさんに引き留められたようで。放心状態で、何も覚えていないと言っていた」

「ほかの目撃者の話は？」

「ありました。ほかの目撃者の方々の話は私が聞いたので私から説明します。話をまとめると、まず、刺されたアネバルテがルリアさんに襲い掛かったらしいのです」

「えっ、どうしてルリアに？」

「私にもわかりません。それをジータさんが止め、何かをルリアさんに指示したようです。そしてアネバルテは意識を失ったようでした。」

しかし、今度はルリアさんに異変が起きたようなのです」

「今度はルリアがですか……」

「はい、そしてもう一度ジータさんがルリアさんに何か叫んで、そうしたらこれは私にもわからないのですが、歯車を模した緑色の星晶獣が姿をあらわしたようなのです」

「歯車で緑色だと……ミスラか？ でもどうして……」

「直後にルリアさんは意識を失ったようで。そしてジータさんが何かを叫んだあと同じく意識を失ったということですよ」

長老と依頼主の話の反芻するが答えは出ない。ミスラ……、誓約を司る星晶獣だが、どうしてジータはそんなものを召喚させたんだ？

何か、誓約をしたのか……。

「長老！ アネバルテが目を覚ましました！」

「分かった、今行く。グラン君、行こうか」

「はい」

ジータの姿をしたアネバルテに、俺たちは事件の詳細を聞いた。しかし、ほとんどのことをアネバルテは覚えていなかった。

「エルーンの女性の方が私を刺して、そのあと私はすごく悲しくなっちゃって……。すみません、そのあとのことは覚えていないんです」

「そうですか……。分かりました。あとの2人が何か覚えていると思うので気にはしないでください」

「はい……。でもどうして2人も……。私、2人に何かしてしまったんでしょうか……」

その後すぐにルリアも無事に起きた。けれども、ルリアからもあまり情報を得られることはできなかった。

「アネバルテがすごい苦しそうだったので、私が力を吸収して……。確か全部吸収したはずなんですけど……。ごめんなさい、そのあと何が起こったかは……」

「そうか。あとはジータが起きてからか……。ルリアは気にすることないからね」

俺はルリアの頭を撫でながらジータのほうを見た。時折苦しそうな表情を見せながらも起きる気配はなかった、そして次の日もジータは目を覚まさなかった。

何度も、何度も

「えっ?、もうこの島を出発されてしまうのですか?」

「はい。依頼は無事こなすこともできましたし、ほかの依頼や、それに俺たちにもやらなければならぬことがあるので」

「けれども、ジータさんは目を覚まさないですし……」

「それはそうですが。医者には病気も傷も見られず、いたって健康といわれたので……いずれ目を覚ますと思います。それまで依頼もないのにお世話になるわけにはいかないのです……」

「そうですか……分かりました、今日のいつごろ出発しますか?」

「夜まではいようと思います。それまでに食糧とか買わなければならぬものもあるので。それとジータを艇まで運ばないと。こつちから団員を連れてきますので、彼らが来たら案内をお願いします」
「分かりました」

ジータたち3人が倒れた次の日、俺は島を出発することを決心した。本当はジータが起きるまでこの島にいたかったのだが、そう悠長に過ごせない理由が郵便で来ていたのだった。

団員たちに状況を説明しに、夜グランサイファーに戻ると、ある団員に宛名が不明の手紙が届いたことを伝えられた。中身を見てみると黒騎士からのものだった。帝都アガスティアでの動きが活発になってきていること。重要な何か港から帝都まで運び込まれた形跡があること。そして、これは推測だがという言葉の後にフリーシアが何らかの行動を起こす可能性がある、と書かれていた。ルーマシー諸島でロゼツタを助けた後、黒騎士、傭兵の2人、そしてオルキスは情報収集を続けるとして俺たちの艇を降り別行動をしていたが、いまここに手紙が来たということは急を要するのだろう。居場所はよろず屋にでも聞いたに違いない。

ジータのことは心配だ。事件の真相を知りたいという気持ちもある。けれども、フリーシアはそれ以上に危険な存在だった。どちらが最優先なのかもわかっていた。それに、ジータが俺の立場だったとし

ても決断は変わらないだろう。

その夜のうちに団員達には明日の夜には出発する旨を告げた。長老や依頼主には急になってしまいが明日告げることに関し、自室に戻った俺は予想外の疲労を自覚し、それに対抗することもできず、気が付けば次の日の朝を迎えていた。

朝食も食わず真つ先に長老の家へと向かったが、ジータは目を覚ましていなかった。夜中まで様子を見ていたのだろう、ルリアとアネバルテが椅子に座ったまま静かに眠っている。俺は起こさないように部屋を出て依頼主を探し、今日の夜に島を出ることを伝えた。

依頼主に伝えたあと朝ごはんを食べていないことを思い出し、艇に戻りながら商店街で何かを買おうかと店々を覗くと、すでに変化が現れていることに気づいた。照明を少し明るくしたかのように、商店街全体が明るく、暖かい。それは小さな変化、いやこの島での小さな再興であり、再び島が元の活気ある場に戻ることは明確だった。すこし気分が和らぎ、昨日ルリアたちが食べていたアップルパイを思い出し、店を見つめる。一つ買い、その場で食べて感想を言うと、女店主は笑顔でお礼を言った。依頼は成功したんだな、という実感と達成感があふれ、艇にいる仲間へのお土産にさらに何個かパンを買っている。女店主は笑顔で手を振りながら俺を送ってくれた。

艇に着くと、俺は何人かに声をかけ買い物を頼んだ。さらに、オイゲン、ソリツズ、ジンの3人にジータのことを話し、艇まで運んでくれないかと頼んだ。3人はジータの容体を聞いて驚愕の叫び声をあげ、快く了承すると、艇にある余りのベッドを担いで長老の家へと走っていった。3人の騒がしきでジータが起きることを期待して頼んだのだが、運ばれてきたジータはやはり目を覚ましていなかった。買い物を頼んだ仲間も戻り、依頼主に報奨金をもらった俺たちは日が沈む頃に島を出た。島を出る直前に、アネバルテを刺したエルーンの女性が来て俺たちに泣きながら謝ったが、彼女の行動とジータの今の状況の関係が未だつかめていない俺は怒ることも許すこともできない

かった。

そして、長老、依頼主、アネバルテ、エルーンの女性らに見送られた艇は黒騎士たちの待つ、帝都アガスティアの近くの島、ネアル島へと向かった。

――

ノックの音にまどろんでいた俺は起こされた。夜中。再興の島を出発したグランサイファーが静かに空を進む中、俺は一人ジータの看病を続けていた。といっても看病とは名ばかり、時折苦しい表情を見せるだけで、熱はなく汗もかかないジータをただ見守っているだけで変化のない状況に、俺はうつらうつらとしていた。

「誰?」

「私です」

「ルリアか、どうしたの? 入っていいよ」

ゆつくりと扉が開きルリアが入ってくる。ジータを一瞥して少し悲しい表情になり、俺の近くの椅子にちょこんと座る。

「ジータ、起きませんか?」

「うん。時々苦しそうな表情をするけど、あとは変わらないよ。熱もないし、本当に、ただ眠っているみたい」

「だとしたら……何で起きないんですかね……」

「分からない……」

沈黙、というよりは少し気まずい空気になり俺はルリアに話しかける。

「そういえば今日の朝、昨日ルリアたちがアップルパイを買ったパン屋さんに行ってきたんだよ。あれ本当においしいんだね。俺も無意識でうまいって言っちゃってき、そしたら店の女性が笑顔でお礼を言ってくれたんだよ」

「本当ですか!?!」

顔に笑顔が戻ったルリアに俺は大きく頷く。

「うん。俺もちゃんと依頼をこなせたんだ、島を救えたんだって思っ
てうれしくなったよ。騎空士になって良かったって思える瞬間だよ
ね」

「そうですね！ 私も少しうれしくなりました、ジータにも早く教え
てあげたいですね、私たちが島を救ったっていうことを……あれ？」

不意にルリアが少し驚いた表情になり、目をつむる。

「どうした、ルリア？」

「島にいるときは気づかなかったんですけど、ジータの中に星晶獣が
いるんですっ」

「えっ？、でも」

「はい、この島に来る前はいませんでした。それに私の意識がなくな
る直前もたぶん……」

「アネバルテが心を支えてるわけじゃ……ないよな」

「はい…、ジータは自分で自分を取り戻す方法を見つけましたから。
星晶獣アネバルテもそれがわかっていたので、力をかすようなことは
しませんでした。だからジータの中にいるのはアネバルテじゃない
はずです」

「でも再興の島にはほかに星晶獣がないはずだし……、ジータの
中の星晶獣が何なのかわかるか？」

「それなんですが……ジータの心の深いところで堅く結びついている
みたいで、よくわからなくて……。でも接触ぐらいなら……」

ルリアが目を再びつむる。そして数秒間の沈黙の後、ルリアが突然
驚いた顔をし、そして同時に、ジータが目を覚ました。

――

ジータはただ2つのことを望むようになった。自分の死と、永遠の
眠りだ。

ザンクティンゼルでグランに無抵抗のまま殺されたジータは、気が
付けばまた存在していた。頭上には青空が広がり、懐かしい記憶が脳
を刺激する。そこは、ポート・ブリーズ群島だった。心地よい風の中

にジータは見つけた。ルリアがいた、カタリナがいた、ラカムがいた……そしてジータは再び裏切られた。死ぬ間際まで心から信じた者たちから恨みともいえる感情を浴びせられ、最後にはグランに空高く翔ぶグランサイファーから果て無き地へと落とされた。

そしてまた、目覚めた。記憶に懐かしい風景と、心を通わせた仲間がそこにはいて、そして裏切られ、ジータは殺された。そして……

何度も何度もジータは目覚めた。常に頭上には青空が広がり、目の前には思い出として記憶に残っている光景が展開された。それらの記憶は仲間と出会った場所、うまくいった依頼のような暖かいものであるはずだった。けれどもそれらは汚され、結末は変わらなかった。

ジータはすぐにこれが夢だと気づいた。現実世界で気を失った瞬間に何をしていたかとも思い出し、これが星晶獣アネバルテの心の闇が見せる幻覚であることにも気づいた。だからひたすらに耐えようと思った。耐えれば、本当の世界の、本物のグランやルリアが助けられる、そう信じて。

けれども、現実と相違なく創られた夢の世界で、それが幻覚だとわかっていても、信じた仲間たちから重ねられる悪意はジータの心を蝕んでいった。いや最初から蝕まれていたのだった、アネバルテの心の闇を自らの心と結びつけてしまったその時から。純粹に人を助けようとしていたアネバルテの心を傷つけたナイフの一振りは、ジータの思う以上の闇をアネバルテの心に産んでいた。

最初のうちジータは抵抗を続けた。グランに、仲間たちに必死に声をかけた。この世界が現実ではないとも分かっていたので、自らが本当の世界で目覚めようと努力した。それが叶わないと知るや、ジータは自らで命を絶とうとした。いくら幻覚といえ、本物とまるで違わない彼らによつて嘲られ、いたぶられ、そして殺されるのは耐えられなかった。そうなるよりは、とジータは思い、そして行動に移った。

いつものように頭上には青空が広がり、そして目の前には記憶の片隅に残っていた思い出が展開されていた。腰に短剣がぶら下がっているのを確認したジータは、それを手に持って首に近づけた。まだ怖いという感情はあった。手が震え、けれどもこの後に起こるであろう

状況を思うとやめることはできず、歯を食いしばり、一思いに……。

一思いに、一思いに……！

短剣は届かなかった。まるで魔法にかかったかのように手が動か
なかつた。そして、後方から聞き覚えのある足音が近づいてくるのを
聞いていた。結末は……常に同じだった。

誓約が彼女自身を縛っていることに、ジータは気づかなかった。永
久にアネバルテの心の闇を持ち続けるという誓約。そして自殺はま
さにそれを放棄しようとする行動、つまり誓約に反する。しかし殺さ
れる場合は、自分の意志ではないので誓約には反しない。ジータに自
らの運命を決める自由はなかった。

自殺をする機会があるたびにジータはそれを試みた。そしてその
どれもが失敗に終わった。救いはなかった。アネバルテは救ったが、
ジータを救うものはいなかった。

度重なる苦痛や悪意に、ジータは次第に慣れ始めた。身体は痛みを
感じなくなった。心は何をも感じなくなった。まるで第三者である
かのように、ジータは自分自身が殺されていくのを見た、何度も見続
けた。そのうちに願うようになった。自らの死を。そしてこのつま
らない茶番劇が二度と繰り返されないことを、つまり二度と目覚めな
いことを。

次にジータが目を覚めたのはグランサイファアの自室だった。
ベッドのそばにはグランとルリアがいた。すでに習慣となつてし
まった自殺を試みるため、ジータは身の回りを探し、壁に剣が掛けら
れてのを見るとベッドから立ち上がり、それを手に持って抜刀し、軽
く手を振って首を刎ねようとした。そこにはもう、ためらいはなかつ
た。

「ジータッ!!」

やっぱり自殺できなかった。刃が首に当たる寸前で、グランが邪魔
をしたのだった。弾き飛ばされた剣が壁にぶつかり大きな音を立て
る。それを無表情のまま見下ろして呟く。

「今までは体が動かなかったけれど、こういうパターンもあるのね」

「ジータ、な、なにをしようとしたんですか？」

「ジータ……お前……」

はあ、また目覚めてしまった。今回はどうやって私を殺すんだろう……

帝国への潜入

「じゃあカタリナ、艇とみんなのことは頼むね」

「ああ、分かっている。君たちは我々のことは気にしないで、無事できてくれればいい。それと……黒騎士!」

「なんだ?」

「ルリアを頼んだからな」

「ああ、分かっている。お前も……あの人形を……頼んだからな」

「ああ、なにがあっても必ず守り通して見せる」

「ふん……」

ネアル島で黒騎士ら4人と合流した俺たちは帝都の状況を詳しく聞いた。彼らは帝都に潜入するという無謀だが最も確実な計画も俺たちに話した。俺はそれには反対しようと思っただが、ルリアとオルキスが帝都に星晶獣に似た何かの気配を感じ、それが気になると言ったため、結果的に俺たちも潜入することになった。すでに顔が知られているものがあると見つかる可能性も高くなるため、俺たちは念入りにメンバーを考え、結果的に、俺、ルリア、ビー、ロゼツタ、イオ、オイゲン、そしてオルキスを除いた黒騎士ら3人とともに少人数で潜入することに決めた。

アガスティアに直接グランサイファーを停泊させるのは危険なので、ネアル島よりもさらにアガスティアに近い離島に艇を止めてもらい、そこで降りることに決めた。潜入メンバーが全員島に降り、カタリナに艇のことを頼んだ俺たちは出発しようとする。が、艇から降りるもう一人の影があった。

「ジータ……」

「ねえグラン。私も行っていいよね?」

「ジータ……、その……」

「ねえルリア、私に話しかけないでって言ったよね」

艇から降りたジータは声をかけようとしたルリアを遮り、すぐ横を

見向きもせずに通り返り、吐き捨てるように言った。

「……そ、そうですね……すみません」

「ジータ！」

「カタリナ、いいんだ。今はまだ……。ジータが来るんだったらこつちも心強いしありがたいけれど」

「ああグラン、そういうのもいらない。それと別に一緒に行動するわけじゃないから。私も帝都には興味があるからついていだけで、のろかったら置いていくつもりだし。あと私がいなくなっても探さなくていいから、探されるのも面倒くさいし。その時は私は退団したつてことで」

「……分かった。でもできれば離れてほしくは……」

「だから、ああもう面倒くさいな……。そういうのいらないうって言ったよねえ？」

「……分かった」

不安の残る中、俺たちはカタリナたちと別れ、島を進んでいく。港から2時間ごとにアガスティアへの連絡艇が出ているためそれに乗るつもりだった。アガスティアに着いた後は徒歩で少し進み、ある村から出ている乗り合いの騎空艇に乗って帝都のすぐ近くまで行くことになっていた。アガスティアに行くのはまだ楽なのだが、そこから帝都に入るのは、警備が厳重になるため困難を極めるが、それはまだ先の話。俺たちは計画通り無事にアガスティアへの連絡艇に乗ることに成功していた。ここからは1時間ほどの船旅だ。

連絡艇にのる乗客はそこまでいなかった。帝都に行くのには直行便が出ているため、この連絡艇はそこまで需要がないのだろう。日が沈み始めるのを外の風に揺られながらじっと見ていた俺は、横から誰かが近づいてくるのに気づいた。

「あららく、気づかれちゃったか」

「ドラंकか。お前が一人で俺のところに来るのは珍しいな……。何か用か？」

「いきなり手厳しいね、君は。いやあ、この事件がひと段落着いたら

多分黒騎士も僕たちの契約を切っちゃうからさあ。今のうちに次の就職先を決めようと思つてね〜……つてそんな険しい顔しないでよ、冗談だからさー！」

「今は雑談をする気分じゃないんだ、もしそうなら別の奴とやってくれ」

「そうだね〜。本当はね、今君が悩まされていることについて聞きに来たんだ。……君の姉の、ジータ団長は一体どうしちゃったんだい？」

ジータが目覚まして数日が経っていたが、艇の雰囲気は悪くなっていた。俺とルリアはジータが起こした行動について口外はしなかったが、団員たちはジータとルリアの態度から何かしらの異変を感じ取っていた。けれどもそれを口には出さず、俺も何も説明しないまま改善策を思いつかずにいたので、悶々としたまま俺たちは数日を過ごしていた。

ジータが1日ぶりに目を覚まし、俺とルリアは喜んだ。が、その喜びはすぐに消えた。目覚めて真つ先に自分の首を刎ねようとしたその行動自体に頭理解が追い付かなかった。その場にいた俺は驚きのあまり声を発することもできず、自殺をしようとしたジータを止められたことだけが不幸中の幸いだった。

最初に口を開いたのはルリアだったと思う。彼女はその性格上ジータを心配して、おそろおそろジータに声をかけた。

「ジータ…今何をしようとしたんですか……」

「見ればわかるでしょ？ 自殺だよ、まあ未遂に終わったけれど」

「……ど、どうしてそんなことを……」

「どうしてつて、グランが……、こいつが……！ はあ、なに怒ってるんだ私は……いつものことなのに」

何事でもないかのよう淡々と話していたジータの口調が突然熱を帯びる。未だ理解が追い付いていない俺は何も口にできず、ジータの剣を弾き飛ばしたその余韻を掌に感じたままぼーっと立っていた。

目の前にいる人が、ギター姿をした別物だと思って、いやそうあつてくれとも願った。

「グランが、なにをしたんですか？」

「うるさいなあ。どうせまた同じなんでしょ。最初はそうやって仲間のふりをして、突然裏切つて。楽しいよねえ、突然裏切られて、困惑して、泣き叫ぶ元仲間の姿を見るのはさあ！ さすがにもう慣れたくらいいいけど、いまましいからさ、ほらさっさとやつてよ」

「なにを、言ってるんですか？ 私たちは裏切るなんて……」

「はいはい演技が上手ですね。それにのってあげればいいのか？、ねえ、だまされたふりをすればいい？ いいよ、望み通り何でもしてあげるよ、裏切られて泣き叫ぶのも、命乞いをするのも、拷問を受けるのも。だからさ？、早くこの退屈な私の人生を終わりにしてくれない？」

「ギター……すみません、私ギターの言っていることが全然わからない。……。何があつたんですか、うわっ！」

突然剣を持っていた俺の腕が持ち上がった。ギターが無表情のまま剣先を手でつかみ持ち上げている。鮮血が掌からこぼれて床を濡らす、まるで痛みを感じないかのように表情は変わらない。そのまま反応が遅れた俺から剣を取って柄をつかみ、ためらいなく切っ先をルリアに向けた。

「ああもううるさいな。自分のことは殺せないけど、他人はどうなんだろう。いい機会だしやってみようか。どうせこれも夢なんだからさあ、別にいい、よねー！」

剣を振り上げそのまま振り下ろそうとするギターに俺はすぐ動いた。思考もなく、まるで反射のように反応した俺は間に入って防具でギターを止める。鈍い金属音に続き、予想外の剣の重さに驚き足を踏ん張るが、がら空きになった腹に回し蹴りをくらい、そのまま壁まで吹っ飛ばされる。自分の知っている以上に強い蹴りに俺は動けず、苦痛で歪む顔で見上げることしかできない。

「うーん、楽しい。さんざん痛めつけられた相手の苦しい顔を拝むのはいいねえ。思えば今まで何の抵抗もなく殺されてきたからねえ、次

はもつと抵抗してみようか。さてルリア、次はお前の番だよ」

「ジータ、ほんとどうしちやっただんですか……！、いつものジータに戻って……」

「その今にも泣きそうな表情いいねえ、でももう飽きちやっただな。ほら、死んで」

剣が振り下ろされる。痛みには動けない俺にはその光景はひどくゆっくりに感じられた。再び無表情のまま剣を振り下ろすジータの顔から目を離すことなく、歯を食いしばるルリアの目からは涙があふれる。その水滴さえもがゆっくりと落ちる圧縮された時間の最中、ジータの持つ剣はルリアの首に当たる寸前で動かなくなった。

「ああ、やっぱりだね。まあ想像はついてたけれどね。やっぱり夢の中では私以外の人を殺すことはできないのね。でもこれで始まるでしょ？ ほら早くしてよ、早く殺してよ！」

「ルリア……、俺はジータと二人で話すからこの部屋から出てもらっていい？」

「……はい、分かりました」

「もし不安ならカタリナとか、だれか起こしていいから。でもこのことは誰にも言わないで、ね」

「はい……」

――

「……それからジータと話をしたけど何も進展はなかった。最終的には、今回は長めのストーリーなのね、つてことで勝手に納得していたけれど。あとは団員には危害を加えないことを約束させたけれど、今のジータだとそれをずっと守ってくれるかも怪しい。今のところ何も起こってないけれど、団員たちはルリアとジータの態度から何かが起こったことに気づき始めてる」

「ふうん、なるほどね。それでグラン団長も原因がわかっていないと」「全く分からないってわけじゃないんだ、でも……」

ジータの言葉から、目を覚まさずに時折苦しんでいだあの1日の

間、夢の中で何度も虐げられたのだろう。そしてその悪夢から目覚めても、まだ夢の中にいると勘違いしている。さらに、その原因は再興の島で、何かをミスラに誓約したこと。その内容さえ分かれば解決に一步前進するのだが、俺にはそれを直接聞く勇氣はなかった。第一、気を失った寸前のことを覚えているかも怪しい。事実、ルリアとアネバルテに記憶は残っていなかった。

「ごめんね。僕はただ話を聞きに来ただけだから、今は君に何か言えるわけじゃないけれど」

「いや、いいんだ。俺も誰かに話を聞いてもらいたかったし……もうすぐアガスティアに到着するだろう？、みんなに声をかけてくるよ」

無事アガスティアについた俺たちは気づかれないように村まで歩いて進んでいく。黒騎士によると、夜中にその村から出る騎空艇に乗るようだった。幸いあまり遠い村ではなく、休憩しながら歩いても十分に余裕があった。何事もなく村までの行程を進んでいったが、ルリアが時折ジータに声をかけようとしてやめ、イオが無理矢理話題を作ってルリアに話しかける場面が何度かあり、それを見るたびに俺は胸が痛くなった。

村までついた俺たちは、艇が出る場所を村人に聞き、その時に起きたハプニングによって軍の兵士らにみづかり一時はどうなることかと思っただが、突然現れたエルステ帝国軍大将アダムに救われ、さらにエルステ帝国を倒すことによってエルステを救ってくれという願いを聞く。さらにもう一つの星晶獣、デウス・エクス・マキナなど急な話に驚く俺たちだが、黒騎士の考えもあってアダムの考えに乗り、無事にエルステ帝国への潜入を果たすことができた。そしてアダムに見ていただきたいと言われた施設へと案内されるのだった……。

知りたくない事実を探して

「ここが、デウス・エクス・マキナによって精神を抜き取られた者たちが運ばれてくる場所です」

「まるで眠っているみたい……」

イオが地面に雑然と並べられた人たちを見てつぶやく。俺たちは、大将アダムに見ていただきたいと言われた施設に連れてこられた。薄暗く冷たい空気の中、被験者と呼ばれ今では人形のように動かない者たちが広い空間にどこまでも続いている。

「眠っているわけではありません。考えることも動くこともせず、ただ呼吸を繰り返して命を終える彼らは機械や人形の類です。彼らはもう二度と起き上がることはないでしょう。精神に干渉する力をもつ星晶獣、デウス・エクス・マキナは人の精神を破壊したり創造したりすることはできません。彼らの能力はただ、精神そのものを抜き取り、移動し、別の器に入れるということ。もちろん抜いた精神をもとの器に戻すことは可能です。しかし、彼らの精神が今ではどこにあるのか、それはすでに分からなくなっているのです」

「そんな……」

「けれども、フリーシアはなぜデウス・エクス・マキナを？ その能力はフリーシアの目的とはだいぶ違っていると思うんですが」

「フリーシアの目的はアーカーシヤの起動、そして歴史の改変。そのためにはルリアとオルキス王女殿下の両方の力が必要なのですが、予想外の妨害にあったことで、別の方法も探し始めました。そして、デウス・エクス・マキナを使って大人数の精神を疑似的に星の力に変換する方法を見つけました。彼らはその実験の被験者、そして間もなく帝都の全住人の精神を利用することで計画を成功させようとしています」

「帝都の全住人ってことは……約百万人ってことか!」

オイゲンが驚いて声を張り上げる。それに対しアダムは静かに首を縦に振る。

「それほどまでに彼女の決意は固いのです」

「あの子ども全力でこの国の、いやこの世界の歴史を変えたがっているのね……」

「なあ、アダム。さつき言っていた精神に干渉する星晶獣テウス・エクス・マキナのことなんだが、その精神っていうのは心と同じ意味なのか？」

俺はさつきの話で気になっていたことをアダムに聞く。もしそうなのであれば……

「私は心についてはよくわかりません。しかし精神を抜き取られるということはただ肉体のみになったということ。思考もできずただ横たわる人形のような彼らには心は宿っていないように思えます。だから私は、精神への干渉は心への干渉と同じように考えても差し支えないと考えます」

「そうか、分かった」

微かに希望が見えた俺に、突然ドラックが話しかけてくる。

「ごつめーん！ 悪いんだけどさ、お話、終わった？ 最後のほうは質問コーナーみたいになっていたけどさあ。まあ、それはいいとして、どうも僕ら、見つかったっちゃったみたいでね〜」

「敵襲……。それもかなりの数……」

スツルムが剣を鞘から抜く。と同時に、俺の耳にもだんだんと近づいてくる多数の足音が聞こえてくる。状況を判断したアダムがすぐに指示を出す、それに黒騎士は反対するのだった。

「地下道に通じる裏口があります。そこから商店街まで行くことができます。あなたたちの艇には指示を出してありますので、そのまま我々が来た通りの道に戻れば彼らに会うことができますでしょう。私が時間を稼ぐので、あなたたちはそこから逃げてください」

「だが、ここから逃げたところでどうする？ せっかく帝都への潜入に成功したのに、まだ我々は何も得ていないだろう。それなのにこんなに早く脱出してしまったら、それこそ何のために危険を冒してここまで来たんだか……。それに、再度潜入できるかどうかさえ怪しいんだ。私は……このまま強行突破する」

黒騎士が剣を抜き、足音が近づく方を見据える。それに応えたのは

オイゲンだった。

「アポロ、それは無茶だ。この人数じゃあさすがに戦力が足りない。ここは一度引くんだ……！」

「……そんなのはわかっている！　だがやつとだ、やつとここまで来たんだ！　やつとオルキスが人形になった原因が分かり、その解決策もわかった。それなのに、今ここで逃げたら……！」

「アポロ、冷静になるんだ！　今ここで強行しても何も得るものはないかもしれない。いや、最悪お前の命が失われるんだぞ！、そうしたら艇で待つオルキスちゃんはどうなる？　お前の野望は？　何も成し遂げられずに終わってしまうんだぞ」

「……くつ、こんな時ばかり父親の顔をするとはな」

「実の父親なんだ、娘の心配するぐらいしか能がねえ。よし、グラン！、ここは一度撤退するぞ！　艇まで戻って仲間を連れて本番というじゃねえか！」

「ああ、オイゲン！　黒騎士、俺たちは必ずフリーシアの計画を止める。フリーシアも言っていただろ、戦略的撤退だって。まさにそれだよ。じゃあ俺がしんがりを務めるからみんなは先に裏口から外に逃げて！　アダム、一番つらい役を任せてすまない」

「いいんです、それが私の、エルステ帝国のための役割ですから」

アダムが裏口まで案内し、扉を開ける。だが間に合わず、帝国軍に見つかってしまう。

「見つかったか……、みんな先に逃げて！　俺もあとから行くから」

最後のルリアとビイを裏口から逃がし、俺は剣を鞘から抜く。ここで少し時間稼ぎをすればみんなが逃げるのも楽になるだろう。アダムと俺の2人に対し、重装備に身を包んだ帝国兵らが50人ほどこちらに向かつてきている。すぐに戦闘は始まるだろう。彼らが気にせず床に横たわった被験者たちを踏んでいくのを見て、剣を握る手に力が入る。

「アダム、さつき帝国兵を何十人も戦闘不能にしていたよな、ならこの集団にもできるのか」

「はい。しかし先ほどより私に対する警戒が強いので時間はかかるで

しよう。さきほどの不意打ちという面もありましたし」

「そうか……来るぞー、んっ?」

突然俺たちの後ろから光が差し、振り向くと一体の星晶獣が姿を現していた。美しい姿をしたその星晶獣は掲げた両手にエネルギーを集め、そして帝国兵に向けて放つ。一瞬の爆発音と閃光に身体が強張るが、おかげで十数人を戦闘不能にできたようだ。

「ユグドラシル! ありがとう!」

ユグドラシルから鈴の響きのような音が発せられる。俺はその音から感謝の意を感じた。役目を果たしたのか、ユグドラシルの身体が光り輝いて消えていくの見届け、その後ろからルリアとビィが姿を現す。

「ルリア、ビィ、助かったけどどうして逃げていないんだ!」

「ジータがいないんです!」

「えっ、どうして? 裏口から逃げ……いや言われてみれば見てない」「金髪の女性の方ですか? それならさつき施設の奥へと歩いていきましました」

「アダム見てたのか? くそ、なんで……。アダム、すまないがこの場は頼む、俺はジータを探しに行く」

「私も行きます!」

「オイラも行くぜ!」

「まあ、ダメだって言ってもついてくるんだよな。よし、俺のすぐあとを走ってくるんだぞ! アダム、頼むね」

「分かりました」

「よし、行くよ!」

俺はユグドラシルの攻撃でできた帝国兵の隙間を縫って行こうとするが、そうはさせまいと俺たちに気づいた兵たちが集まってくる。やっぱり戦闘は避けられないか……

「キルストリーク」

唱えると同時に魔力を込めて掌に風を集め、それを投げる。槍のように細長い凶器と化した風はさらに周囲の風を纏いながら直進して

いき、轟音とともに帝国兵へと襲い掛かっていく。ほかの魔法で敵を弱体化させたほうが威力は高くなるが、今はそこまでの時間はなかった。けれどあまり精錬された兵ではなかったのか、あまり威力の高くない攻撃に多くの兵が身体を自由を奪われる。道は無事開けた。

開けた道を、まだ無事な兵士が埋める前に俺とルリア、ビィは駆け抜ける。横たわり人形のように動かない被験者を踏まずに走るのに手間取ったが、なんとか走り抜け振り切った。部屋を出る扉まで着き、後ろを振り向くと必死に走ってきたルリアの後ろにいつの間にか移動していたアダムの背中が見えた。

「裏口にもこちらにも兵は進ませません。ご心配なく」

「ありがとう、アダム」

――

「ねえ、フリーシアってどこにいるの？ 案内してくれないかなあ」

「だ、誰が貴様なんかに教えるか！ エル、ステ王国ので、敵なんかに……うわああ……」

直後鮮血が飛び散る。地面に崩れ落ちこと切れた兵士を一瞥し、次の目標を探すべくあたりを見回す影が一つ。

「死ぬまでして守りたいことかなあ。まあ、いいや、まだほかにもスペアはいるし。さあ、誰が教えてくれるかなあ」

周りには武器を折られ、戦闘不能にされた帝国兵が数十人倒れていた。

――

「そういえばさつき、ユグドラシルがルーマシーで本体の自分を魔晶から助けてくれてありがとう、って言っていました！」

「ユグドラシルが？ そっか、なんか照れるな。ああ、俺からもあるんだけどさ、さつきアダムから星晶獣デウス・エクス・マキナの話があったでしょ？ あれの手でジータを救うことはできないかな」

「どうやってですか？」

「うーん、ジータの心に縛りついている星晶獣だけを移動させられれば一番なんだけれど」

「私にもまだ分かりません。けれど、ジータの心と星晶獣はすごく密接につながっているので、星晶獣だけっていうのは難しいかもしれません。もしかしたら、ジータの心ごと移動する必要があるかも……」

「でもそうになるとジータはあの被検体みたいになるんだよね？」

「そうですね。だからデウス・エクス・マキナに頼るのは難しいかと……」

「そうか、じゃあやつぱり……」

アーカーシヤを使うしかないのか……

部屋を出た俺たちはジータを探すべく施設内を探索していたのだが、実験施設として使われているのだろう、多くの部屋と通路があるせいでなかなか見つけれられないでいた。一度道に迷ってしまうともう外に出られそうなほど複雑な構造は侵入者を阻む意味もあるのかもしれない。

「なあグラン、あれって……」

ビイの言葉に俺たちは立ち止まり、視線の先に顔を向ける。細い通路に帝国兵が一人いた。壁に背を預け、首がぐんと下がっている。……死んでいた。

「ルリアは無理して見なくていいからな」

「は、はい……」

つい先ほど亡くなったようだった。死人はあまり見たことがないし、見たいとも思わなかった。やむをえない帝国兵との戦闘は何度もあったが、怪我による戦闘不能や戦意喪失を狙うように心掛けていた。それらはすべて直接言われたわけではないが、ルリアが願っていることでもあった。特に俺たちと会ったその時に命の危機に瀕したわけだから、ルリアは普通の人以上に死を恐れていた。それは、仲間の死はもちろん、見ず知らずの他人の死に対しても同じだった。

けれども今それが目の前にあった。それも亡くなったのはここ数分の出来事だろう。ここは軍の施設で侵入者といえれば……俺たちだけなはず。考えられる選択肢はほとんど残っていないなかった。

「ビィ、ルリア、最初にいた部屋までの道はわかるな。きつとまだアダムがそこで待っているだろうから、2人は先に行ってくれないか。ここからは俺一人で行くから」

「いいえ、私も……ついていきます」

「ルリア……もしかしたら……」

「それでも……やっぱり仲間ですから……」

「オイラも行くぜ、目を覚ましてやらねえとな」

「そっか、分かった。ありがとう」

それ以上何も言わず、俺は立ち上がって道を進んでいく。帝国兵の死体は一つだけではなかった。目印のように進むたびにそれはあつて、また血の跡までもが俺に道を教えてくれた。数分後、少し大きめの部屋へ入る扉の前に俺たちは立っていた。

取っ手には血の跡がついていて、触った俺の手が赤く色づいた。それに気づくのと同時に、俺は手が微かに震えているのにも気づいた。ここを開ければ知りたくない事実が、けれど知らなくちゃいけない事実が俺を迎えるのだろう。たぶん俺の予想は、見当違いであつてほしいと願う俺の予想は当たる。でもこの扉を開けるまではそれは単なる予想だ、しかし開けてしまえば事実が変わる。それが、嫌だった。俺は、知りたくなかった。

「グラン？」

「えっ、ああ何でもない、開けるよ」

「はい」

鍵がかかっているという最後の願いも崩れ、扉がゆつくりと開いていく。奥には予想以上の事実が待っていることをまだ俺たちは知らない。

相対する

扉を開けた俺の目には飛び込んできたのは一面に倒れた兵士の残骸。正常ならば異臭を感じただろう鼻は麻痺したのか何も感じない。無数の亡骸の中心には、白銀を主としたはずの装備を真っ赤に染め上げ、見知った顔に虚ろな表情を漂わせ、一人の少女が立っていた。手に持った剣からは今まさに命を刈り取ったのであろう、鮮血が垂れ、地面に落ちる微かな音を立てている。

手は震えたままだった。とっさに扉を閉めようと、取っ手を握ろうとするがうまくつかめなかった。見せたくなかった。ジータを最も信頼しているルリアとビイには。見て後悔するのは俺だけでよかった。けれども俺から逃げるように扉は逃げ、開いていき、惨劇の目撃者は増える。

「……ジータっ……」

消え入る声でつぶやくルリアは全身の力が抜けたかのように肩を落とし、顔はなんとか目の前を向くも崩れるように座り込んでしまった。ビイも悲しそうな気まずそうな表情のまま下を向き、うつむいている。俺は、何も言えなかった。

「あーあ、見つかつちやったか。あれほど追いかけてこなくていいって、探さなくていいって言ったのに。ほんとに、もう、ほんとうにめんどろくさい……」

「ジータ、なんでだよ、何回も、何回も言ったじゃないか、ジータがこんなことする必要ないだろ」

「うるさい……」

「どうして信じてくれないんだよ……ねえ、どうして……」

「うるさいなあ」

「この世界は本物なのに……あの悪夢からジータはもう……解放されているの……」

「うるさい！ ……そんなの、もうわかってる！」

「……！」

……

ジータが目覚め、自殺未遂をした後、俺はルリアを外へ出しジータと2人きりになった。腹を蹴られた痛みはだいぶ軽くなっていたが、俺には何を話せばいいかわからなかった。自殺をしようとした理由を聞けばいいのか、昨日のあの時何が起こったか、それとも、ミスラに何を誓約したのかを聞けばいいのか……

団員達の前ではてきぱき指示を出し、依頼先とも積極的に話をし、それをジータが見守るといふ構図が団員たちの間では共通の認識になっっていることには気づいていた。まさに団長という体の俺に対し、ジータは副団長や団長補佐という役柄で自分から何かを言うことはあまりなかった。それがこの団の特色なんだなど、そう思われてもかまわなかったがそれは違う。俺は、昔からジータに頼りきりだった。世話好きのジータは幼いころから俺の面倒をよく見てくれた。いつも一緒にいてくれて、言ってしまうば年の近い母親という感覚だった。そしてそれは大きな支えだった。星の島に行くという決意を立てた時も、団を立ち上げたときも、ジータが俺にとつての大きな支えだった。些細な依頼でも、強大な魔物との戦闘でも、団員たちとの会話でも、後ろにジータという大きな支えがいるから、俺はそのすべてを自信をもって成し遂げることができた。

そんな俺だから、大きな支えであるジータと2人で会話をするのがだんだんと気恥ずかしくなっていた。甘えたいというわけではないが、大きな存在であるジータの前では常に主導権を握られているような感覚があった。といつても、ジータはいつも通りの笑顔で、他の団員たちと同じような平等さで俺に接してくれたが。

そのジータが今は全く別の人格を持ったかのように居座っていて、俺には声をかけることができなかった。長い沈黙が続き、居心地が悪くなる始め、それが嫌になったのかジータが話しかけてきた。

「ねえ、どうして殺さないの?」

「ジータ、それはもうやめてくれよ。俺とこの団のみんながジータを

傷つけるわけないだろ」

「どの口が言ってるんだか。あれだけ私を苦しめたのに」

「それは多分夢だと思う……ジータは昨日の昼頃気を失って今起きるまでずっと眠っていたんだ。その間何度か、いや何度もうなされてたんだ」

「……あれだけリアルな痛みが夢なら、グランが今しやべっているこの現実も夢の一部だろうね」

「ジータ、気を失う前に、何をやっていたんだ。アネバルテもルリアも何も覚えていなかった……。目撃者の証言から、ジータがルリアにミスラを出すように指示して、そして……ジータ？」

無表情だったジータの顔に微かに表情が戻り、その目からは涙が流れていた。自分でも気づかず泣いてたのか、それに驚いてすぐに顔をこするが、目からあふれる涙は止まることを知らないのか、際限なく流れていく。

「なんで、私は……いや、違う。今回は殺してくれるまでに時間がかかる、長めの話なのね。もうわかったから出て行って」

「え、つと、うん。でもこれだけは約束して。俺たちは誰もジータを傷つけることはしない。だから俺たちの仲間を傷つけるようなことはしないで。自分のことを傷つけるのもダメだよ」

「分かったから！」

——

「分かってる……って？」

「だから、あれが夢だってことも、この世界が現実だって事も気づいてるんだって。私が気絶する直前に何が起こったのかも、ミスラに何を誓約したのかも全部覚えてる……」

ジータが自嘲じみたように笑う。そしてその表情に静かな悲しみを見せる。

「でも聞こえてくるの。グランからもルリアからも、団員のみんなからも。夢の中で聞いた、夢の中だけのはずだった言葉がね。グランや

ルリアがどんなに私に優しい言葉をかけても、私には真逆の心が聞こえてくる。私はあの夢の中みたいになんか、また……」

一瞬目に涙がたまったかのように見えたが、すぐに無表情に戻った。剣を一振りし切った先に付いた血を飛ばしたジータはそれを肩に担ぐ。

「だからもう考えることはやめたの。私は何も考えないでたった一つの目標に向かって進んでいく。目の前に現れた邪魔者は仲間だったとしても……容赦はしない」

「も、目標って、なんですか?」

「言ったでしょ。もう嫌なの。私を殺そうと悪意を帯びた声でののしるグランたちを見るのも、それに苦しむじめな私を見るのも。私は私を殺したいの。いやそれだけじゃ足りない、また何かが私を目覚めさせて苦しめる。だから私は、私の存在をこの世界から消す」

「存在を消す?」

「アダム大将がいいことを教えてくれたよね。星晶獣アーカーシャ、歴史そのものを改変する力をもつ……。その力があれば歴史から私という存在を消すことができる……。そうでもしないと私はもう助からない……」

「そんなことしなくてもジータのことは救うよ!」

「それは……無理。ミスラとの誓約は絶対、そして果たすことはできない……永久に」

「な、なにを誓約したんですか?」

「そんなことはどうでもいいの、救われた者はそのことだけに感謝していればいいの……。もう私にはアーカーシャを頼るしかない。成し遂げるのは難しいけど私は何も怖くない。存在を消すことが目標なんだから、その道中で死んだらそれはそれで良いし……。立ち話はこの辺にしよつか。何とか最後の一人からフリーシアの居場所は聞けたから、馬鹿なことを始める前に会いに行かなくちゃいけないんだ。邪魔はしてくれないでほしいな……」

「そうも、いかない。ジータは俺たちの団の一員だ、団のみんなを守る権利がある」

「団長権限で団をやめるよ」

「団長権限でそれは受理できない」

「……グランなら何を言っても私を止めるだろうと思ってたよ、ルリアもね。それにやっぱり憎い。私が苦しむのをみんな嗤いながら見て、私を蹴つて踏んで……そして殺した。私は信じていたのに……。今すぐ私の前からいなくなってくれれば何もしいけれど、仕方がないね……アローレイン」

持っていた剣を一度地面に突き刺したジータは、手に漆黒の弓を顕現させる。そのまま無駄のない動きで矢を番えると俺たちの真上に向けて力強く引き、そして放った。

「ビー！、お前は先にみんなと合流してくれ！俺とルリアは少し遅れてから合流すると伝えてくれ」

「お、おう、わかったけどよ……無事に戻って来いよ」

「もちろんだ！ルリア、こっち来て！」

ビーが未だ開いている扉から外へ出ていくのを確認する暇もなく、俺は座り込んでいるルリアの手を握って引き寄せる。と同時に剣を鞘から引き抜くがすでに魔法の矢が広範囲にその矢先を向けて落ちようとしていた。

アローレイン、広範囲に大ダメージを与えるとともに負傷者の能力を下げる追加効果がある全体魔法。凄腕の魔術師が使えば、一度弓を射るだけで無数の矢を出現させ、戦闘不能者を多数作ることができ。そしてジータも凄腕といえる、魔法の使い手だった。ジータの手から放たれた矢は空中へと舞い上がり、俺たちを中心とした巨大な円形の範囲に降り注いだ。

「くっ、受けきれない……」

とつさにフアランクス、魔力の壁を張って威力を削ぎ、さらに剣で俺とルリアに当たりそうな矢を弾いていくが、予想以上の矢の量にすべてを防ぐことはできなかった。ルリアに当たる矢は何とか防がれているが、取りこぼしの矢が背中に突き刺さるたびに身体から力が抜けていく。

「やっと終わった……！、ルリア、ごめん！」

アローレインによる降雨のような矢の攻撃が終わるが安堵する間はなかった。謝りながらうずくまっっているルリアを横に突き飛ばし、剣を構えるとジータがすぐに突っ込んできた。その威力を全身に力を込めてなんとか抑えきる。見ると、まさにルリアがいたはずの場所に今はジータの剣先がある。

「ジータ、本気なんだな」

「その顔も、その声も、心も、すべてがもう、見たくないの！」

ジータの叫び声とともに、剣にかかる力が大きくなる。そのまま足を踏ん張ってさえも受けきれない剣の圧力に俺の身体は吹っ飛ばされた。空中で何とか姿勢を保つも、壁に勢いよく当たりそのまま崩れ落ちる。口から体中の空気がすべて抜け、新鮮な空気を求めて息を吸おうとするが、首が絞めつけられるのを感じ、さらに身体が勝手に浮いていく。

「あ、があ……い！」

「グラン！」

酸素が足りず頭が真っ白になり始めた俺の首を片手でつかみ、持ち上げるジータの後ろから光が差し、星晶獣ユグドラシルが現れる。先ほど見せたように掌に光を集めるが、それに気づいたジータは俺を部屋を中心まで投げ飛ばし、自らもそこから離れる。一瞬後にユグドラシルから放たれた光の輪が衝撃音を響かせながら壁に大きな傷跡を残した。

「はあ、はあ……ありがとう、ルリア、ユグドラシル……」

背中から地面に叩き付けられた俺は全身が求めた空気を一心に吸い、何とか立ち上がることができていた。少し離れた場所にはジータがいて、ルリアのすぐそばにいるユグドラシルをにらみつける。

「ユグドラシルは助かったのに、私は何で助からないの……、ねえ！」

ふっと空間が歪んだかのようにジータの姿が消え、ゆらぐ。白銀と紅が空を疾く。瞬きさえも許さない時間のかけらともいうべき短い時間で、ジータの手が持つ切っ先がユグドラシルの胸をとらえていた。星晶獣の驚きから苦痛へと変わるその顔を見て俺はすぐに叫ぶ。

「ルリアー！、早く戻して！」

「は、はい！」

傷を負った星晶獣の姿が消えていく。胸に刺さった剣が重力に逆らうことなく下に落ち、振り子のようにジータの腕を揺らす。

「誰も私は救えない、救うことはできない」

「いやできる！、だから……えっ、がはっ」

再び揺らいだジータの身体がいつの間にか俺の前で剣を振るっていた。手に持っていた剣は金属音とともに弾き飛ばされ、遠くへと飛ばされる。そのまま頭をつかまれ腹に蹴りをもらった俺は力なく地面に膝をつく。

「もうしゃべらないで……私を救うんだったらここで死んで」

剣を振り上げる気配がした。見上げると俺の顔に切っ先を向けたまま両腕で剣を持って立つジータの姿が見えた。その表情にまだ悲しみを纏っているのは気のせいだろうか。俺は最後の抵抗をと手に力を込める。間に合うか……でも間に合っても……

剣が突き下される。手に力を込めたまま俺は目をつむる。

顔から地面に向かって突風のように流れる風を感じ、付随して起こる轟音を聞いた。けれどもそれ以外は何も起こらなかった。目を開けると切っ先は、俺の顔数センチ手前で止まっていた。

「オニキス、ありがとう」

ルリアの声が聞こえ、視線を向けると彼女とそばにいる星晶獣、カーバンクル・オニキスの姿が見えた。宙を浮くその星晶獣は闇属性の攻撃の威力を半減するその加護効果を持ち、それにリキャストがぎりぎり間に合った俺のフランクスの効果が重なり、絶対防御となった魔法の壁がジータの剣を止めたのだった。

「……」

無言のまま剣を俺の顔から遠ざけたジータは背を向けて俺から離れていく。途中落ちていた俺の剣を拾い、そのまま手に携えてこちらを向く。

「これはもらっていく。邪魔をされなければいいんだから最初から武

器だけ奪っておけばよかつたんだ。それにまた会うだろうし。星晶獣アーカーシヤの力を使うにはルリアとオルキスの力が必要。別に帝都の住民全員の心を失わせても構わないけれど、別に急いでいるわけじゃないしね。確実に、私は自分の存在を消したい。だからルリア、また今度ね」

「ジータ……」

「それとグラン、今は急いでるからとどめは刺さないけれど、次ルリアに会いに来た時に抵抗してきたらその時は……」

俺のほうをちらっと見たジータはそのまま何も言うことなく立ち去り、あとには俺とルリアだけが残された。

共同戦線

帝都アガスティアに夜が訪れる。街には明かりが灯り、商店街は一層の賑わいを見せる。帝都の中心にそびえたつ、通称タワーと呼ばれる壮大な建造物は漆黒の様相をしながらそのさまを見守っている。が、今夜、そこから悲劇が始まろうとしていた。

タワーの一室から階下の街を冷やややかに見下していたフリーシアは先ほどの部下の報告に決意を固めていた。報告は二つなされた。一つは大將アダムの離反。これについては薄々感じていた。歴史を改変し、エルステを再興するという計画を大將アダムに話したとき、感情を持たず生きた人間でもない精巧なゴーレムの瞳に、決して見ることがないはずの明らかな反目を見たからだ。その時からフリーシアはアダムが自身の計画に内心は反対していることに気づいていた。しかし、たかがエルステ王国の僕ともいえる存在がその帝国の宰相を裏切るということは、多少なりともフリーシアに動揺を与えた。それもアーカーシャのコアを運び込み、デウス・エクス・マキナを使ったリアクターの調整も順調に進んでいたこのタイミングでの離反は……。

そしてもう一つの報告は今まで何度も計画の壁となってきたかの騎空団が軍の研究施設に侵入しているのが発見されたというもの。そしてそのなかには大將アダムの姿も見られたという。

アダムの離反に少なからずの疑問を抱いていたフリーシアはこの報告で納得した。アダム個人での離反はありえない……協力者はあの騎空団か。

最後に会ったルーマシー諸島ではユグドラシルのコアに魔晶の力を注ぎこみ、マリス化させて対抗させたにもかかわらず、その圧倒的な潜在能力の前に予想外の敗北を喫した。といってもあの作戦は、アーカーシャのコアの回収が主であったため最小限の成功は収めたのだが、まさか帝都に侵入してまで計画の邪魔をしてくるとは。

調整は順調に進んでいるとはいえ、まだリアクターの調子は万端と

は言い難い。しかし、アダムが騎空団に付いたということは計画の全容はすでに明かされているだろうし、さらにエルステへの侵入も許している。となるとこのタワーをも侵し、リアクターを止め、計画を失敗させるために行動に出ることを予想するのはたやすかった。

扉がノックされた音を聞き、フリーシアは思考を止め窓際から離れる。ちようどよかった、リアクターの本起動の指示を出しましょう。

「誰です?」

「はっ! フリーシア宰相への緊急の報告が!」

「入りなさい」

緊急の報告? 先ほどの二つの報告とは別のものなのか……

「それで、報告とは?」

「はっ! 蒼の少女を連れられたかの騎空団の女団長と思われる者がリアクターに侵入しています!」

「予想よりも早かったですね……侵入者は何人ですか?」

「それが目撃されたのはその女団長一人、ということなんです」

「一人……囷ということでしょうか……けれど何を目的に……」

「現在小部隊を先行させて制圧に向かわせていますが、すでに三部隊が戦闘不能にされています。死傷者も出ています……。それとその女団長からはフリーシア宰相に会わせろ、と」

「私に……?」

一人で敵の本拠地に侵入して、私に会いたいと? 本来の目的は一体……

予想外の報告がフリーシアを悩ませる。そして返答に困る彼女の耳に憎ましい声色が響く。

「会ってみればいいんじゃない?」

「ちっ、ロキ、どうしてあなたがここにいるんですか?」

「この帝国の支配者がどこにいたっていいだろう? ねえフェンリル」

「オレは別に喰えればなんだったいいんだがよ……」

さつきまで立っていた窓際についての間にかロキが立っていた。そばに青い狼の様相をした星晶獣を連れて、窓の外を眺めている。

「まあいいでしょう。それで会ってみれば、というのはどういうことですか」

「僕らあの騎空団が侵入したっていう施設にいたんだよね、なにか面白いことが起きる予感がするってね。そしたら、今下で暴れている女の子が、同じ騎空団だったはずの男の子の団長と戦っててね。それも遊びとかじゃなくて本気の。最後は惜しかったね、もう少しで男の子が負けるところだったんだけど、君たちが蒼の少女って呼んでる女の子が助太刀してね」

「それは仲間割れという認識でいいのですか」

「僕にはよくわからなかったな。この世界でもまだ僕にさえ分からないうちがあるって知ってうれしかったけどね。でも女の子のほうは本当に殺そうとしてたけどね。フリーシアも会えばわかると思うよ、彼女の変貌具合に」

ただ面白いことを見たい。それだけで世界を滅ぼすこともできるロキが、今ここで嘘を言う理由がないことはわかっていた。けれどもその内容はにわかには信じがたいものだった。あれほど仲が良く団内の決断力が強いはずなのに、仲間割れを越えて殺し合い？ それに報告では二人の団長は兄弟であったはず、いったい何が？

十数秒悩んだ末、フリーシアは決断していた。時間は惜しいが会うぐらいなら構わないだろう。もし敵ならばこの場で始末すればいいし、味方なら……

「分かりました、会ってみましょう。彼女をここまで案内しなさい」

――

「こんばんはフリーシア宰相。ごめんね、会いに来たってちゃんと聞いたのに、武器を捨てるとかうるさいからさ、ちよっと戯れてきちゃった」

兵士二人によって部屋に連れてこられた女団長を見て、フリーシアはロキの言葉を理解した。何かが違う。以前ルーマシー諸島で会った時に比べて何かが……

ロキが満足そうな顔でこちらを見てくるのを無視し、不快感を押しさえながら女団長に向かって話しかける。

「たしかジータという名前でしたね、こんばんは。残念ながら私は悠長にあなたとおしゃべりをしている暇はないので単刀直入に申し上げますが、あなたの目的は何ですか。ああ、敵であれば即刻始末しなくてはならないので」

「さすが宰相、下の雑魚兵とは違って話が早くていいね。敵ではないよ、でも残念ながら味方でもないね、強いて言えば協力者って感じかな。私があなたたちに協力するから、あなたたちも私の願いを聞いてほしいんだ」

「協力ですか、それであなたの願いですか」

「お願いは二つ。一つはデウス・エクス・マキナを使うなんていう信頼性のない方法はやめて、本来の方法でアーカーシャを起動させること。もう一つはフリーシア宰相がアーカーシャを使用する前に一回だけそれを私に貸してくれること。もちろんあなたの計画には影響を与えない程度で使うだけだから心配しないで」

「それについては一応了承しました。けれども、すでにご存じだとは思いますが、本来の方法でアーカーシャを使用するにはルリアとオルキス両方の力が必要です。私もその方法で起動させたかったのですが、主にあなたと黒騎士の妨害によってそれは困難であるとみなし、リアクターを使った方法を用いるのですが」

「大将アダムもそう言っていたね。でもその方法はまだ不安定なんじゃない?」

「それもアダムに聞いたのですか? あなたの言う通りまだ不安定ですが、十分にアーカーシャを起動させる力があります。それにあなたの騎空団がすでにエルステへ潜入したという報告も受けています。時間が潤沢にあるわけではないのです」

「そうだね、グランたちもすぐに私を取り戻しにくるだろうし。だから私考えたんだ」

そういつてジータは微笑む。その時になってフリーシアは彼女の装備が血に塗られ、剣が収まっているその鞘からは血が垂れ、そしてその微笑んだ表情に浮かぶ二つの瞳が何も移さず無表情であることに気づく。敵意のないはずその姿に鳥肌が立ち、少なからず恐怖を覚

える。

「それで……計画とは」

「リアクターは今日起動させるつもりだったんでしょ？、大将アダムが裏切ったしそのおかげで私たちも帝都に侵入できたしね。フリーシア宰相は計画通り今日リアクターを起動して」

「けれどもあなたはさつき……」

「うん、だからこのリアクターは囷なんだ。グランたちが一度態勢を立て直してから帝都に侵攻するか、それともすぐに来るかは私にはわからないけれど、多分リアクターを起動して街に異変が起こるのに気づいたらすぐに飛んでくると思うんだ。あの軍の施設の被験者たちを見たけど、リアクターを起動したらこの街のみんながああなるんでしょ？」

「そうですね」

「大将さんも察しがいいからさ、多分異変に気付く。そしたら態勢が整ってなくてもさ、止めに来るんだよね。グランはそういう性格だから。それにつられて団の仲間と黒騎士たちもやってくる。アーカーシャ起動に必要なルリアも正義感が強いからきつと来るだろうし、黒騎士には反対されるかもしれないけれどオルキスもやってくると思う」

「つまりリアクターをだしにして本命をとらえると」

「そういうこと。でも帝国兵は弱いし頭が悪いからさ。今までだって何度もルリアの奪還に失敗してきたじゃん。だからさ、ここは分担といこうよ。フリーシア宰相にはルリアとオルキスの分断と、オルキスの奪取を頼むよ」

「あなたはルリアをとらえるということですね」

「そう。多分オルキスには黒騎士がくっついてくると思うから頑張つてね。タワーへの侵入は団のみんなに迷惑をかけたため少数で来ると思う。その頃には街が混乱してるだろうから、そっちの救援にも人員を割かれるしね。あとはタワーに侵入してきたみんなを使えない兵を大量に投入して少しずつ減らしていけばいいと思う。分断ができないと難しいけれどさすがにできるよね」

「それに関してはこちらで考えます。まだ魔晶もありますし、星晶獣もいるので。それにリアクターが起動すれば魔晶の力はいつでも取り出せます」

「そう、ならよかった。私は適当にルリアを捕まえて、くつついてきたグランを倒すから。オルキスを捕まえたら後はアーカーシヤを起動して計画成功というわけ」

「いくつか修正する箇所はありますが、あなたの計画で一応進めていきましよう。けれどその前に腑に落ちない点があります」

「ん、なに？」

「もともとあなたたちは敵だった。前にあなたたちに会った時もそれは変わらなかった。それなのにここにきてどうして……あなたは私たちの計画に協力するのですか？ アダムから計画の全容も結果的に何が起ころうかも聞いているのでしょうか？」

「それは、私があなたたちを裏切る可能性があるっていうことかな」

「率直に言えばそういうことですね」

「そう……」

直後目の前にあったはずの執務机が一陣の風とともに消えた。まるでもともとこの世にはなかったかのように。

「机が……」

「ふふっ、錬金術だね、それも相当高度な」

全く動じていないロキがふつとつぶやく。

「フリーシア宰相、私はあなたに協力を頼むと言ったけれどね、平等の立場にあるわけじゃないんだ。やろうと思えば私は誰の力も借りずにルリアとオルキスを奪取して、あなたたちからアーカーシヤも奪つて、私の願いを叶えることができる」

「……それならなぜ私たちに協力を」

「あなたの計画は私が協力しなければ勝手に失敗する。七曜の騎士の一人に十天衆もいる私たちの団が本気を出せば、あなたの計画なんて子供の家出のようにお粗末なもの。ただね、私は憎いの、グランたちも、あの団員達も。そのグランたちがあなたの計画の妨害に成功して、歡ぶ姿が見たくないだけ」

「……分かりました。あなたのことは信じましょう。あと二つ疑問があります。以前あなたに会ってから今日までにあなたに何があったのか、そしてあなたがアーカーシヤを起動して改変する歴史の事実と、いうのはなんですか？」

「信じてくれてありがとう。まず私に何が起こったかだけどこれに関しては今回の計画にはほとんど関係ないから説明しなくてもいいかな。強いて言えば、私とグランは今では敵対しているって事実だけでもいいかな。それとアーカーシヤを使って改変するのはね……」

――

「おいそこの兄ちゃん！、夜ご飯ならうちの店に来ないかい？ 最近開店してるからサービス多いよ！」

「本当ですか、でもすみません。なぜかさつきから頭がぼーつとして、今日は早めに家に帰ろかなって思いました」

「そっか残念だな、今度うちに来てくれよ！ おーいそこの姉ちゃん！、夜ご飯をうちで……おい兄ちゃん大丈夫か!?!、お前人を呼んできてくれ！。人が倒れた！」

街を夜が包む。突如ある一角で上がる叫び声。混乱が始まる。

嵐の前の静けさ

帝都アガスティアは裏道でさえも明かりが灯り、多少の人でにぎわっている。すでに夜も更け、早めに仕事を終えた人々が夕食を楽しむ店を選定すべく歩く街並みを、俺はルリアの手を握り、無表情で息も切らさず走るこの国の元大将アダムの後ろを追っていた。幸い、軍の兵にはまだ見つかつておらず、ゆつくりと時間が流れる街を必死に走る3人の姿に目を向ける人が数人いるぐらいだ。

ジータが去り部屋に残された俺とルリアは茫然としたまま動くこともできず、視線はジータの後ろ姿の幻を探そうと宙を彷徨ったままだった。生まれたときから一緒だった、人生の目印ともいえる存在と、直前まで命をかけた戦いをしていたことに頭が混乱し、しかし体にはその時に負った鈍い痛みが今だに残っていた。

「グランさん……一度アガスティアを出しましょう、今ここには危険です」

背後から声が聞こえ、振り返るとアダムが扉の所に立っていた。

「アダム……ああ、そうだな……。そういえばビィは？」

「ビィさんには艇の集場所を教え先に向かってももらえました。いくらあなた方が強くても軍の施設に準備もなしに侵入するのは危険なので、それならば私一人で助けに向かおうと思ったのですが……遅れてすみません」

「いや、アダムが謝ることはないよ。それにこれはうちの団の問題だし」

俺は腰に掛けてある鞆の軽さに戸惑いながらも立ち上がる。剣は……奪われたんだ。剣の納まっていないう鞆は、相棒を失ったかのように弱弱しく見えて、からっぽで、その様子がなんとなく今の自分と重なる。取り戻せるだろうか、この鞆に剣を、俺の隣にもう一人の団長を……

「ルリア、行こう」

「はい」

弱弱しいながらも返答をし立ち上がったルリアはその小さな手を伸ばし、俺の掌を力強く握る。

「グランは……私の元から離れないでください、絶対に……！」

「ルリア……うん、約束する。だからみんなであのバカ団長を取り戻そうー！」

「はい！」

「フリーシアの元にはすでに、我々の侵入に関しての連絡が届いていると思います。後続の兵が来る前に、行きましょう」

「ー」

できるだけ人通りの少ない道を進み艇を目指す俺たちだったが、街には異変が起こり始めていた。それに最初に気づいたのはルリアだった。帝都の街並みが少なり、もうすぐ目的地の艇の近くまで着くその時に、ルリアが疲労に息絶え絶えになりながら俺に声をかけてきた。

「グラン！、なんだか街の様子がおかしいんです……」

その言葉にアダムは走るのをやめて歩き始める。星晶獣を操れるルリアの言葉だから、興味があったのだろう。俺も走るのをやめて歩きながらルリアに話しかける。

「どうした、ルリア？」

「リアクターが起動を？ けれどフリーシアの作戦だと決行はもう少し状態が安定してからだったはずなのですが……」

「アダムが抜けたことで俺たちに情報が伝わったと考えて、作戦を前倒しにしたのかもしれない……。ルリア、どんな感じ？」

「再興の島の時と似ているんですけど、一つの星晶獣の小さい気配が街のいろんなところについて……それぐらいしかわからないんですけど……」

「たぶんリアクターを起動したということの間違いないと思います。これからさらに被害は大きくなることでしょう。気を失ったかのようには倒れる人が増え、街は混乱に飲み込まれると思います。精神を抜

き取られても短時間で戻せば、後遺症などの影響はないことがわかっていますが、」

アダムが小走りになり、それにつられて俺とルリアも走り始める。「精神と身体が離れている時間が長いほど、戻したときの後遺症が発生する確率が大きくなります。よく見られるのは記憶障害、意識混濁、頭痛、そして最悪植物状態のままとなります。また、ある時間を越えて別々となった状態が続くと、精神をもとに戻すことができなくなることも確認されています」

「そうなるよ……やっぱり」

「はい。先ほど施設にいた被検体のような状態のまま戻ることはありません」

「そんな……」

「だから急がなければなりません。幸い、リアクターを停止し、街の混乱を防ぐための人員は十分にいます」

「えっ？、でも俺の団の団員たちだけじゃ数が足りないんじゃないか……」

「軍の施設で皆さんを逃がすときに、ドラंकさんが耳打ちしてくれました。詳細は艇に着いてからわかることでしょう」

グランサイファーは無事に俺たちを待っていてくれた。一目に付かないところに艇は停泊していて、カタリナらいつもの面々が俺たちのことを待っていていた。そして驚くべきことに、秩序の騎空団の騎空艇や、その他どこか見覚えのある艇がいくつか並んで泊まっている。

「これは……」

「グラン、それにルリア！ 無事でよかった。ん、ジータは……」

カタリナの瞳がここにいないジータの姿を探す。そう、ジータはいない。俺は先ほど起こったすべてを説明する気になれず、気の乗らないまま事実を少し改変して告げる。

「ジータはしばらく艇を離れることになると思う」

「そうか……」

カタリナの言葉、そしてその後ろにいる仲間たちの表情にどこか安

堵した感情が含まれているように思われ、俺は複雑な気持ちになる。この一週間、何も知らされないままジータの異変と付き合ってきた。わかつていたが、少なからずジータを厄介者と感じはじめていることはきたじやないか、それなのにな……。思考が停止しかけた俺の掌が強く握られ、みるとルリアもうつぶんでいる。

それだけで、ルリアが俺と同じ気持ちでいるってことが分かったそれだけで、救われる。

「……ジータも必ず昔の明るかったジータに戻して、団にもう一度迎えるよ……約束する。それで、ほかの騎空艇は？」

「ああ、フリーシアの行動を止めるために集まってきてくれたようだ、それも皆私たちが一度会っている方々だ。誰かが秩序の騎空団に依頼を出し、モニカ殿が仲介となってほかの地域に救援依頼を出してくれたらしい。バルツやアウギユステから飛んできてくれた。にしても誰が呼んでくれたのか……」

後ろのほうで、飄々とした姿のエルーンが俺にウィンクをする。

「誰であつてもありがたいな……。これだけいけば十分だと思う。でも、どうやらリアクターはもう起動されたくて、すぐにでも止めに行かなくちゃいけないんだ」

「なんだと？」

「はい。ルリアさんが街の各地に散らばる星晶獣の気配を確認しました。リアクターを起動したことにより、デウス・エクス・マキナが人々の精神を抜き取り始めたと考えて間違いないでしょう、直接の被害は確認していませんが……」

「けれどどうする？ 騎空艇を動かそうにも、エルステ帝国の軍艦の監視を避けることが至難の業だし、いやそれ以上にタワー近くの港に停泊することは不可能だろう」

「フリーシアがすでに主要な港には兵を配備しているでしょうから、それは不可能です。しかし、国の文献にも載っていない隠し港がいくつかあります。浮力消失高度でそこまで進んでいかなければ、帝国の軍艦に見つかってしまいますが、もし隠し港までたどり着けばタワー

までの一番の近道となります」

「操縦士の腕が試されるってわけだな」

「はい。また意識を失う方が増えるため街が混乱に陥る可能性が高いので、その対処として多くの人員が必要です。隠し港はあまり大きくないので、艇は一隻が限界でしょう。また大人数でタワーに侵入するのは発見される危険性を増やすだけです。少人数での侵入がよろしいかと思えます」

「アダムはさらに帝都への侵入、そしてリアクター停止作戦の内容を続け、それに俺やカタリナが訂正を加えていく。数分後には、全員が役割を確認し、ある者たちは艇を出航させ、ある者たちは走って帝都へと向かっていく。」

「……」

「……これがリアクターです」

「なんか不格好だね。ここに帝都の住民の精神が運ばれて、魔晶を作っていくわけ？」

「ほかに方法はありませんが、ここでも魔晶を作ることできます」

「そっか……、ねえ私にも魔晶をくれない？」

「別に構いませんが。あなたはあれなしでも十分強いから必要ないのではっ。」

「私のいた団は強い人多かったからね、安全策をとってね」

「そうですか。どのくらいの大きさにしますか、もちろん大きいほうが効果は大きいですがその分苦痛も大きくなります」

「ああ、私には苦痛とか関係ないから、できるだけ大きいのをくれないいな」

「わかりました」

リアクターが微かに振動し点滅していく。そして一瞬光輝いた後、受け皿のような場所に禍々しい雰囲気を醸し出す漆黒の結晶が置かれていた。

「今の技術ではこれ以上の大きさは不可能です。魔晶が自己崩壊を起こしてしまうので。……けれどこの大きさは」

「問題ある？」

「いいえ。ただし忠告しておきますが、被検体に何度かその大きさの魔晶を使わせましたが、全員が苦痛のために死亡しました」

「そう。じゃあ私作戦の場所であいつらが来るのを待ってるから」
「……」

――

静かな夜空をグランサイファーは進む。満月は上空の帝国軍の軍艦に隠れ、また見つからないために艇の明かりをすべて消しているため暗闇の中を進んでいるような感覚に襲われる。けれども、見下ろすと遠くのほうで月明かりに輝く雲が泳いでいるのがはつきりと見えたり、見上げれば人工物の塊ともいえるアガスティアが悠々と浮かんでいるのが見えたりと、幻想的な風景が広がっている。

「いい眺めですね」

隣にいたルリアがふとつぶやく。夜風になびく蒼い髪が眼下の雲に反射した月光で淡く輝いている。

「寒くない？」

「大丈夫です。……ねえグラン？」

「ん？、なに」

「ジータは、戻ってくるんですか……」

「……約束したじゃん、信じててよ？」

「……はい」

艇は静かな夜空を、帝都アガスティアに向けて進んでいく。

侵入の裏で

「大将さんよお、ここに入っていけばいいのか？ 先が暗くてよく見えねえんだが」

「はい。艇がすべて入ったら明かりをつけて大丈夫です。見つかる危険性はなくなりますので」

ラカムの操艇技術のおかげで俺たちは軍艦に見つかることなく、浮力消失高度ぎりぎりを探り抜け、隠し港に到着しようとしていた。帝都の下に小さな洞窟のようなものがあり、グランサイファーはその中にゆっくりと入っていく。月の光さえも遮られて真っ暗な中を、針の穴に糸を通すような正確さで艇は進んでいく。失敗すれば大惨事も免れない状況を、まるで楽しむかのようにラカムはこなしていくのだった。

「にしても何でこんなところに隠し港があるんだ？」

「もともとはエルステ帝国建設時の資材運搬のために使用されていた港のようです。当時はこのような港がいくつもありましたが、帝国建設後にすべて取り壊される予定でした。しかしエルステ帝国を存続させるためには時の宰相でさえ知らない港を用意しておく必要がありますでしたので」

「宰相にも隠しているのか？ お偉いさんなの？」

「私の役目は国の宰相を守ることではありません。エルステ帝国そのものを守ることにあります」

「なるほどねえ。おっと、あそこに停泊すればいいんだな。おい、グラーン！、艇をつけるぞ」

二人の会話を聞きながら操艇の様子を見ていた俺はその場を離れ、あらかじめ決めておいた作戦の下団員たちに指示を出して回る。グランサイファーの見張りと待機を兼ねて艇に十数人残し、戦闘が得意ではない団員は街に出て混乱の收拾、残りはタワーへの侵入の補助、そして障害の排除を任せている。

港に停泊し、団員たちを艇から下した俺たちはアダムの指示のもと

道を進んでいく。長い間使われていなかったにもかかわらず隠し港はきれいだった。

「ここからは隠し通路となっています。一本道となっていますので道に迷うことはないと思います。通路は地上までつながっていて、出口は中心街の裏道となっています。そこから徒歩で十分程度のところにタワーがあります」

「途中に、兵がいる可能性は？」

「少ないながらもあります。通路の途中に広めの空間があるのでそこで待機している可能性はありますが、フリーシアはこの港の存在を知らないはずですので。大事を取って私が先行しましょう」

数十名が一列になって細い通路を進んでいく。アダムが先頭を歩き、その後ろに頭にビイを乗せた俺が、そしてその後ろにはルリアが続く。殿はカタリナや、オルキスを連れた黒騎士に頼み、徒歩5分程度の道を進む。

地上から行ったみんなは大丈夫だろうか。艇で隠し港から帝都に入る俺たちは軍艦に見つからないようにするため時間がかかるものも、一気に帝都中心部へと潜入できる。それに対して地上から帝都にはいることにしてもらった秩序の騎空団を含むみんなには、意識を失う人が続出する街の混乱を最小限に抑えるという役割を果たしてもらうことになっていた。街の周りから混乱を収めていき、街の中心部へと進み最終的に俺たちと合流するという予定だ。

しかし、アダムの話によれば星晶獣デウス・エクス・マキナは比較的ランダムに精神を抜き取る人を選ぶため、混乱を収めたとしても新たな被害者が増え続けるため完全に收拾するのは困難なはずだ。そのため中心部での合流は予定よりも遅れ、タワーへの侵入の援助は期待できないだろう。

アダムの言った通り途中に広い空間があつたが兵はそこにはいなかった。俺はひとまず安心したがアダムは腑に落ちないようだ。

「本当にこの隠し港はフリーシアに見つかっていないなかったのでしょうか……」

「ん？、だって時の宰相には知らされていないはずだったんでしょ？」

「はい。しかしフリーシアは抜け目ない性格です。宰相になる前からこのエルステ帝国については隅々まで調べ上げていました。いくら隠し港といえど、私の知らない資料に記載されている場合も考えられます。もちろん見つかっていないのであれば好都合ですが……」

一度歩く順番を変更し先に進む。出口は裏道にあるが、さすがに大人数が一度に外に出てしまうと不審に思われ見つかれる可能性が高い。そこで何回かに分けて地上に出ることになった。最初にでるのは時間的に余裕のない、リアクターを止めるためにタワーに侵入する部隊。そのあとタワー侵入を援助する部隊、そして最後に街の混乱を中心街から収めていく部隊。カタリナや黒騎士はタワーへの侵入に参加するので、前に来てもらった。その代わりアダムが一番後ろに回る。

「俺としてはアダムも一緒にタワーに侵入をしてもらいたいんだけど……」

「見つかる危険性を考えて少人数が好まれます。それに……私にできるのはここまでで、せいぜい住民の安全を確保することです。ご武運をお祈りいたします」

――

裏道から街に出た俺たちは不審に思われないように装いながら、メインの通りに入っていく。タワーの近くは中心街となっていて、店も多ければ人通りも多く、また兵も多い。しかし、予想通りというべきか、不幸にもというべきか、すでに混乱は広がっていた。

一目で異様さが伝わった。道の真ん中で倒れている人が二人がかりで運ばれていく。その先には少し前に意識を失ったのだろう、横たわった人が何人も連なっている。あらゆる場所に倒れたまま動かさない体があり、それらが無言の助けを求めているが、助けるほうもパニック状態にあり統率を図れていないようだ。兵士たちに助けを叫んでいる人もいるが、その兵士たちでさえ何が起きているのか理解できていない。

「これは……ひでえな。この混乱も最後にはなかったことになるんだ

から、我関せずって感じか、フリーシア宰相様は……うわっ、おい！」
助けを呼ぶために走っていた人が、ラカムの前で突然倒れた。頭が
がくと下がり、足がもつれ、地面に倒れこむそのさまがスローモ
ーションのように目に焼き付く。隣にいたルリアが声の出ない悲鳴を
上げる。

「うっ……カタリナ！ 後ろのみんなに俺たちの助けはいらなくて
伝えて。その代りにすぐに街の混乱の收拾と、住人の救援に取り掛か
るようになって。俺たちは先にタワーに向かってる！」

「分かった！、すぐに追いつく！」

目の前の惨状を無視したかのような罪悪感に苛まれるが、俺たちは
その場を離れタワーへと走り始める。リアクターがすべての原因で
あり、それをできるだけ早く止めることが最善の解決策なのだが、途
中で何度も助けを求められ、それを無視してまで進まなければいけな
い自分たちに怒りを覚える。それを何とか抑え込み、走り続けた俺た
ちは無事にタワーの入り口まで着くことができた。暗闇を模したか
のように巨大で真っ暗なその建造物はすでに異様な雰囲気を放つて
いて、そしてなぜだかわからないが、俺たちを迎えるかの如くその入
り口を開けているのだった。

「なあ、なんでタワーの門は開いているんだ」

「罨かもしれない。でも俺たちの最終目標はこのタワーにあるリアク
ターを止めることなんだ。だったら罨でもなんでもいい、むしろ好都
合でしょ？」

「おいグラン、さっさと入るぞ」

「カタリナがくるまで待っててくれない？ 黒騎士が焦っているのもわ
かるけど、ここからは慎重にいかないか……」

「ふん、すぐに来るんだろうな」

「当たり前だ」

内心は不安に押しつぶされそうになっていた。タワーの入り口が
都合よく開いているなんてことがあるだろうか？ それもフリーシ
アにはすでに俺たちの軍の施設への潜入は伝わっているはず。なら

なおさら警戒しなくちゃいけないはずなのに。

そしてあの場から離れたジータ。……確か、フリーシアに会いに行くって言ってなかったか？ それなのにリアクターの起動は始まっている。あれだけの強きのジータがフリーシアに会うのに失敗したのか……。いやでもここが開いているのならタワーに入ることはできたはず。ならどうして……

様々な推測がピースとなって俺の頭の中を飛んでいた。そしてそれらはうまくくつつきそうなのに、何かに阻まれるがごとく近づくことさええない。ふと視界にルリアと、黒騎士のそばに立っているオルキスが見えた。……何か、何か重要なことに気づけていない……。ピースが活性化したかのごとく、脳内ではじけ飛ぶ。

「グラン！、遅れてすまない。ん？、どうしてタワーが開いているんだ、おい、グラン？」

「あ、ああ、カタリナありがとう。タワーが何で開いているのかわからないけれど好都合でしょ？ よし、みんな行くよ」

十二人と一匹がタワーの内部へと足を運んでいく。奥へと進んでいく彼らは、背後でタワーの門がゆっくりと閉まっていくことに気づいていない。門は外の光が中へと差し込むのを遮り、一人の人影を外に出し、そしてタワーは暗闇と沈黙に包まれる。

――

「おいクラリス、何でお前はオレ様についてくるんだよ？」

「だってカリちゃんの大ききじやあ一人で人を運ぶのは無理でしょ？ だから美少女錬金術師のクラリスちゃんがカリちゃんを助けてあげようってわけ！」

「だれがお前に助けを求めたんだよ？ それにこれだけ大規模な街だ、二人で行動するよりは一人で行動したほうが助けられる人数が増えるだろ？」

「いやあくそうなんだけどさ。でもグランがさつき言ってたじゃん？、そのリアクターってやつ？、がうちの精神を奪っちゃう可能性

もあるから二人一組で行動しろってさ！　そうすればどちらかが倒れた場合でも助けることができるって」

「オレ様の場合は大丈夫なんだよ、精神を一つ上の次元に保存してるからな。だから奪われてもそこからコピーしてくれば問題はねえ、ついていてもお前のおつむじや分からねえか」

「えーなにそれずるいね。さすがうちの家のご先祖様だねっ！　じゃあうちが倒れたら安心してカリちゃんに助けてもらえるね」

「なんでそうなるんだよ……まあいい、グランの指示なら仕方ない。オレ様に迷惑はかけんなよ……んっ？」

「さっすがーカリちゃん、話が分かるね！　って、そっぽ向いてどうしたの？、あっ！」

視線の先には、2人がよく見知った人物が立っていた。一人はある依頼で初めて会いその時の縁で艇の一員に加わった。もう一人は自らを縛りつけていた封印を解いてもらったことで加わった。しかし今、姿かたちは同じでも、長い間仲間だったはずの面影はその人物にはなかった。

「よおジータ、いや今は元団長って呼んであげたほうがいいか？」

「ふふっ、カリオストロは手厳しいね」

「ジータどうしたの、ここ一週間別人みたいで、そしたら急にしばらく団を離れるって」

「クラリスと話すのも久しぶりだね、ああ、グランはそう言ったのか」

「え、そうじゃないの？」

「そんなことはどうでもいい。おいジータ、団を離れたお前でもこの街の状態はわかっているはずだ。それがオレ様の目の前に現れて、一体何の用だ？　天才錬金術師の技でも学びに来たか？」

「もう全部教えてくれたでしょ？」

「ああ、まあそうだな。お前はグランと違って、魔術も錬金術もののみこみが早かったな。おかげでオレ様の知識すべてを与えちゃったが。まあいい、こっちはグランの指示で今は忙しいんだ、話なら後にしてくれるか」

「……カリオスト口はさあ、錬金術で私の身体を意識も感覚も残したまま細かく分解してくれたね」

「あ？、なんだと？」

「クラリスは小さな爆発で私の身体を少しずつ壊してくれたね……」

「ジータ？、何言ってるの？」

「グランたちが今タワーに侵入してるんだ。でも私のところに来るまで多分時間がかかるんだ。だからさ、」

ジータがその腰にぶら下げた二対の剣の一本を抜き、その剣先を向ける。

「私が消える前に、二人には苦痛を与えて、あの時の恨みを晴らさない
とねえ！」

「なんででめえがグランの剣を持つてんのか知らねえが……やるって
のか？ いいねえ、オレ様のすべてを教えた弟子であっても、この、開
闢の天才錬金術師には一歩も及ばねえってことを知らしめてやるよ
！」

「うちはジータには恩があるけど、やっぱり前みたいな優しいジータ
に戻ってほしいから……私も手加減はしないよ！」

「ふふっ、戦闘不能にしてグランたちへのお土産として持ち帰ってあ
げるね！」

魔法 V S 魔法

くっそ、一体どうなつてやがるんだ？

もう何回目だかわからないが、疲労しきつた腕を動かしウロボロスを振って九種類の魔法を放つ。そのどれもが波長・周期はもちろん、属性、性質、付加効果が異なり、瞬間的に空中を滑るように飛んでいき、対象を指定した今、回避することはできない。今まで出会ったどんな錬金術師や魔術師でさえ、これらの魔法の性質を一瞬で理解することはできなかつた。つまりそれは魔法や錬金術でこのオレ様の魔法に対処できた奴はいなかつたことだ。一発一発がこのエルステ帝国の街並みを半壊させるほどの威力を持ち、間違えて家屋に当たってしまった暁には、そこを中心として人も物もまるで存在していなかつたかのように消し去り、あとには灰の臭いと巨大なクレーターしか残さないだろう。それなのに……

ジータが掌から出現させた小さな光球は、空中へ高速で飛び出したかと思うと、オレ様が放つた魔法とぶつかり、元の威力とはかけ離れた小さな爆発を起こし、消失した。属性も付加効果もまるでなかつたように、あっさりとオレ様の魔法を処理していく。

「カリオストロ、もうわかつたでしょ？ カリオストロの錬金術はもう私には通用しないの。あなだが、錬金術のすべてを私に教えてくれたおかげでね」

ジータの身体が揺らぐ。くっ、またか。

オレ様は空間に三重の結界を張り、さらに二人分の高硬度金属でできた盾を錬成、物理法則を無視したかのような高速で突っ込んでくるジータの攻撃の威力を少しでも減らそうと努力するが、それらもすべてが焼石に水と思えるほどジータの攻撃は圧倒的だった。

狙いは……クラリスか、よし……

時それ自身でさえも、時間が経つたと気づかないほどの極薄い時間の中に、ジータの剣先の方向を確認したオレ様は錬金術で魔法を生成し、クラリスとジータの間の空間に多数設置していく。透明なそれらの罫は目をこなしても誰も気づけないほどに光を透過し、空間に馴染んでいる。けれど何も気づかずそこに通ろうと思えば、命はおろか、肉体でさえ欠片も残らないだろう。

揺らいだジータの身体が霞み、空間を疾る。剣先をまっすぐクラリスの首に向け、一直線に飛んでいく。今度こそという願いはたやすく破られ、結果は何度も見てきたものと変わりなく、オレ様が仕掛けた罫はすべて作動せず、ジータが通った後にはその存在ごと消し去られた。三重の結界はまるでごく薄い氷壁のように破られ、金属盾は泥でできていたかのように砕けた。まあ、結界も盾も目くらましの役目は果たせたようだ。盾が泥のように砕け散るその瞬間にクラリスの下の地面に穴を生成、重力だけでは間に合わないため、その穴内の気圧を一気に下げてクラリスの身体を引きずり込む。

間一髪といったところだろうか。剣を携えたジータの身体はクラリスのすぐ頭上を飛び去った。その速度故、ジータの身体に少し触れてしまうことでさえ大怪我に変わる今、致命傷は何とか避けだろう。だが今のクラリスにとっては、ジータが過ぎ去った後の疾風でさえ大ダメージのようだが。

端的に言えば、オレ様たちはやばい状況だった。

正直、最初はジータとの戦闘を舐めていた。性格も人格も変わったとはいえ、ジータには封印を解いてくれた恩があり、最近では珍しい才能のある弟子であり、仲間だった。だから最初は、片足の欠損ぐらいで戦闘不能にしてやろうぐらいの意気込みで、魔法の威力も今の千分の一ぐらいだったか。クラリスも全力でやるとは言っていたが、やはり元団長だからだろう、爆発の威力はそれほどでもなかった。

けれどジータは違った。

オレ様の手ごたえのない魔法とクラリスの爆発を、まわりつく羽虫のように軽々と振り払うと、消えた。気が緩んでいた俺の目には跡を追うこともできず、気づけばクラリスの右肩にグランの剣の先を突き刺していた。

「えっ?、う、うわあああ……」

すぐにウロボロスを召喚したオレ様はジータに噛みつかせ、クラリスから引きはがそうとする。しかし、ジータが掌に出現させた光球をウロボロスに投げたかと思うと、構成原子がばらばらになったようにウロボロスの身体が崩壊し始めた。

「なんだと……、ウ、ウロボロス!、杖に戻れ!」

ウロボロスを一度杖に戻したが、ジータが何をしたかは理解できなかった。

「ジータ、おまえいったい何を……」

「そんなこと言ってる場合なのかな? この剣を左に薙ぎ払えばクラリスは死ぬよ?」

「ジータ……、本気なの?」

体に力が入らないのかクラリスが膝から崩れ落ちる。その肩からは血が流れ落ち、地面に溜まっていく。

「嘘だよクラリス、本気なわけがないでしょ、ごめんね?」

剣がゆっくりと引き抜かれ、それと同時に流血の量も増える。その顔には笑顔がへばりつき、目は笑っていなかった。さーつと鳥肌が肌を流れていく。

「この、くそ野郎が! それでも団長か?」

「元団長でしょ、カリオストロがさっき言ってたじゃん?」

クラリスから少し距離をとったジータは剣を振って血を振り払う。その滴が白銀の衣装に染みを残し、クラリスの顔に当たり、地に痕を残していく。

「もう二人とも分かったでしょ? 今の二人の攻撃は本気じゃなかったね? だから私も本気でやらなかったんだ。やろうと思えば今の

一瞬で二人の頭を地面に並べることだってできたのにね……。でも二人から受けたものはこんなんじゃないからさあ、二人の身体でもう少し私を楽しませてねえ！」

――

荒い息を整え立ち上がる。隣にはさつきから身動きを一切見せない少女が穴に下半身を埋めたまま俯いている。死んだか、と思ったが微かに息をしているようだ。柄にもなくほつとする。

オレ様一人なら何とかなつたんだがな。一人手持ち無沙汰がいるだけで戦闘の幅はぐつと狭くなる。

第一オレ様が本当の意味で死ぬ恐れはほとんどない。精神は一つ上の次元に保存してあり、身体もスぺアが誰も知らない場所に保存してある。死ぬ寸前に保存してある精神に記憶を保存し、それをスぺアの身体に移してやればまた活動を再開することはできる。だから死ぬことは怖くない。封印の話が別だ、あれは記憶の保存やらなにやらができるなくなるからたちが悪い。

だが仲間がもう一人いるとそうもいなくなる。オレ様が死んだら何をどうしてもクラリスも殺されるだろう。オレ様は生き返るがその他の人間はそうはいかない。だとしたらあとでグランに会うオレ様が気まずいだろうが。

だから何としてでもここは生き残ってクラリスを守ってやらなくちゃいけない。一応でかい爆発も何度か起こしたんだ、他の団員達が気づいてくれればありがたいんだが、何しろ帝都は広いから……

「ずいぶん楽しそうだな」

「うん、すごく楽しいね。他人を髑り殺しにするっていうのはほんと気持ちいいね」

「いつの間に随分と趣味が悪くなったんだな」

「何を言っているの？ 最初はそっちが私に対して始めたんじゃない。

カリオストロは私の身体を……」

「だからそれは一体何の話なんだよ？ 第一そんなことしてたら何でお前は今五体満足なんだ？」

「…………えっ?」

オレ様の言葉を聞いて初めてジータの顔が引き攣る。何か気に障ったことを言ったか?

「うるさいなあ。グランもルリアもうるさかったけど、カリオスト口も一緒なのね。夢の中で私が仲間だと思ってたみんな、私のことを蹴って傷つけて…………」

「夢? なんだお前、自分の見た夢のなかでされたことを逆恨みしてるってわけか?」

「何を言ってるの? 夢?、だってここは現実でしょ…………あれ、ここが現実なんて分かってるよ、え…………じゃあ夢って…………ワタシハ…………ううああっ!」

くぐもった声と共に急にジータが苦しみだした。以前格下の錬金術師に幻覚の魔法をかけて自己矛盾に陥れたことがあったが、あのときも同じように苦しんでいた。もしかしてジータは…………

そのまま続いてくれれば都合だがそうもいかず、すぐに仮面のような身震いのする微笑みを顔にはりつけて笑う。

「ふふっ、そんなことどうでもいいんだった。私は私の恨みを晴らせばいいんだよね、うん。そろそろ戻らなくちゃいけないから決着をつけようか。カリオスト口はどうせスペアの身体と精神があるんだよね、だからまあいいや、カリオスト口は助けてあげるよ。でもね、クラリスはだめだねえ!」

ジータの身体が揺らぐ。またか、でも今度は本気だ。なけなしの境界をすぐに張り、今度は盾を一人分しか用意しない代わりに強度を高める。さらにクラリスの身体にも防護壁を纏わせ、衝撃が伝わらないように最善を尽くす。

この攻撃が終わったら死に物狂いで逃げるぞ、だから耐えろよ…………!

しかし、ジータのほうが一枚上手だった。

白雷のごとき速さで向かってくるジータの狙いはクラリスではな

かった。寸前まで剣先はクラリスを向いていたため油断していて、急な方向転換に身体が追いつかない。結界は二人を包んでいるため効果はあるが、いつものように軽々と壊されていく。何とか錬成した金属盾も砕かれ、身体をひねり直撃を避けようとしたがうまくいかず剣先が軽く首に当たる。小さな切り傷ができたのが感じられるがこのぐらいの傷なら……ん？

手に力が入らない。いや手だけじゃない、身体全身に力が入らない。重心をうまく保てずうつ伏せに倒れたオレ様は死刑執行人がだんだんと近づいていくその足音を聞くことしかできなかった。

この状況はやばすぎる。以前封印された時も身動きを止められたんだった。あの時は麻痺を付加した魔法だったが、その時の教訓もあつて麻痺魔法に対する耐性も、物理的な麻痺毒に対する耐性も付けたはずだが……

「惨めなカリオストロ……。そのままだと何も見えないだろうからちよつと待つてね」

何かが錬成される音が聞こえ、そのすぐ後に身体が持ち上げられ、何かに座らせられる。首にも力が入らないため首の座っていない赤ん坊のようになってるのが気に障るが、首を固定する部分も椅子にはついていてみたいで、妙に居心地がいい。椅子の前には疲労とダメージによって動くことも声を出すこともできないクラリスが微かな輝きしかない瞳をこちらに向けている。

「それにしても何が起きたかわからないって顔だね。ふふつ、今教えてあげるよ。っていつても大体はカリオストロも知ってる話だね」

オレ様の知っている話？

「まず今カリオストロの身体を縛っているのは麻痺魔法。正確には麻痺を付加した爆発魔法」

だから麻痺魔法に対する耐性は完璧なはずだ。それに爆発魔法とはどういうことだ？

「まだわからないかな？　じゃあヒント！　ヒントはねえ、クラリス

の魔法なんだ〜」

こいつの魔法？ 確かこいつはオレ様の子孫だったはずだが……
「クラリスの家は、そのご先祖様がカリオストロなんでしょ？ それで何でかわからないけれどカリオストロを始末したがってたじゃん。その中で生み出したのが、カリオストロの魔法に対して致命的にまで効く爆発魔法だったんだ」

……どういうことだ。

「カリオストロの錬金術もクラリスの錬金術も基礎は同じ。でもクラリスの錬金術はカリオストロの錬金術に対抗するためだけのものだったんだ。カリオストロのが光だとしたら、クラリスのは闇って感じだね。その効き目は絶大で、さっきの高威力のカリオストロの魔法も軽々と相殺して消し去ることができるとんだ」

それでオレ様の魔法が全く効かなかったのか……

「そしてカリオストロは自分の身体を自分の錬金術でいろいろと改良していたでしょ。だから身体そのものにもクラリスの錬金術は絶大な効果を発揮するってわけ。もうわかったでしょ」

クラリスの爆発魔法に麻痺を付加してそれを剣先にくっつけ、オレ様にぶつけたというわけか。

「クラリスも優しくてね、錬金術を教えてっていったら教えてくれてね。その時に気づいたんだ、カリオストロの唯一の天敵がクラリスだってね」

すぐ横でしゃべっていたジータがクラリスのほうへと歩いていく。いつの間に抜いていたのか左右の手に一本ずつ剣を持ち、それをクラリスの頭の前で交差させる。

「よかったね、カリオストロ。あなたの天敵はこれから私の手で抹殺してあげるよ。うれしいでしょ？ ふふっ、仲間の首を持っていったらグランは喜ぶかなあ」

何もできない自分に怒りを覚えた。感覚さえも麻痺しているせいでうまく魔法を練ることができず、ただ目の前の光景を記憶する機械のようだ。

もつと警戒していれば……。もつと早めに逃げていれば……。オ

レ様は死んでも大丈夫なんだから、命を懸けてクラリスをほかの団員のところに連れていくべきだった。くそ……

ごめん……

彗星が見えた。目の機能さえ麻痺したのかと思った。上空を飛ぶ二対の星。青白く輝く尾を引き、彗星はこちらに向かってくる。そして……

「ちっ」

ジータも彗星に気づいたようだ。一度は剣を薙ぎはらってから避けようと考えたようだが、思った以上に彗星は速かった。ジータが宙返りをして後方に飛んで避けるがまるで意志を持つかのように彗星は執拗にジータを追っていく。

その時やつと気づいた。これは彗星じゃなくて、剣？

「デイエス・ミル・エスパードッ！」

どこからともなく無数の剣が飛んでくる。それらは剣の形をしているが実体はエネルギーの塊のように青白く光り、尾を引きながらそのすべてがジータを狙うがごとく刃先を向けている。

「どうしてみんな邪魔するの！ みんながやったことでしょ！ もう……クラリスだけでも……エーテルブラスト！」

「ユエルちゃん急いで！ 陸ノ舞！」

「雲龍！」

ジータから放たれた高密度の魔法の輪が正確にクラリスを狙っていく。しかし突如地面が燃え上がり、そこから狐を模した炎が立ち上る。魔法の輪がそれに直撃し、火の粉を散らして霧散する。爆炎が晴れ、見るとクラリスにはダメージがないようだ。

「フュンフ、クラリスとカリオストロの傷を手当てしてあげて。俺はジータに用がある」

姿を現したのは、穏やか表情に違和感を感じさせるほど目を怒らせた、空の世界における最強の剣士、十天衆のシエテだった。

おまけ (第14話の没話)

「それにしても、流石って感じか……」

「ん、シエテのこと？ やっぱ十天衆ともなると私たちとは強さの次元が違ってくるよね」

「……まあいい。クラリス、もう傷は大丈夫なのか？」

「うん、フュンフが完全に治してくれたんだ！ さすが十天衆だよ、治癒力がすごい！ 私もこういう魔法のほうがよかったなあー。」

「そりゃあ爆発でどつかーんもいいけどさっ」

「そんなことはいいいからここはオレ様とシエテの任せて、クラリスも行つてこい。まだまだ意識不明になってぶっ倒れる奴は増えるんだから。そのためにオレ様たちはここにいるんだろ？」

「うん、そうだね。それじゃあクラリスちゃんがんばっちゃうよお！

気を付けてね、カリちゃん！」

「お前もな」

「あとね……さつきはありがと」

「……」

クラリスが路地に入り姿が見えなくなった。ジータとの戦闘で気づかなかつたが、今でさえ街のあちこちで悲鳴や騒音が聞こえ、混乱はまだまだ收拾できていないことがわかる。オレ様達を救援しにきたソシエ、ユエル、そしてフュンフは、シエテの指示によりすでにここを離れ、元の任務にあたっていた。広大な領土をもつエルステ帝国の都市を数百人の人間がどうこうするなんて土台無理な話だと思っていたが、そうわかっているでも行動してしまうのはグランの性格が移ったからか。くそ、昔は人のためなんて考えたこともなかったが……

いや、街はほかの奴らに任せて、目の前の状況をちゃんと把握しねえと。

シエテとジータの戦闘はまだ続いていた。素人目に見ればジータの圧倒的不利がずっと続いている。なにしろシエテは戦闘開始から一歩も動いていない。その代りに奴の周りに漂う剣を模した光るエネルギーの塊、―たしか剣拓っていう名前だったか―、が高速でジータへと攻撃を仕掛けていた。それも一本二本ならまだ話は分かる。だが目の前で蜂の群れのように騒がしく飛び交っているのは数千本という単位だった。

もちろんそんな大量の数の武器が一度にジータを狙えるわけではなく、一度に攻撃するのは数十本程度。けれどもその数十本が何段にも待機しており、手を休めることなく攻撃を可能にしている。

それにもかかわらず、シエテの表情は厳しかった。一見圧倒的な戦力差に見えるこの戦闘は何の意味も持たず、ただの時間稼ぎでしかなかった。なぜなら、ジータはそのすべてをいなしているからだ。

一度に全方向から自身に向かってくる剣先を避けるっていうのは不可能に近い。いや理論上無理だ。密閉された部屋の中で高速で壁が近づいてくるようなもので、避けるという思考がまずおかしい。

物理的な壁なら破壊することもできる。剣士ならば己の力で粉碎できる奴はいるだろうし、オレ様のような錬金術師なら構成要素を原子レベルまで分解することで避けられる。でも今ジータの周りを囲っているのはエネルギーという物質でも魔法でもない何か。力で粉碎することもできず、魔法でさえ干渉できない。

けれども数千本の剣拓そのすべてがジータに致命傷を与えることはできていなかった。無数の剣拓のせいでジータの姿を確認することとはできていないが、シエテが攻撃の手を緩めないということはそういうことなのだろう。

だがどうやって……

不意に剣拓が消滅していき、残ったのはシエテの周りに漂う数十本だけとなった。表情は厳しいまま、シエテは微動だにしない。その視

線の先には、激しい戦闘をしたにもかかわらず、疲労を見せず静かに微笑んでいるジータの姿だった。

「あれシエテ。もう終わりにしちゃうの？ 久しぶりに楽しかったんだけどな。思い出したよ、シエテはその剣拓で私の身体を切り刻んでくれたよね、あの時の経験が生きたのかなあ、かすり傷は作っちゃったけど一応全部避けられたよ！ それともシエテ的には全部避けないとダメなのかな？」

ジータがひらひらと手を動かしながら、シエテに向かって話す。そしてオレ様の姿に気づいたのか、一瞬氷のように冷たい視線を向けて、私に話しかける。

「カリオストロまだいたんだ。その様子だとフუნフに治癒してもらった感じ？ あ、そういえばクラリスはどうしたの？ ミスったなく、遊ばないでさつきと仕留めればよかった……。狐二人と、フუნフももういないのね、ふふ、あとで見つけないとね、借りは返さないよ……」

「ジータ、お前何で立っていられるんだ？ あれだけの攻撃を受けて」
「その答えはカリオストロとシエテの知識を合わせれば解けると思うよ。ほら団長命令だ！、二人して答えを出してみなよ」

「どういうことだ？ オレ様が思いつくのは強制回避の……だがあれは……」

「おお、カリオストロ正解！ あとはシエテだね！」

「ちよつと待て、だってあれは……」

体にもともと備わった刺激に対する反応、反射。信号が脳を介さないで筋肉に伝わるため刺激に対する反応速度が通常よりもずっと速くなる。遙か昔にそれに目を付け、魔法で攻撃を感知し、それを伝える信号を直接筋肉に伝えることで、半自動的に攻撃を回避できる自己強化魔法を考え、実際に作った。錬金術をジータに教えたとき、半ば遊び感覚でこの魔法もジータに教えたのは覚えている。

しかしこの魔法には何が何でも回避しようとするという絶対的な

弱点がある。一対一なら影響はないが、複数対一でさらに一度に攻撃が来て、そのすべてを回避しようとした結果、身体が骨や筋肉といった枷を忘れて無理に動こうとすることがあり、最悪の場合骨折や筋肉の切断、そして血管や心臓への圧迫により死ぬことも考えられる。反射は反応の後に感覚が追い付いてくるため、痛みなどで前もって対処することもできずたちが悪い。

さっきのジータの状況でこの魔法を使ったのならそれはもう自殺行為だ。回避の攻撃を躲そうとした結果、身体が勝手に動いていき、それでも避けられないためさらに動きねじれ、結果的にどうあがいても死ぬだろう。改良して武器を持っているときにそれを使って攻撃を回避できるようにもしたが、それでも……。

「ふふつ、何を考えてるかすごい分かる。そうだね、あれはカリオスト口にしては珍しく失敗作だったからね。でもさ、ほら、今私武器持ってるじゃん」

「剣拓の長さか」

不意にシエテが口を開く。それを聞いたジータは満足そうに頷いて。

「そう、正解。シエテの剣拓は実在する剣からとったものだから、一本一本長さが違うわけ」

「それでもなあ……」

「はあ、どうして二人とも分からないのかなあ……」

あきれたようにため息をついたジータは、正解はねえ、と顔をあげる。

「すこしカリオスト口の魔法を改良したんだけどね。一本一本長さが違うわけだからさ、弾く剣拓の順番をちゃんと考えれば全部避けられるじゃん？ そりゃあ長さが違うって言ってっつてほんの少しだけさ、この回避魔法はものすごく攻撃に対して敏感だから、その少しの違いでも役に立つんだよね」

「それで全部避けたってわけか？」

「そうだね。この剣拓、魔法とか効かないからそれ以外避けようもないしね。信じなくてもいいけど、他に避け方ある？」

「……」

「まあいいや。随分と時間とられちゃったね。そろそろグランたちもつく頃だろうからさっさと、終わらせないと……！」

蝕む

「流石……だな」

「ん、シエテのこと？ やっぱ十天衆ともなると私たちとは強さの次元が違ってくるよね」

「いやオレ様だつて……まあいい。クラリス、もう傷は大丈夫なのか？」

「うん、フუნフが完全に治してくれたんだ！ さすが十天衆だよ、治癒力がすごい！ 私もこういう魔法のほうがよかつたなあー。」

「そりゃあ爆発でどっかーんもいいけどさっ」

「今はそんなことはいいからここはオレ様とシエテに任せて、クラリスも行つてこい。まだまだ意識不明になつてぶつ倒れる奴は増えるんだから。そのためにここにいるんだろ？」

「うん、そうだね。それじゃあクラリスちゃんがんばっちゃうよお！」

「気を付けてね、カリちゃん！」

「お前もな」

「あとね……さつきはありがと」

「……」

クラリスが路地に入り姿が見えなくなつた。ジータとの戦闘で気づかなかつたが、今でさえ街のあちこちで悲鳴や騒音が聞こえ、混乱はまだまだ収拾できていないことがわかる。絶妙のタイミングで救援してきたソシエ、ユエル、そしてフუნフは、シエテの指示によりすでにここを離れ、元の任務にあたっていた。広大な領土をもつエルステ帝国の都市を数百人の人間がどうこうするなんて土台無理な話だと思つていたが、そうわかつていても行動してしまうのはグランの性格が移つたからか。くそ、昔は人のためなんて考えたこともなかつたが……

いや、街はほかの奴らに任せて、目の前の状況をちゃんと把握しねえと。

シエテとジータの戦闘はまだ続いていた。圧倒的な戦力差。戦闘開始から一步も動いていないシエテに対し、ジータはその姿さえ見せることができていなかった。シエテの周りに漂う剣を模した光るエネルギーの塊、剣拓がまるで意志を持つかのようにその切っ先をジータに向け、飛び込んでいく。それがこの十数分間、何度も何度も絶え間なく行われていた。文字通り、絶え間なく行われているその連撃は、常人に扱えるであろう二、三本の剣によるものではなく、シエテの周りに漂う何重にも何段にも待機している数千という剣によるものだった。

かわす、避ける、いなす。その全ての言葉が絶望的に聞こえる一方で容赦のない攻撃を、カリオストロは疑問を抱きながらもただ見ていることしかできなかった。

ジータの姿を隠すほど無数に飛び交う剣拓は、轟音のように連撃音を鳴り響かせながら、たった一人の獲物に刃を向ける。永遠に続くと思われる攻撃は、その予想に反して突如終わりを迎え、辺りは静かになった。飛び交っていた剣拓はその光を消滅させ、眩しかった街は街灯が消えたかと思えるほど薄暗くなった。そして確かに、カリオストロは笑い声を聞いた。

「あはっ、あははははははははははは、はあく楽しかった。久しぶりに身体を動かさせたって感じかな、ねえシエテ、もう終わりなの？ もっと面白いことしてくれないと、殺すよ」

「嘘だろ……」

「あれ、カリオストロまだいたんだ。カリオストロは死なないからつまんないんだよねー。私の楽しみを奪った三人はどこに行っちゃったかなあ。あとで見つけないとねえ、見つけないと見つけないと……」

ジータは立っていた。さつきまでの攻撃がただの小手調べであるかのように、無傷で平然と。驚きとともに、カリオストロは自らの疑問への答えを見つける。いくら今は敵だとしても、昔は仲間だったジータにどうしてあれほどまで一方的で凄惨な攻撃をシエテは行うことができるのか。また、圧倒的な戦力差にもかかわらず、どうしてシエテは険しい顔を崩さずにいたのか……

「クラリスもいないのね、惜しかったな、もう少しだったのに。まあでもクラリスを仕留める前に……」

……今のジータにとっては取るに足らない攻撃だとわかっていたからか

「シエテからねっ！」

両の手に持った剣を構えたジータの姿が陽炎のように揺らぎ、かき消える。その攻撃を何度も受け続けたカリオストロは目の端にジータの姿を追うことができたが、ただそれだけでしかなかった。不意な攻撃に魔法を練ることも、錬金術を発動することもできず、ただただ刃がシエテの身体に突き刺さりんとするその様を傍観することしかできなかった。

「さよなら、シエテ」

凶喜に満ちたジータの口が動き、別れを告げる。声は聞こえない。声がかリオストロの耳に届くまでにすべては終わっていた。

「そりゃあさ、三千本も剣拓を集めてれば、麻痺属性の剣とか魔法の剣なんかもあるよね」

ずっと無言だったシエテが口を開く。すぐ目の前には、今にも剣を薙ぎ払い、シエテの首を落とそうとするジータが目を怒らせたままシエテをにらみつけている。その身体には、再び現れた光り輝く剣拓が

茨の棘のようにジータの身体を拘束していた。少しでも身体を動かせば絡みつくように存在する剣拓の刃が牙を剥くだろう。今のジータにとっては痛みなど何も意味もないだろうが。

「実は二人を助ける前にジータの戦い方を少し見ていてね。それで今回もまだ同じ攻撃だろうと思ったんだ。狙いが俺だとわかっていれば待ち伏せするのは簡単だろう?」

「見ていたんならもつと早く助けてくれよ」

「それについてはごめんね。もちろんいつでも助けにいける準備はしておいたんだけどね」

飄々と話すシエテが再び真剣な顔つきに戻る。その両手にいつの間にも抜刀していたのか、短剣とも思える得物を握って。

「なあジータ、俺は君とグランが七星剣を覚醒させたとき、君たちに本当にその剣を扱える技量があるかを確かめるために闘ったよね。俺はあの時安心したんだ、七星剣の持ち主が稀に見る素晴らしい人間だったからね。君たちは強くて、でもその強さを傲慢に扱わず、弱きものたちを助けるために使った」

今までとは打って変わって怒りに燃えるジータに、シエテは憂いな視線を向ける。

「でも今の君は違う。君たちなら大丈夫だと思っていたが、俺の恐れていたことが起きた。再興の島で君に何が起こったのかは詳しく知らないが、君の心は闇への誘惑に勝つことができなかつたんだろう。でもまだ間に合う、まだ戻ってこれる」

ふつと息を吐きシエテはまっすぐ顔を向ける。

「ジータ、戻ってこい。前みたいな団員たちに好かれ、どんな時も選択を間違えず、自らの信念のもと弱きを助け、悪に立ち向かっていたお前に戻って来い」

「何を馬鹿なことを言っているの……。自分たちがどれほど幸せで、どれほど私が苦しんでいるのかも知らないくせに。信頼された仲間

たちに裏切られ、今でさえあなたたちの心から私への悪意が聞こえる。そんなことも知らないで、戻ってこいだとか……、私は救われてないのに……、あの時だって、ただみんなを助けたかっただけなのに……」

「もう気づいているんだろ？ この世界で他人の心が聞こえるなんてことはありえない。だからこそ、この世は難しくくて、でも面白いんだ。それにお互いに認め合った俺たちが、どうしてジータのことを裏切る？ 自分の心に聞いてよく考えろ！、今ならまだやり直せる」

「私は……」

ジータの目から一滴の滴が流れる。それは、顔を伝い、流れ落ち、複雑に絡み合う剣拓の隙間を抜け、服に落ちる。はっとした表情に変わるジータの口が、何か思い切ったように開く。

「そうだ。私は……忘れていた……」

「ジータ……！」

「何を考えてたんだろうね、私は。憎しみとか怒りばっかで、何も考えてなかった……」

「そうだ、戻ってくるんだ……！」

「だからクラリスだって、カリオストロだって仕留め損ねた……」

「……」

「チャンスは逃しちやダメだよね、どんな時だって邪魔が入ることはあるんだから。ささっと行動不能にして、人目に付かないところへ移動して、それから楽しむばよかったのに……。ほんと私って馬鹿」

「……それがたどり着いた答えか……、残念だ、仕方がない。この世界

を破滅へと向かわせるものを防ぐのが俺たちの役目だ。だが以前はお世話になった、ならば最後ぐらい、十天衆が頭目、天星剣王のシエテが看取ってやる」

「ふふっ、そうはいかないよ。ずっと忘れてたよ、せつかくもらったんだから使ってみないとねえ」

ジータの言葉と共に、その身体から薄暗い瘴気があふれ出す。それに反応するかのように、ジータの行動を抑えていた無数の剣拓が音を立てて崩れていく。

「おいー、剣拓が……」

「これはやばい……、いったん下がるぞ！」

シエテの呼びかけで二人は一度ジータから距離を取る。瘴気はなおもあふれていき、地を這うように流れ、それに触れた剣拓がまるでエネルギーを取られるかのように崩壊し、消滅していく。

「あはははっ、はあ、いいねー、この感じ。魔晶は初めて使ってみるけど、この、力がみなぎるって感じがすごく……うっ、げほっ、がはっ」

ジータがせき込むと同時に、口を押えた手から血が垂れる。掌から零れるほどの量の血が血を濡らす。腰を曲げて激しくせき込むジータの衣服から何か紫黒色に光り輝く大きな結晶が落ちるのを二人は見た。以前、フリーシアやその他の帝国兵が魔晶を使っているのを見たことはある。しかし、ジータの持っている魔晶の大きさは今まで見てきたものとは比べ物にならないほど大きかった。

「なあシエテ、あれはやっぱり魔晶なのか？ でも魔晶って米粒大から大きくてもライフル弾ぐらいだよな、あの大きさは……」

「それでも魔晶みたいだな……。グランには悪いがジータを助けることは無理かもしれない……」

「助けるって、さつきとどめを刺そうとしたじゃねえか」

「いや、峰打ちで気を失わせようとしたんだよ。さすがにグランのことを考えるとどめは刺せないしね。だがこのままだとね……」

「ねえねえ、二人で何話しているの？ 魔晶ってすごいんだよ？、せき込んでも血を吐いても身体が痛くないんだ。それに、すぐく頭がすつきりして……ああ、私二人の血が見たくなっちゃった、うわっ、何これ、頭が……」

頭を抱え、再び激しくせき込むジータは、立つことさえ難しいのか膝をつき荒く呼吸をする。カリオストロは以前までのジータの姿を思うと、目の前で苦しんでいる一人の少女を直視できなかつたが、シエテは違った。数多の戦闘を超えてきたシエテにとって、今の状況は好都合、敵を仕留めるのは今だった。

独特の金属音を震わせ、両手の剣を振りかざし、周りに数百という剣拓を出現させる。すべての剣拓がその刃先をジータに向け、攻撃対象を見定めるがごとくゆらゆらと揺れる。

「またそんな、はあ、はあ、攻撃を続けるわけ？ ただの時間の無駄で、うああああ、頭が割れる……！」

「魔晶に蝕まれたな、ジータ。力を持っていてもそれを制御できなければ何の意味もない、ただの能力不足だ。……一度眠れ、ジータ」

――

「みんな、けがはないか！」

「ああ、大丈夫だ。だが……」

これで何度目の戦闘だろうか、一個小隊を戦闘不能にした俺たちは徐々に溜まっていく疲労を感じながらひとまずの身を休ませていた。

タワー内部は、天にまつすぐに伸びるその様子と打って変わり、複雑な構造になっていた。まさに侵入者のための施設といった感じで、罠あり、帝国軍の奇襲ありで俺たちは神経も体力もすり減らされていた。

今のところ仲間たちに目立った傷はない。皆一様に疲労はしているが、大部分は精神的なものだろう。今の一個小隊も隠し扉から急に現れたのだった。非常に精巧な造りで

、見た目にはただの壁、また聞く音もほとんどしなかった。隊長とみられる兵が魔晶を持っていたため、その気配にルリアとオルキスが気づき難を逃れたが……

だがおかしい。すでに俺たちの侵入はフリーシアにばれているはず。ピンポイントに俺たちの居場所について奇襲をかけてきたということは、今どこを進んでいるのかさえはつきりとわかっているはず。それなのに、特に強い兵を戦わせるわけでもない。疲労を狙っているのかもしれないが……

俺たちを誘っているのか……？

答えはわからない。だがやることはわかっている。俺はみんなに声をかけさらにタワーの奥へと進もうとした、その、刹那、

天井から音もなく落ちてきた鉄の壁に気づける者はいなくて、咄嗟にルリアをかばったカタリナと、オルキスをかばった黒騎士は絵に描いたようにきれいに逆方向に飛び、何が起こったかわからないまま、俺たちは見事に二つに分断された。

お土産

厚さが腕の長さほどありそうな鉄の壁は、真上に落ちてくれれば軽々と生き物の命を散らすことができる重量感がありながら、きれいに俺たちのいない一直線上に落ちてきた。まさに自らの役目が道を分断するただそれだけであるかのように。地面との衝撃音が壁に跳ね返りながら遠くまで響いていく。向こう側でも同じように響いているのだろうか。

「いよいよ鉄の壁まで降ってくるとは、この建物は全くどんな構造になってるんだ？」

向こう側からオイゲンの声がする。何とか話ができるようで安心するが、ネズミ一匹通さないように作られたのか、壁や地面との間に隙間は全く見られなかった。

「オイゲン！、そっちのみんなは大丈夫か？」

「グランか？ ああ、大丈夫だ、六人全員無事だ！」

「そうか、よかった！」

こちら側の全員も無事だった。カタリナがルリアの頭をなだめるように撫で、それをビイがすこし心配そうに見守り。イオが腰が抜けたかのように茫然と座っているのを見て、ロゼツタが大丈夫かと歩み寄り。リーシヤはいち早く立ち直したのか、壁を見仰いでいる。

「だがグラン、これからどうする？ ただでさえ少数人数で侵入したのに、分断されちまうとはよう……」

「やることは変わらない。リアクターを停止させ、フリーシアの計画を止めさえすればいい」

「そうだな、黒騎士。分断されたのは事実だが、物は言いようだ。二手に分かれて行動するのと同じだろ？ こんなにバカでかい建物なんだ、そっちのほうが効率がいいかもしれない」

この会話もすべて帝国軍に盗聴されているかもしれない。フリー

シアの思惑が何なのかはわからないが、分断されたことで精神的にダメージを受けているとみられるのは嫌だった。でも、どうしてこのタイルミニングで、それも分断？ フリーシアにしてみれば俺たちがタワーに侵入していることさえ嫌なはずなのに、足を止めさせるんじゃないかと、分断で終わらせるなんて……。

「俺たちのほうは先に進めばいいが、オイゲンたちはどうする？」

「そうだな、戻ってほかの道を行くしかねえだろうな……」

「それならさ、ほら、裏道を進むっていうのはどうかなあ」

ドランクがふと思いついたように口をはさむ。

「裏道？ 街でもないんだし……」

「違う違うって。ほら、急に敵さんが壁の隠し扉から出てきたことが何度かあったじゃない？ あの道を進んだらさ、敵さんの懐に潜り込めるんじゃないかなあ、って思ったんだけどね」

「……なるほどな、ドランクの言うこともわかる」

「もう、スツルム殿、もつとはつきりほめてくれてもいいのに……って痛っ！、スツルム殿オ、空気読んで！」

「……そのやり取りはどこでもやるんですね、ふふっ」

リーシャがすこしあきれたように笑う。けれど、そのやり取りのおかげで緊張がほぐれたのも事実だった。

「ドランク、それはいい考えだと思うけど。でも、もし隠し扉の先が帝国兵たちの巣窟になってたらどうする？ タワーにいる全帝国兵に会うことになるかもしれない」

「うーん、それも確かにあり得るねえ。でも、それはつまりリアクターに近づける最短経路っていう意味じゃない？」

「うん……、あれ、でも黒騎士たちってもともと帝国側にいたんでしょ？ タワーの構造に詳しくはないの？」

「全部知っていると置いていたが、どうやら思い違いだったようだ。フリーシアに渡されたタワーの構造図にはこんな隠し扉や罠は載っていないかった。まあもともと私を利用する算段だったんだ。手の内を明かさないうようにしたんだろう。今進んでいるこの道がどこに通

ずるのかはわかるが、隠し扉の先は全く分からない」

「そうだったのか……そうだ、カタリナは？」

「私も黒騎士と同じだ。それに私はタワーの内部に入ったこと自体あまりなかったからな……」

「最悪、ドラランクの案を採用するしかないか……、リーシャ、壁は壊せそうか？」

「無理そうです。厚さがそれなりにあるので、私たちの武器だと逆に傷めるだけです。専用の武器がないと突破は不可能だと思います。……魔法ならわかりませんが」

「そうか。イオ、魔法でどうにかなるか調べてみてくれないか？」

「うん、分かったわ」

イオが立ち上がり、壁のほうへ近づく。ロゼッタも気になったのかその横に立って壁に手を触れている。

「うーん、ごめん。無理だと思うわ。耐魔法用の結界が壁の表面を覆っているみたいで、魔法で突破するにも時間がかかりすぎると思う。それなんだか、それだけじゃないみたいで……」

「イオちゃんにはわからなかったかしら？ グランさん、どうやら耐錬金術用の結界も張られているようね。でもエルステ帝国は随分と腕の悪い錬金術師を雇ったようだわ。初心者の中でもわかるほど、耐錬金術の結界はお粗末ね」

「ロゼッタありがとう！ 錬金術なら……」

――

「ははっ、あははは、はーあ、もうおしまいなの二人とも？ 最強にして開闢の錬金術師だっけ？ 蒼天の総てを掌る最強の剣士だっけ？

どうして二種類の最強がここに集っているのに、私は全然楽しんでないのかなあ、ねえ、なんでかなー？」

少女の前には、伝説とも謳われる二人がその身に無数の傷を作り、荒い呼吸をして立っていた。一方はその手に半分に折れて使い物にならない杖を持ち、もう一方は自身の持つ三千の武器の大部分を失っていた。それでも、かつての仲間を助けようと奮闘する二人をジータは鼻で笑い、その後ろから近づいてくる人物を見て残念そうにつぶやく。

「ああ、楽しい時間も終わりみたいだね、ねっ、ガンダルヴァ中将」

「……………くそっ帝国兵か」

百人ほどの帝国兵を引き連れ、その手に背丈ほどもある長剣を持ち、悠々とガンダルヴァが近づいてきた。ジータの顔を一瞥したガンダルヴァは、満身創痍になっている二人の顔を見て少し驚いた表情をした後に口を開いた。

「ところで思ったんだが、オレ様はお前さんのことをなんて呼べばいいんだ？ 軍の規律だとか立場だとか面倒くせえんだが、一応な」

「ん？、別に気にしないから、何でもいいよ」

「そうか、よかった。まあ、お前はオレ様よりもずっと強いみてえだから、様をつけて呼んでも良かったんだがな。……………そんな話はいいとして、一応任務だからなあ、伝えておくぞ」

「どうせフリーシアからなのでしょう？」

「はははっ、まあそれしかないよなあ。その通りだ、お前の昔の仲間が所定の場所までたどり着いた。分断も直に成功するだろうから戻ってこい、だってよ」

「はーい。私も一応楽しめたし、グランへのお土産ももうできるし、戻ろうかな」

「それでよお……………」

不意にガンダルヴァの表情に笑みが浮かび、今だ疲労を回復しきれ
ていないシエテを顎で指す。

「これでオレ様の役目は終わったんだが、この後は自由にしてい
か？ 街に言伝に行くっていうくそつまらねえ任務に飽き飽きしてい
たら、全空に名を轟かせる剣士様がいるじゃねえか。お前の人脈の広
さにはあきれていたが、今回ばかりはオレ様も腕が鳴るなあ。なあ
ジータ、こいつの処理はオレ様に任せてくれねえか？」

「シエテを？ ああそっか、ガンダルヴァは戦闘狂だもんね。でも、も
うこんなにはろぼろにしちゃったし、シエテの首をグランへのお土産
にしようと思っただけけど……」

「お土産ならそっちの小娘でいいじゃねえか？」

「カリオストロを？ うーん、いろいろと問題があってね、カリオスト
ロだと意味がないんだよね、うーん……ん？ ふふ、私いいもの見つ
けちゃった」

顔一面に浮かんだその笑みは強者として知られるガンダルヴァで
さえぞつとさせるものだった。

「ガンダルヴァ、あなたたちがやることはただ一つ。その二人が私
を止めようとするのを止めること。手段、生死は問わないから」

「じゃあシエテは？」

「好きにしてどうぞ」

「ああ、感謝するぜ。で、お前は？」

「お土産を仕留めにいくんだっ」

「お土産？ ああ、そういう俺たちの姿を見てこそそそとついできた
小娘がいたな……」

「うん、その子。だからさ、ちよつとどいて？」

「えっ……あのバカ、何で戻ってきたんだ……！」

ジータが狙いを定める方を見てカリオストロが絶望したようにつ
ぶやく。すぐさま不完全な杖を振ろうとするが、目の前には大勢の帝
国兵が立ちふさがっている。

「くそ、ごみが！ おい、お前らとつとそこをどけ！」

「おいおい、かわいい嬢ちゃんそんな言葉を使うんじゃないよ？」

ほら、俺たちのいうことを聞いて、そうしたら痛くはしないからさ」

「今はお前らに構っている暇はねえんだ！ あとでいくらでもウロボロスの餌にしてやるから、くそ、シエテは……………」

カリオストロの視線の先ではシエテの目の前でにんまりと笑うガンドルヴァがいた。

「おいシエテ、オレ様はガンドルヴァという者だ。いや、名前なんでもうでもいいな。今オレ様は無性に興奮している、だつてなあ、全空一の腕を持つともいわれる剣の名手で、十天衆の頭目に偶然出会えたんだからなあ！ なあ、すこし手合わせを頼むぜ？、お前ならその程度の傷どうってことねえだろ！」

「その程度の傷とは、言ってくれる……。エルステ帝国中将ガンドルヴァ、その戦闘狂ぶりは俺の耳にも入ってきているがこれほどとはな。だが、今お前に構っている暇はない……俺たちは、助けないと……………」

「助ける？ 何をだ？ 獲物はもう、仕留めたみたいだが？」

砂埃が舞っている。カリオストロとシエテの視線が重なるがその場所には人影はない。血の気が引き、顔が青ざめる二人の耳に響くのは、途中で途切れた甲高い悲鳴に続くくぐもった苦痛の声、そして静寂だった。

「ク、クラリス！ おい、どけ！」

「それはできない相談だね。俺たちは君たちを止めるように指示を与えられたんだからさ。おい！、結界を張るぞ！」

「くそ、本調子ならこんなやつら数秒で始末できるんだが…………くそ！

シエテ！、お前だけでも…………」

「そうはいかねえんだよなあ。シエテはオレ様の獲物なんだ。それにオレ様もお前たちをこの場に留めておくっていう任務があるしなあ…………」

ガンダルヴァの大剣がシエテに振り降ろされる。その頭上にはシエテ、カリオストロ、そして帝国兵を包むようにドーム型の結界が張られ始めた。敵味方もろとも閉じ込め、誰も出さない意図のようだ。

「シエテ、カリオストロ。あなたたちは殺さないであげる。死んだらそこで終わっちゃうんだよね、怒りも後悔も絶望も全部なくなっちゃう。でも、生きてればさ、まだそういった感情は心をいつまでも痛めつけてくれるの、ふふ、それってすごく素敵だと思うんだ！」

夜空に少女の声が響く。

「伝説とも呼ばれながらたった一人を助けることもできない自分の未熟さを死ぬまで恨むことね。ああ、そういえば朗報だけど、クラリスはまだ死んでないんだ。ちよつと痛めつけて気を失わせてあげてるだけ。だつてさ、ふふつ、あははははははは……」

長い長い笑い声は、街中の悲劇とはかけ離れた狂喜さをたたえて。

「グランの目の前で殺してあげたほうがずっと面白そうじゃない？ 代わりに俺のことを殺れとかさ、お願いだからやめてくれって私にお願いするの。それを無視して、苦痛を与えて、黴って、虐げて、それで……、ああぞくぞくしてきちゃった……。じゃあね、二人とも、せいぜい余生を楽しむことね」

結界が完成し、二人の伝説は街と完全に断絶される。急に静かになった街にはいまだに誰かの悲鳴、叫ぶ声が飛び交っている。そして、街の喧騒の一つに、鼻歌を歌い、何かを引きずって歩く者の音が加わるのだった。

偶然か必然か

錬金術なら、ジータ、やってみてくれないか！

その言葉はみんなの耳に届かなかった。……俺が、言わなかったからだ。

考えなくても気づかなくてもいつも隣にいた、それが普通だと思っていたのに。隣にいるべき人がいない、ただそれだけなのに。ただそれだけで俺は心臓ががぎゅっと握りしめられ、呼吸でさえも苦しくなった。

場を沈黙が包む。俺が何も言わなくてもその場の全員がわかっていた。俺が何を言おうとして、なぜ口を閉ざしたか。そして、だからこそ、皆が何も言うことはできなかった。

「あ……あはは、カリオストロも潜入組に入れておけばよかったね。俺は錬金術は向いてないみたいだからなあ……」

ジータとは違って。

苦し紛れの言葉に俺の心が返答する。そう、俺は錬金術も魔法も得意じゃなかった。魔法は苦心して人並み以上のものを会得したが、錬金術はからつきしだった。そして頼みの剣の腕ですら、俺はジータとほぼ互角の才能しかなかった。才能の差を感じ、伸び悩む俺がジータを少しの僻みとともに羨むのは当然だった。けれど、それに気づいたジータは平然と明るく言い放ったのだった。

「魔術が得意じゃないんだったらそっちは私に任せて、グランは剣術を極めればいいじゃん？ 役割分担って感じだよ、だって私は……ずっとグランと一緒にやっていくんだからさっ！」

それ以来ジータは剣術よりも、魔法の研究に勤しんだ。カリオスト口の入団後は錬金術にも知識の幅を広げ、錬金術の開祖が認めるほどの錬金術師となった。そして俺もジータの言葉で不安を拭い、十天衆のシエテや剣の賢者アレーティアに認めさせる剣術の持ち主となったのだった……が。

「おいグラン、今はそんなことを言っても仕方がない。この場に錬金術師はいない。ということは我々にこの壁をどうこうできないんだろう?」

「ああ、すまない黒騎士。……そうだな、そっちの進路は黒騎士たちに任せる。ドラランクの言っていた隠し扉を進むんでもいいし、他の道でもいい。オルキスもいるんだしリアクターの場所も一応わかるだろう? こつちにもルリアが……」

タワーに入る前にルリアとオルキスの二人が妙に気になったのを感じ出した。そう、何かに気づけていない……。この壁の役割は俺たちじゃなくてこの二人を分断するためのもの……?

「どうした?」

「……なんでもない。ああ、こつちにもルリアがいるんだから大丈夫だって言おうとしたんだ。それじゃあ、俺たちは先に進むよ。黒騎士たちも、無事で」

確率は半分半分なんだ。偶然に……決まってる。そう思い込もうとしても、のどに物がつかえたように釈然としない俺の頭は混乱していた。そんな俺をみんなが不安そうに見るが、俺には何も言うことができなかった。壁の向こうの六人が遠ざかるのを聞き、俺たちも出発する。

薄暗く迷路のような道はまだ続くようだった。

――

「ほら、やっぱりまだ開いてるね」

黒騎士ら六人は来た道を戻り、ドラランクの言った隠し扉の前まで戻っていた。周辺には帝国兵の一個小隊が、全員意識を失った状態であちらこちらに倒れている。

「帝国兵はまだ気を失っているな。……リアクターの仕業じゃねえだろうな？」

「それはわからない。リアクターの対象範囲はこのエルステ帝国全域にわたる。無論、タワー内部も範囲内だろう」

「だとしたら宰相様の意識もリアクターにとられる可能性があるのか？」

「ゼロではない。だがあの宰相のことだ、悪魔が来ても意識は手放さないだろう」

「はっ！、ああちげえねえな。それで、こつから進むのか？」

「ああ、当たり前だ。我々の目的はリアクターを止めること。そしてそんなことは一人でだってできる。この中の誰か一人でもリアクターのある部屋に入り、止めることができれば我々の勝利だ。そのためには危険も犠牲も……承知の上だ」

「私もそれに賛成だ、今は時間が惜しい」

スツルムが黒騎士に賛成し、迷わずに隠し扉の中に入っていく。黒騎士とオルキスがそれに続き、ドラランクも肩をすくめてついていく。残されたオイゲンとラカムは数瞬逡巡したのち、敵の隠し通路に飛び込むのだった。

「なあ、アポロ。もちろん、時間が惜しいのは分かるし、オレたちの行動にエルステの全住民の命がかかっていることもわかっているが、オレたちの勝利には必ずオレたち全員の無事がなくちやいけないじゃねえか」

オイゲンの言葉が狭い通路に反響して響いていく。

「ふん、貴様らの実力は数だけでしかない帝国兵におびえるようなものだったのか？ どうやら私は貴様らのことを過大評価していたようだ」

それだけを口にし、黒騎士は足を緩めず進んでいく。

「オイゲン、黒騎士ってああ見えていいところあるよな」

「あたりめえだ。オレの自慢の娘だぜ？」

「蛙の子は蛙、つてか？」

ラカムが笑う。

「静かにしろ、敵の本拠地だぞ？ 敵に見つかって戦闘になるのは時間無駄だ」

数分も立たずに一行は別の通路にたどり着いた。見た目にはさっきまで進んでいた広い通路と同じだが黒騎士にしてみれば初めての場所らしい。

「タワーの中に私の知らない場所がここまであったとはな……」

「うーんとねえ、たぶん宰相さんは、精巧な偽の構造図を渡したんじゃないかなって。そうだとオルキスちゃん、リアクターはまだ上かなあ？」

「うん……、まだ上みたい。でも……、さっきより近づいてる」

「広い通路に出てきた方がいいが、どっちに進むんだ？」

目の前には左右に延びる道。曲がり道の途中にいるようで、どちらも先がほとんど見えない。

「悩んでいる暇はない。ここで間違えて間に合わなければ、我々にはそれだけの運しかなかったということだ」

「君たちから見て右に進めばいいんだよ。そうしたら君たちの目的の場所に着くことができる」

「ん？、て、てめえはロキか!？」

一人の少年が天井にできた空間の歪みから姿を現す。いつも隣に連れた青い星晶獣は連れていないようだった。

「ロキ？」

「ああ、グランの故郷で一度会ったんだが、よくわからないやつだな。確かエルステ帝国初代皇帝とかって名乗っていたな。そうだと、あと星の民とも言っていたな」

「この中で会ったことがないのは君だけだね、アポロ。いや、黒騎士って呼んだほうがいいかな？」

「星の民で帝国の初代皇帝だと？ そんな馬鹿なことが……」

「長くはない期間エルステに仕えてきた君ならそれなりに驚くかもね。でもさ、今はそんな事はどうでもいいんじゃないかな？ 急いでいるんだからさ、ほら、早く行きなよ」

「ああ。だが、なんで敵であるお前が俺たちに正しい情報を与えるつて約束できる？」

「うーん、その質問は根本的に間違ってるね。まず、僕は君らの敵ではないし、エルステの味方でもないよ。僕はただ……楽しいものを見ただけだ。フリーシアの計画が成功して君たちが悔しがる顔を見るのも楽しいと思うけどさ、多分君たちに正しい道を教えてあげたほうがもつと楽しいと思うんだ」

「腐ってるな……。おい、こいつは信頼できるのか？」

「信頼できるかは分からねえが、嘘は言つてねえみたいだ。前会った時も、連れていた星晶獣に近くの住民を喰わせようとしたが、ただただ自分のやりたいことだけをやりたいって感じだった。今回もその感じなら……」

「そうか。ならこいつの言った通りに進むぞ」

「ふふ、形だけは上司の僕に向かってこいつ呼ばわりなんて、君たちは本当におもしろいね。でも僕の言葉を信じてくれてありがとう、これでもつと面白いことが見れるよ。それじゃあ、楽しみにしてるからね」

ロキは一行が自身の言った道を選び進んでいくのを、姿が見えなくなるまでずつと見ていた。

「君たちの目的は、フリーシアを止めること、それでいいんだよね？、ふふっ」

その言葉は誰に聞かれることもなく、一瞬の煌きとともに一人の少年の姿はかき消える。

ガチャッ。

足を止めている暇はなかった。休んでいる暇はなかった。ロキの言葉が嘘か真か、それさえもわからなかったが、一行はそれを信じ、進んでいった。都合のいいことに帝国兵の急襲はなく、分かれ道も隠し扉もない通路は確実に侵入者を主のもとへと誘導して……

しばらくの一本道は行き止まりと共に終わりを見せ、しかし古びた鉄の扉が静かに佇んでいて。黒騎士がゆっくりと握る取っ手は歴史を感じさせるようにひどくさび付き、ほこりをかぶっていて。けれどそれはスムーズに動き、扉特有の音と共に開いていき、明かりが六人を照らす。初めて聞く黒騎士の息を飲む音と共に一行の前に現れたのは。

「ごきげんよう、侵入者の方々」

エルステ帝国宰相フリーシアだった。

――

黒騎士たちと別れた俺たちは元いた道を進んでいたが、目の前に現れた一人の魔導士によって道をふさがれていた。今までの帝国兵と異なり、明らかな戦意も、敵と相対したときの焦りもないその男は、俺たちを待っていたかのように、たった一人でそこに立っていた。

「こんばんは、みなさん」

「ああ。会ったばかりで悪いんだがそこをどいてくれないかな？俺たちは急いでいるんだ」

「帝国に仕えているのに、それを裏切るような行為ができるわけないだろう？ましてや君ら全員は指名手配中の重犯罪者なんだ。そんな奴らを素通りさせるわけにはいかんでしよう」

「だが君は一人なんだぞ？君だって多数を一度に相手するのは不利だとわかっているだろう？」

「二人……ああ私は君の言った通り一人だ。だが、一人がたった一人分の戦力しか持っていない、というのは違う」

そういうと男は右手を上げ、その手に付けた指輪を禍々しく輝かせる。

「くっ、魔晶か……。全員武器を構えろ！、星晶獣が……。なんだと？」
カタリナが全員に声をかけるが、その声は星晶獣の出現によってかき消される。薄暗い通路を照らし出現した星晶獣の数は……。12体。
「いいね、その絶望した表情！ これでどうだい？ これでも君たちは自分たちが数の上で有利だと言えるのかい？」

男が嘲るように笑いながら手を振りかざす。それに従うかのように、リヴァイアサンが牙を剥いて突進し、コロツサスがその手に持つ大剣を構え、ティアマトが風のエネルギーを溜める。見たことのない星晶獣も何体かいて、そのすべてが攻撃態勢に入っている。

「くそっ、ライトウオール！ グラン！、リヴァイアサンは私が止める、その間にみんなを避難させるんだ！」

カタリナが魔法の防御壁を張り、抜刀した愛剣、ルカ・ルサに氷の波動を纏わせる。

「カタリナ、無茶だ！」

「今はこれが最善、だ？」

カタリナの声が驚きとともに裏返る。猛進してきたリヴァイアサンがカタリナの張った魔法の壁にぶつかり、大きな衝撃音とともに跳ね返るのを皆が茫然と見ていた。そのまま首から地面へと倒れこみ、刹那光を放ってその巨体は虚空に消えた。

「これは一体……」

「カタリナ、ちよつと頼む。試したいことがあるんだ」

そういつて俺は艇から新しく装備してきた剣を構え、コロツサスに向かつて突進する。振り上げられた大剣は俺の身長と同等、いやそれ以上の長さで大きさを持ち、一太刀で万物を両断する圧倒的な強さを秘めているかのように見えるが……

「はあっ！」

叫び声とともに振り下ろされた剣に自分の得物を思いっきりぶつける。手に伝わる衝撃はほとんどなく、俺の剣は薄い金属の板を切るかのように、コロツサスの剣を真っ二つにする。そのまま、身体に切

りかかるとあつけなく星晶獣の身体は消失した。

「やつぱりな……」

「グラン、これはどういうことなんだ？」

「この子たちはいわば複製品、レプリカのようなものなのね」

ロゼッタが納得したかのようにつぶやく。

「これだけの数の星晶獣をあんなに小さな魔晶で制御できるわけがないんだ。今この場に召喚された星晶獣の力は本来の星晶獣の足元にも及ばない、見た目だけの、張りぼてだ。ルリア、力を吸収できるか？」

「はい、大丈夫です！ この子たち、私の呼びかけにも全く返事をしてくれなくて。自分の意志すら持たせてくれなかったなんて……」

ルリアが星晶の力を使う。ルリアと召喚された星晶獣たちの身体がリンクしたように光り輝き、その巨体な姿がすべて消え去る。

「なんなんだよ、使えねえ奴らだな。星晶獣っていつでもこんなもんなのか？」

召喚した星晶獣がすべて消え去るのを唾然とした様子で眺めていた魔導師の男は舌打ちをして吐き捨てるように言い、手にはめられた指輪を外し始める。

「何を馬鹿なことを言っているんですか？ あなたは星晶獣の本来の力を知らないからそんなことが言えるんです」

「ああ？、うるせえな。くそ、フリーシアめ、いいものをあげるって言うっておきながらこんな偽物を渡しやがって」

そう言い、外した指輪を地面に捨てた男はそれを踏み潰す。結晶が割れる音がわずかに聞こえ、一瞬の静寂の後禍々しい輝きがあふれ出す。

「う、うわあー、なananんだこれは……」

バランスを崩し倒れこむ男の足元で、破壊され制御できなくなった魔晶が封印されていた星晶獣を吐き出し、まばゆい輝きとともに、神とも呼ばれる姿を顕現させる。比較的広い通路もその数々の巨軀にとっては満足のいかないものらしい。おしくらまんじゅうのようにひしめき合う姿を見るのがかわいそうになったのか、ルリアは無言で

うつむき星晶の力を使うべく腕をのばす。

「ルリア、ちよつと待って」

「えっ、グラン？」

ひしめき合う星晶獣の中に弱弱しくも地上に立つ姿が一つ。その姿に似合わぬ大剣を右手に携えた少女は感情のない瞳でこちらを見ている。

「なあ、魔導士さん」

俺はゆっくりと男のほうへと向かう。驚きで腰が抜けたのか、未だ立っていない男の前に立った俺はその首元に剣先を突き刺して、
「なあ、どうしてお前の持っていた魔晶の中に星晶獣アネバルテがいたんだ？」

ジータと瓜二つの姿をした星晶獣は、自身の名前に反応し、こちらを振り向く。

元凶を消しても

「どうしてアネバルテが、ジータの姿で……?」

ルリアをはじめ全員がアネバルテの存在に気づき困惑する中、俺は地に突き刺した剣を震える手で必死に抑えていた。俺の中の本能とも言える部分が目の前の人間の首を問答無用で狩ろうとするのをおろろろ抑えながら、男の返答を待った。男は首元の武器にとりよりは、魔晶を壊したことで出現した星晶獣に面食らっていたようだったが、少しして俺の質問に答えた。

「アネバルテ……? ん、よく見ればこいつ、お前らの団の団長じゃなかったか? なんでここに……。あー、言われてみればお前の言ったような名前の星晶獣がいたかもしれねえが、見た通りこんだけたくさんの星晶獣がいるんだ。一体一体の名前なんてちゃんと覚えてねえよ。それにお前らも分かってるだろう?、星晶獣ってのは道具だってことは。道具に名前を付けるのはただの物好き……うぐっ」

誰かの足が男の腹を踏みつける。これは……俺の足だ。傀儡のように俺の身体は動き、俺の口が声を発する。

「そんなことはどうでもいい。いいか、俺が聞いているのはどうしてここに星晶獣アネバルテがいるかだ」

「うっ、見た目の割にはずいぶん手荒なぼっちゃんだ。そうだな、二年前ぐらいからか。魔晶の生成が成功して、用途や可能性について幾多の実験をやった後、フリーシア宰相が俺たち帝国兵に命令を出したんだ。星晶獣狩りのな」

「星晶獣狩り?」

「ああ。魔晶には疑似的に星晶獣の力を吸収して閉じ込め、拘束し、自由に開放する力があることが分かったからな。魔晶単体でできることもあるが、媒体として使うことでもっと簡単に巨大な力を利用することができる。そうしたらもう考えることは一つだ。宰相はできる

だけ多くの星晶獣を集めて魔晶に封じ込め、その力を利用することを思いついた」

地面に散らばった魔晶の欠片を一瞥し、男は話を続ける。

「それで二年前から俺たちは星晶獣がいると言われているあらゆる島に派遣された。もともとこの空域を牛耳っているような国なんだ、情報網も手を伸ばせる範囲も広がった。最初のころは星晶獣の戦力差に苦戦したが、奴らのコアに魔晶の力を過剰に流し込むことで、一時的に弱らせることができることが分かってから、星晶獣狩りは加速した」

ルーマシー諸島でのユグドラシル・マリスの苦しむ表情が脳裏をよぎった……あんな蛮行を各地でやっていったっていいのか。

「星晶獣狩りっていつでも流石に吸収できるのは一部だったがな。あとはもうお前らも知っているだろう。一度魔晶に閉じ込めてしまえばほかの魔晶に移したり、コピーを作ったり、過剰に魔晶の力を与えて暴走させたりと、いくらでも制御は可能だ。……俺のはこんな失敗作だが」

「じゃあ、その星晶獣狩りの中にアネバルテがいたってことか？」

「まあ、そうだろうな」

「再興の島に帝国兵が？、でも長老は俺たちに何も……」

「再興の島？ ああ、思い出したぞ。あの面倒くさかった島にいた星晶獣か。俺もあの時は同行してたからよく覚えてるぞ」

男の顔に卑しい笑みが浮かぶ。

「あそこは一度失敗したんだよなあ。星晶獣にも会えない、長老も教えてくれないでな。帝国という名前を出しても頑として口を割らなかつた。だが村人の前にぼんと大金を置けばあら不思議、分かっちゃったんだよな。それで条件に合うやつを探して、確かエルーンの兄ちゃんだったが、今度は帝国兵ではなくなったあの島民希望者を装って再挑戦したわけだ。ああ、今から一年前ぐらいだな」

「二年前……」

ルリアがつぶやく。再興の島に異変が起き始めた時期だ。アネバルテも目覚めた後俺に話してくれた。一年前にちよつとしたことが

あつて、それから心を痛めていたようです、と。

「作戦はうまくいった。アネバルテは島民の奴らが言った通り俺たちの前に現れた。現れたつてことはその兄ちゃんは島民に相応しかつたつてことだが、俺たちにとつてはそんなのはどうでも良くてな。魔晶を使つて弱めたら、あとは力を取り込むだけ。もう慣れた作業だつたし、力の強くない星晶獣だつたからすぐに仕事は終わった。エルーンの兄ちゃんは俺たちのしていることが何なのかは分かつていなかったが、アネバルテが苦しむのを見て俺たちを止めようとしてたな。そうそう、あいつは生真面目なやつだつた」

ああ、やつぱりそうか。砕かれた魔晶からジータの姿をしたアネバルテが現れたとき、すでに俺の本能は理解していたんだ。すべての原因が、アネバルテと再興の島、そしてジータに異変をもたらした張本人がこいつだつてことに。そして、俺は感謝した。今、ここで報復する機会が俺に与えられたことに。

「もういい、もう一言も口にするな。お前が原因だつてことが分かつただけで十分だ」

「原因？ 何を言つてるんだ？」

その疑問には答えず、俺はゆっくりと地面から剣を引き抜く。男の表情がにわかには強張るのが、俺の嗜虐心をくすぐる。ああ、このまま怒りに身を委ねて、すぐにでも目の前の男に死を与えたい。いや、それともゆっくりと痛めつけようか。悪魔が蜜のように甘い誘惑を俺の耳元に囁き、脳を弛緩し判断を曇らせる。刃物が柔らかい皮膚を突き刺し、鮮血が流れ、男の表情が苦痛に歪み、痛みに震える声が俺の耳に届く。そんな想像が、はつきりとした現実感を持つて五感を刺激する。

「お、おいお前、俺を殺すのか？ お前たちは指名手配中だつたが、人殺しは一切しないような団だつて、そう聞いていたぞ？」

「そうか？ じゃあ前評判は撤回だ。俺たちの団は平気で人を殺す、そんな団だ」

「グラン？、君らしくないぞ、どうしたんだ？」

「カタリナ、何がどうしただつて？ 俺はいつも通りじゃないか」

「いつも通りって……本気で言ってるのか？」

「どうしちゃったのよ、グラン！」

カタリナの心配げな声も、イオの切迫した声も俺の冷たく沈んだ心には届かない。ただただ五月蠅い、そう思った。

「イオ、ちよつと静かにしてくれないかな？　俺は今、この男にどんな罰を与えるか考えてるんだ」

「ば、罰？」

「おいグラン、どうしたんだよ……？」

俺の言葉に一々騒ぎ出す連中が煩わしかった。俺が、何か間違ったことを言ったか？

「この男は死ぬにふさわしいことをした。だから、その代償としてこの男に死を与える。まだ、分からないことがあるか？　まだ質問はあるか？」

「グラン、一度落ち着くんだ」

「カタリナ、心配しているようだけどその必要はないよ？　俺は落ちて着いているし、自分がこれからすることが正当なことも分かっている」

「グラン、もしあなたの言っていることが本当なら……秩序の騎空団としては見過ごすことはできません。一度、剣を下して、私たちの言うことを……」

「ああうるさいなあ！　ちよつと黙っててくれないか？」

「……いいえ、私は黙ることはできません。私に自信を持たせてくれた恩人に、罪は犯させません」

「罪？　だから、俺がこれからすることは正当なことだっていつているだろ？　罪には問われることはない、だってこいつのしたことは死刑に値することだからだ」

「それを決めるのはあなたではなく、秩序の騎空団です。私たちが……」

「リーシャ、それ以上口出しするな。こいつが何をしたかわかっただろ？　こいつは再興の島に異変をもたらし、多くの人を苦しめて、そしてジータを……」

ずっとグランと一緒にやっていくんだからさっ！

ジータの姿が声と共に唐突によみがえる。同時に思い出すのは、俺の首を絞めている時の無表情な瞳。俺の記憶は強く刺激され、何かかのどにこみ上げてくるのを感じる。声を出せば出てきてしまいそうなそれを必死に抑えながら、ゆっくりと口を開く。

「幼いころから俺のそばにいて……陰から俺を支えてくれた人に殺されかけた、その気持ち分かるか？ 家族が自分に救いが無いと思つて命を絶とうとしている、……それを止められない俺の気持ち分かるか？ この……虚しさなんて言葉じゃ言い表せないこの気持ち、リーシャ、お前に分かるのか？」

「……分かりません」

「お前にとっての父やモニカのような存在が、お前に刃を向けて目の前からいなくなった。そんな時に全ての元凶が目の前に現れたんだ。それでもお前は、秩序なんて生ぬるいことをいって、処罰を他人に任せることができるのか？」

「……そんなの分かりません、でも……私は自分が尊敬する人が目の前で罪を犯すところを見たくは……ありません」

「俺は誰かに尊敬されるような男じゃない。目の前に仇が現れただけで、国も大人数の命も仲間もどうでもよくなる、そんな奴だ。……すまないがリーシャ、俺を止めないでほしい。責任はそのあとでいくらでも取る」

リーシャも他の仲間もそれ以上何も言わなかった。それが俺にはありがたくて、とてもつらかった。俺は再び男に向き直り、剣を構える。

「どうやら俺は人として最低なことをしていたようだな……」

男がぼそりとつぶやく。

「その言葉が本心かどうかは聞かない。でも痛めつけずに楽に殺してやるから、一思いに逝ってくれ」

それ以上何も言わず、俺は剣を振り上げ、男に向けて振り下ろす。心の中に怒り以外の感情が流れ込むのを必死に抑え、目の前のことに一心不乱になる。そうしないと……

薄暗い通路に突如光が差し、響き渡ったのは今まで聞いたことのない音だった。振り下ろした剣は途中で止まり、動かない。小さな金属音が下から聞こえ、見ると折れた剣の先が地面に転がっている。俺の目の前には筋骨隆々の体貌に重々しい鎧を身に着けたコロツサス・マグナが右手で俺の剣をつかんでいた。指の隙間から光輝く金属の欠片がばらばらと落ちる。

俺の剣が砕けた音が反響する空間に、今までにルリアが吸収した星晶獣が現れていた。

「ルリア……」

「帝国の魔導士さん、この子たちは私の中にいる星晶獣です。この子たちは私たちと同じように言葉を理解し、考えることもできます。もちろん、あなたの言ったことも聞いていて、帝国が星晶獣の力を軽々しく扱っていたことに怒っています。それでも、今私があるのを助けるために手を貸してと頼んだら、協力してくれました。……それでもあなたはこの子たちを道具と呼んで、無理矢理力を使わせるんですか？」

男がうつむくのを見た後、ルリアが悲しい視線を俺に向ける。

「グラン……約束してくれたじゃないですか。ジータを助けるって、……あなたはどこにも行かないって！ それなのにどうして……、グランがいないとジータを取り戻せるはずなのに……」

「……ルリア、ごめん」

俺には謝ることしかできなかった。剣を振り下ろす寸前、すでに俺にはわかっていたのに止めることができなかった。今この場でこの男を殺しても何も変わらず、何も解決しないなんて気づいていたのに。怒りなんてほとんど残っていないかった。それでも俺は、やり場のない感情をどうにかしたくて、見せかけでもいいから俺の心を納得させようとした。

「グラン、そんなにジータのことで悩んでたのに、どうして私たちに相談してくれなかったの？、仲間でしょ！」

「……怖かったんだ。ジータが前と変わって、それでみんながジータを疎ましく思っているんじゃないかって思って。それに、ジータが艇を離れるって言ったとき、みんなほっとした顔をしてたから……」

「……グラン？、それは君が勘違いしているんじゃないか？」

「えっ、どういうこと？」

「私たちは君たちがなかなか戻ってこなくて心配していたんだ。そして、いざ戻ってきたと思ったらジータの姿がない。私たちは最悪の事態、そうだな、例えばジータが帝国兵に捕まったということを考えていたんだ。しかし、君がジータがしばらく艇を離れるといった。ということはジータは無事だということだ、それで私たちは……」

「えっ、あ、はは、そうだったのか……。俺はてつきり……」

みんな、ジータを信じてくれてるじゃないか。それなのに、俺は……。

「だが事態はもつと深刻なようだな。君の様子を見る限り、先ほどの君の説明は嘘なんじゃないか？ ジータはいったい今、どんな状況なんだ？」

カタリナの疑問に俺は一瞬ためらい、俺の分かっている全てを話し始めた。

再会は最悪の形で

「ごきげんよう、侵入者の方々」

「まさか、執務室にこんな通路が隠されていたと、な。だが、今回は都合がいい」

黒騎士がため息をつきつつ部屋に一步足を踏み入れ、剣の柄に手をかける。

「ふふっ、黒騎士様。もしよければ、何をどう思っただけで都合がいいと考えたのか私に教えてもらえないですか？」

「勝利を確信したと勘違いして、頭までおかしくなったか」

「今更あなたがたに何を言われようと気にはしません。こちらの策にまんまとはまり、ここまで導かれたあなたは敗者。そして敗者をこうして迎える私が勝者。勝者は勝者らしく振舞わないといけませんからね」

「冗談を言わなかった頃のほうがまだマシだったな」

「冗談なんかではありませんよ」

「もういい。さて二択の質問だが、黙って我々がリアクターのところまで行くのを見届け、自分の計画が失敗したのを認めるか、それとも我々を力づくで止めてそれでも希望を叶えることができるか、どちらがいい？」

「あなた方が私を止めることができますか？ 帝国の中核でもあるタワーの門が都合よく開いている？ 開いたままの隠し扉が執務室に続いている？ 何の考えもなしに私の罠にかかったあなたは何かができますか？ ふふっ、でもいいでしょう、ここを通してあげますよ……もちろん、全員ではありませんが！」

そう言うといつの間にか手に握られていた、魔晶と同じ色彩を放つ液体の入った試験管を掲げる。一間を置き、それを口元に近づけて飲み干したフリーリアは上機嫌な表情でこちらをにらみつける。

「貴様、一体何のつもりだ」

「……ふふっ、私にとってはこの建物も街も人もすべて他愛もないも

のなのです。私が今欲しいものはただ一つ……」

フリーシアの手元から試験管が落ち、大理石の床に破片を散らせる。

「ちようど昨日成功したんです、魔晶の液体化。まだ人体実験はしていませんが、時には私自身が試験体になるのもいいで……うつ、はあ、はあ」

副作用によるものなのか、倒れるようにして地に膝をつき、そのまま掌にガラスの欠片が突き刺さるのも気にせず地に手をつく。余裕の浮かんでいた表情は今、険しく、目が血走っている。荒く呼吸を繰り返す苦しむフリーシアを、それでも冷たい視線で見下ろす黒騎士は、全く動じない様子で通り過ぎようとする。

「おい黒騎士、こいつはこのままでいいのか？」

「当たり前だ。我々の目的はリアクターの停止だ、それを引き違えるな。それにこいつは自分で自分を苦しめているんだ、そんな奴を助ける義理がどこにある？」

「いや、まあそうだが……」

「行くぞ、我々には時間がないんだ。こんなところでこんな奴と戯れている暇はない」

そう言い切り、部屋を出ようとする黒騎士の足が止まった。突如床が輝きだし、フリーシアを中心とした魔法陣が形成される。それは禍々しき影を落とし、どこからともなく吹く風が部屋中を渦巻く。光をも飲み込む黒き魔法陣は空中に浮かびあがり、包むようにフリーシアの身体を覆って……

目が眩むほどの光の衝撃は、その場の人間の視界を殺し、多数の気配を出現させるとともに、対象に影を伸ばす。

「オルキス！」

「ふふっ、お静かにお願いしますね。いえ、何もオルキスに危害を加えようというわけではありませんよ」

光が止み、さつきまで苦しんでいたのが嘘であるかのような様相でフリーシアは立っていた。その横にはもともとの巨軀をさらに肥大させたリヴァイアサンが、とぐろを巻くようにオルキスに巻き付けてその身体を拘束し、こちらを威嚇するかのように牙を剥く。オルキスの真下から瞬間に出現した星晶獣に誰一人反応できず、剣を構えるのもすでに手遅れだった。

「貴様……死ぬ覚悟はできているな」

「いいのですか？ あなた方の目的はリアクターを止めることではないのですか？ 私はあなた方に許可しましたよ、ご自由に部屋を出て、リアクターでも何でも止めてきてください。それとも何ですか、今の瞬間にも大勢もの意識が失われているのに、その多数を気にせずオルキス一人を優先するというのはですか？」

「腑に落ちねえな」

オイゲンがフリーシアを訝し気に睨みつける。

「お前さんはエルステの歴史を改変するために帝国の住民も何もかもをすべて犠牲にして計画を進めていたんじゃないのか？ そのためのリアクターのほずが、どうしてそれをこんな風に蔑ろにできる？」

お前さんにとってはリアクターが計画の全てじゃなかったのか？」

「そんなことを聞いている場合なのですか？ 今ではもうあなた方の命でさえ危ういというのに」

部屋に召喚された星晶獣はリヴァイアサンだけではなかった。侵入者を囲み、今にも襲い掛からんばかりの様子で威圧する星晶獣は、そのすべてが四肢を異様なまでに発達させ、主の命令を待っているようだった。

「この子たちは私の指示に忠実に従います。能力も魔晶のおかげでオリジナルを優に超すものを持っています。一人が二体とやり合ったとしても、ふふつ、人手が足りませんね」

「おい、今はそんなことはどうでもいいだろ？ この場をどう切り抜けるかが先決だ」

「スツルム殿、ちよつと待ってねえ。意外にこれは重要な問題だと思うんだよね。ねえフリーシア宰相？、リアクターって困ったのか

なあ？」

「黒騎士は優秀な傭兵を雇っていたようですね。頭の回らない雇い主の下で働いていたことが唯一の悪手でしたけれども。さて、気づかれたのでは仕方ありませんね。あなたたちを外に出すことはできません。たとえ出られたとしてもあなた方だけでは合流できるかどうかもわかりませんが」

フリーシアの言葉に従うように、鎖帷子を鳴らし扉の前に陣取った筋骨隆々の重戦士がその腕に極大な大剣を構える。この部屋から何物をも逃さぬかのように仁王立ち、黒剣を輝かせる。

「おい、どういふことなんだよ」

苛立ちを隠せないスツルムがドラंकに尋ねる。いつにもまして深刻な顔をするドラंकの代わりにオイゲンが口を開く。

「リアクターが囷ってことは、本命は……ルリアとオルキスちゃんか。こいつらの計画はリアクターを餌に俺たちをタワーに誘い込み、本来の計画だったルリアとオルキスちゃんの力を利用してアーカーシヤを起動することだったんだ。そのための分断だったってわけか？」

「ご名答ですね、アウギユステのご老兵殿」

フリーシアがからかうように答える。

「でも僕にはわからないことがあるんだけどねえ、こつちにはフリーシア宰相がいるから分かるけど、あっち側は誰が担当しているんだい？ グランからルリアを奪い取るような精銳は帝国といえどもいないと思うけどねえ？」

「あなたがたがともよく知る方ですよ、ふふふ、つあはははっ！ 真実を教えてあなた方を絶望の淵に落とすのもいいですが、ここは我慢しなくては……」

「おい、この場は私一人に任せろ。四人にはリアクターの停止とグラントの合流を頼む」

黒騎士が扉の前に仁王立ちをする星晶獣の前に立つ。

「その星晶獣はコロツサス・マリス。力が強すぎて以前の私では制御できませんでした。けれども魔晶の力を体内に取り込んだ今の私で

は十分従えられる。黒騎士、残念ながらあなたが勝てる相手ではありません」

それには答えず、手に持った剣を居合のようにして下段に構える。そして、ふつと息を吐き一閃する。

「黒鳳刃・月影」

白銀の刃が漆黒に燃え上がり、コロツサス・マリスの持つ大剣に交わる。轟音ともいえるべき音とともに空間が軋み、悲鳴を上げて断裂し、破片となって周囲に散らばる。それでも黒騎士の一撃は終わらず、剣からほとばしる熱線が周囲に四散し、あふれ出る漆黒の瘴気がコロツサス・マリスの身体を侵していく。黒騎士の刃を受け止めた強大な剣には一瞬の後に鋭い金属音を伴ってひびが入り、瞬く間にそれは広がり粉碎される。そして、屈強たる体躯に到達した鋭刃は勢いを失うことなく、断つ。

崩れ落ちたコロツサス・マリスの身体は音もなく霧散する。それを見届け、黒騎士はフリーシアに向き直り剣の先を向ける。

「七曜の騎士つていうのは全空を統べる資格のある者にしかねない。だから、七曜の騎士が悪に敗北することは認められていない、……たとえそれが星晶獣であっても。私を見くびるなよフリーシア、私情に振り回され、一国もまともに治められないお前が全空を統治する七曜の騎士の私に勝てると思うな。道は開いたぞ、早く行け」

黒騎士の指示に従いドラंकとスツルムが部屋を後にする。しかし、オイゲンとラカムはその場を動かなかった。

「おい、お前たちも早く行け」

「ふつ、こんな老いぼれは足手まといだ。あいつらはリアクターの場所を知っているんだろ？、それなら二人だけで大丈夫だ。それに俺にはこの場に守らなくちゃいけねえ者があるしなあ」

そう言い、オイゲンは銃を構える。

「俺は、世話になった星晶獣を助けてやらなくちゃいけねえ。それが俺の矜持だ」

ラカムの視線の先には苦痛を浮かべるティアマトが全身に灰色の風を纏っている。

「ふん、勝手にしろ」

「早々に一体倒されたのは予想外でしたが……」

フリーシアの身体を蜘蛛のような外観の機械が覆っていく。

「ここにいる星晶獣が全てではありません。今では私でさえ、星晶獣に近い力を持つ者。あなたたち三人を倒し、計画を遂行することなど造作もないことです。それに」

オルキスに絡みつくリヴァイアサンの身体が膨張し、少女の顔に苦痛が浮かぶ。

「オルキス！」

「下手に動くとうなるかわかっていません。もちろんアーカーシャ起動に必要な道具なので殺しはしませんが、いくらでも苦しめることはできるんですよ」

「くそつ、それが人様のすることかよ！」

「私は私の願望のために動く、ただそれだけです」

「……アポロ」

弱弱しい声がオルキスから発せられる。

「私なら……大丈夫。だから、この子たちを、救って、みんなを……救って！、うぐつ……」

「オルキス！ くそ、貴様つ……！」

「あなたが余計なことを話す必要はありません。……そうですね、どうせあなた方はここから出られないんです。すべてを教えてあげましょうか。そんな顔をなさらずに、別にあなたがたのためにするわけではありません。真実を聞いたあなた方の顔はさぞ滑稽だと思いまして」

フリーシアがあざ笑い、その笑い声と共に灰色の風が部屋に吹き込み扉が閉まる。

「私の計画への協力者で、アーカーシャ起動に必要なもう一つの道具をあなたの方の団長から奪い取るのですね……」

一瞬の沈黙の後、執務室から零れ出るフリーシアの笑い声は、街の混乱とは対照的に静かで薄暗いタワー内部に響き渡る。

――

俺はみんなに今のジータについてわかっていることをすべて話した。再興の島でアネバルテが傷つき、そのことでジータに何かしらの異変が起きたことはすでに騎空団の全員には話していた。だがそれだけでは辻褃の合わないほどのジータの変貌ぶりに疑問を抱いていた団員も多かっただろう。俺は実際に何が起こり、どうしてジータが変わったのかを、俺の推測を交えて説明した。

そして、ジータが自らの意志で団を降りたこと。軍の研究施設で呼び止める際に、本気の死合いにまで発展したこと。フリーシアに会うという言葉を残して去ったジータだが、会った後どうするのかや実際に会えたのかなどは全く分かっていないことを話した。

話を終えた後、俺は黙り込む仲間たちを促し、再び薄暗い通路を歩き始めた。今ジータがどこにいるかわからないし、どうすることもできない。だとしたら目の前の問題であるリアクター停止をまず推し進めなくてはいけない。そしてこの問題が解決した後、ジータについてゆっくり考えればいい。

リアクターへは順調に近づいているのか、一度に出てくる人数は少ないものの、魔晶を使いこなすほどの力量を持つ帝国兵が現れ始めた。順調に戦闘不能にし最奥まで進む俺たちだったが、途中魔晶に心を奪われ気をおかしくしたフュリアスに遭遇した。

他の帝国兵とは違い、魔晶による圧倒的な戦力を持つフュリアスは戦闘には時間がかかり、一度見つかつたからには振り切るのも困難だった。悩む俺に対し、カタリナとリーシャが相手をすると宣言し、二人にその場を任せ俺たちは先に向かった。

そのまま進む俺たちだったが今度はロキと一緒にいたフェンリルが突如現れ、俺たちの進行を妨害してきた。そして、その場をイオとロゼッタに任せ、俺はルリアとビィの三人でリアクター捜索を行っていた。帝国兵を殺そうとした俺を止めるためにルリアが武器を破壊したため俺には武器がなく、不安に感じていたがルリアに聞くとリアクターの気配はもうすぐそこにあるらしかった。

「なあルリア、どうしてさつき現れたアネバルテはジータの姿をして
いたんだろうな」

「うーん、そうですね……」

ふと、俺は疑問を口にした。ジータとアネバルテが出会う一年前に
あの帝国兵はアネバルテの力を吸収したはずなのに、さつき現れたア
ネバルテがジータの姿をしているのが、ずっと引っかかっていた。

「そうか、ルリアにもわからないか……」

「あ、でももしかしたら」

ルリアが思いついたように俺の顔を見る。

「星晶獣はたとえ力を分離したとしても、本体とは何かでつながって
いるのかもしれない」

「つながっている？」

「はい。私が吸収した星晶獣たちも普段は静かなんですが、本体がい
る島に近づき始めると、共鳴するっていうか反響するっていうか
……、うまく言葉で表せないんですけどすごく楽しそうになるん
です。だから本当はいつも、目に見えない力でつながっているんじゃない
かなって」

「だからアネバルテがジータに会った時の姿がさつきのアネバルテに
も継承されたってこと？」

「ええと、そういうことになりますね」

「でも、アネバルテは島民にふさわしい人の姿になるはずだから、普段
は自分のいつもの姿に戻っているんじゃないかな？」

「言われてみれば、そうですね……」

「うーん、なあ。ビィはどう思う？」

「どう思うっていわれてもなあ、オイラも星晶獣の考えてることが分
かるわけじゃねえしな」

「あつー」

「どうしたルリア？ なんかわかった？」

「いえ……この部屋なんです」

ルリアが立ち止まったのは重厚な鉄の扉の前だった。扉は閉まっ

ていて中は見えない。取っ手の下には最近も使われてことを示すかのように、光沢のある鍵穴がついている。鍵が閉まっていたら面倒だが果たして……。俺は取っ手に手を伸ばし、ひんやりとした感触を掌に感じながら回す。

ガチャツという音と共に扉が開く。鍵は開いていたようだった。中は明るく、けれども重々しい空気が漂っている。

「ビィ、ルリア、入るよ」

「はい」

「ああー」

細心の注意を払い、音が立たないようにゆっくりと扉を開けていく。その重厚な見た目とは裏腹にスムーズに扉は開いていった。一人が入れる隙間ができると俺はそこに身を入れ部屋の中に入り、ルリアとビィを招き入れる。そして、再びゆっくりと扉を閉める。

部屋の中には誰もいないようだった。壁際にはたくさんの本棚が敷き詰められていて、多数の資料が詰め込まれている。部屋は奥に長く、先は薄暗く霞んでいてよく見えない。魔晶の欠片が散らばった机、静かな重低音、そして重々しい空気で構成された部屋に、それは坐していた。

「これがリアクターか……」

「思ったより大きいんだなあ、でもこの穴はなんだ？」

リアクターの巨大な塊の中心付近には何かで壊されたかのように大きめの穴が開いていた。多数のケーブルが天井とつながる精密なもののように思えるのに、その穴だけが場違いなものとして存在していた。

「これって、もうリアクターは壊れてる？」

「一応星晶獣の気配はしますが、すごく弱々しい感じがします。今はもう、停止しているみたいですね」

「もしかして、黒騎士たちが先にここに来ていたんじゃないか？ それでリアクターを壊して停止させたとかさ」

「俺たちより先に？ 言われてみればあの後何度か戦闘があったしな。あっちが先に着いていてもおかしくはないね。でもだとしたら、

誰かここに残っていてもいいはずじゃないかな」

「うーん、それは分からねえけど。全員でフリーシアを捕まえにいったとか、か？」

「どうだろう、この近くにいるのかな？　ちよつと外に出て探してみるから、ルリアとビィは待ってて。すぐ戻る」

俺はリアクターの近くにルリアとビィを残し、扉のほうに歩いていく。取っ手をつかんで回し、薄暗い廊下へと足を踏み入れるとき、ふと、俺の背後が心なしか暗くなつたような気がして。何となく後ろを向こうとしたとき、叫び声が上がった。

「うあつー……」

「ルリアー！」

ルリアの驚いた声が途中で途切れ、ビィが叫ぶ。急いで振り向いた先には、何かに魅入られたかのようにこちらに微笑みかけるジータが、左腕にルリアを抱えるように立っていた。全身が血塗られたその姿は可憐な少女の姿には全く似合わなくて。俺は言葉を失いつつ、ジータの右手がつかんでいる、地面に横たわった何かに気が付く。

「え、え、なんで……ク、クラリスなのか？　ジータ、なんでクラリスがここに……そんな……」

「ん？、お土産だけど気に入らなかつた？　やっぱりカリオストロとシエテも付けるべきだったかな。グランたち来るの遅くてすぐく退屈してたんだよ？　暇だからリアクター壊そうとしたら、自己防衛システムだなんだっていきなりドローンが飛んできてね。でもすぐ壊れちゃった」

頭の回らない俺にはクラリスから視線を外すことができず、脳に響いてくるジータの言葉は異国のそののように聞こえた。クラリスは両目を閉じたまま微動だにしない。引きずられ続けたのか、服はボロボロになり、全身におびただしい切り傷や擦り傷を作り、もとの肌色が血によって見分けられないほど出血している。遠目からは気を失っているのか死んでいるのかさえもわからなかつた。

「ジータ、まさか殺したわけじゃないよな？」

「そんなことするわけじゃないでしょ？ 気絶してるだけだよつ。ああ、でも結構長い距離歩いてきたからね、階段とかもあつたし。でも、死んではないでしょ」

それを聞いて一安心したのもつかの間、ジータの顔に笑みが浮かぶ。

「だってさ、死んだっていう事実を見せるより、死ぬその過程を見せたほうが絶対面白いじゃん？」

「何を、言ってるの……？」

「そんな馬鹿じゃないでしょ、グラン。どうしたの、いきなり私が現れて、ルリアが気絶して、街にいるはずのクラリスが怪我をしていて、混乱した？ だあかあ、今ここで殺すって言ってるの、グランの目の前でね。どう、解体ショーでもやってみる？ あはは、いいねその表情。でもその前に、」

ふふつと笑みをこぼし、ルリアを乗せていた右の手をひらりと振る。同時にジータから少し離れた場所を飛んでいたビィの羽が見えない力によつて無理矢理閉じられ、そのまま体ごと高速で壁へと叩き付けられた。柵が倒れ、資料が周囲に散らばるそこにビィの姿は見えない。

「ジータ、お前っ」

「邪魔者は排除しないとね。それに言ったでしょ、次会った時は容赦しないって。それじゃあ始めよつか、今までのすべての恩返しをしてあげる。お願いだから私が満足するまで壊れないでね、骨が折れても死にそうになっても何度でも回復させてあげるから、ね！」

0から1は作れない 前編

耳障りな重低音が包む部屋の中で明るい鼻歌が聞こえる。俺から少し離れた場所にいる少女はその手に大柄な銃を持ち、楽し気に弾を装填して獲物に銃口を定める。引き金にのびる細い指がゆつくりとゆつくりと……その時間が俺にはとても長く感じて。引き金の引き切った銃は撃鉄が落ち、火薬が爆発する破裂音と共に弾を発射して俺の肉を抉った。

本来の速さとは裏腹に、冷たい金属の感触が俺の中を貫くのがゆつくりと全身に伝わる。次第に生まれ始める痛みは予想していたとしても我慢できるものではなく、奥底から苦痛の悲鳴が意図せず漏れる。肺から空気が抜け、力の入らない足は空を遊び、新鮮な空気を求め口を開け閉めするも、締まった首は何も通さない。落ちかける意識の中で足先が地面に触れて、わずかな気道の隙間が空気を全身に送り込み、俺はだらしのない獣のように息を吹き返す。

「ふふっ、今のは危なかったんじゃない？」

机にきれいに並べた弾を一つ手に取りながら、ジータが笑う。空の薬莖がいくつも散らばっているのにもかかわらず、俺の身体に開いた穴は少ない。くらくらする視界が戻り、焦点が合った俺は次が始まるのを理解する。

「さうて、次はどこを狙おっかな？」

武器の持っていないかった俺にはなす術もなかった。抵抗も虚しく俺の体を魔法で縛ると、ジータは縄紐を出して空中に固定し、そこに動けない俺の首をくくった。体重で首が締まり息ができない俺は、解放されている足だけをバタバタと動かして、偶然床に触れたつま先で全身を支える。ジータはそれを満足げに見ていた。

「絶妙な高さでしょ？　そうやって立ってないと息ができない。疲れて足を休めようとしても息が締まるから休むこともできない。今のままでも不快なのに……グラン、私はグランの頑張りに期待しているよ」

そう言うと、いつの間にも手に持っていた剣の先を俺の肩にゆっくりと押し当てる。容易に肉を貫くその痛みに鋭く反応した俺の身体はつま先立ちを忘れ、当たり前のように首が締まり、痛みに頭の回らない俺は水のない魚のように体を震わせる。ジータはおかしそうに笑っていた。

それは何度も繰り返された。足しか動かせない俺は恰好的だった。ジータは用意周到で、俺がリアクターのある部屋に来ることを予見していたのか、何種類もの武器を用意していた。その中の一つを手に取り、ジータが語り出すことでそれは始まった。

「そうだね、弓といえぱりメートルとスーテラかな？　ありがちな方法なんだけど、私の身体の各部分に点数をつけてね。でもあの二人は点数のつけ方が細かったな、左手の親指が何点、右の鎖骨を何点、みたいな感じにね。普通に使っている矢だと大きすぎるから、先がダーツみたいに鋭い特別な矢を使ってね、遠く離れたところから私を狙ったんだ。でも、あの二人は上手かったよ？　射る前に宣言していたの、ここを狙うから、って。それで二人とも百発百中だから笑っちゃうよね」

そういつて矢を番えるジータは高々に宣言する。

「時間をたっぷりかけて遊びたいんだけどね、時間もあまりないしほかにもやりたいことがあるから……よし、眉間にするね！　じゃあ、眉間が百点ってことで……」

ジータから放たれた矢は寸分違わず眼前まで迫って……

ジータは夢の中で自分が受けた虐待ともいえる行為をすべて覚え

ていて、その全てを俺に対して繰り返すつもりのようなだった。俺はただの的で、標的で、生きた人形だった。俺の身体は時には鈍器で軋み、時には鋭器で貫かれた。

全身から零れる血液は次第に多くなり、床には血だまりができる。ある程度の大きさの血だまりができるまでとジータはその血液を空中に浮かせ、ごみを取り除き、傷跡から体内に戻した。その後全身の傷をも治し、俺の身体は傷一つなく見た目には元通りになった。けれど記憶は消えず、心的なストレスは蓄積される。傷ついては直し、それが繰り返され、俺の身体は道具のように扱われた……

「時間がないからあと2発にするね。それじゃあ、最初の一発は右耳にしようかな。根こそぎ取ってあげるから覚悟しておいてね。そのあとは……うん、心臓にしよっか！ 大丈夫、死ぬ前に元通りに治してあげるから、ね！」

身体が動けない俺に、苦痛から逃れる方法はほとんどなかった。唯一できたのは、痛みを和らげるために痛覚を鈍くすることだった。もちろん自身に回復魔法をかけて、開いた傷口を閉じることがはできる。けれど、それをやってしまうと確実にジータに見つかる。ジータの見えないところ、気づかないところでは俺は動けなかった。

痛みを完全に遮断することも同じ理由でできなかった。今のジータの前で苦しみを演じたとして、ばれないはずがない。本物の痛みによつてのみ、本物の苦しみを表現できる。ジータが見たいのは俺が苦しんでいるところなんだから、そこが本物じゃなかったら、ジータは敏感に反応するだろう。

「じゃあ、撃つよ〜」

銃口が狙いを定める。カットされた痛みだとしても痛いものは痛いし怖い。俺の視線は銃にくぎ付けになり、引き金にかけられた指を注視する。あの指があそこまで動いたら、また……。じりじりと動く指がかちりと動き、撃鉄が落ちる。

視界の隅で、ジータが笑った気がした。

一瞬何が起こったかわからなかった。視界の先ではジータが、いや部屋全体が左右に揺れている。脳内には甲高い音がぐるぐると鳴り響く。なにも分からず失いかける意識を、突き抜けるような痛みが目覚めさせた。

「苦しそうだけど大丈夫？　ほらお子様じゃないからわかるでしょ？、つま先立ちをすれば息ができるって、ほら！」

ジータが揺れながらゆつくり歩いてくる。いや違う、俺が揺れていた。酸素の足りなくなつた脳が失神するのを、激痛なんて言葉じゃ表せない痛みが許さなかった。俺は起きていることを、生きていることを強いられた。

右耳のあつた場所からは血がとめどなく流れ、新鮮な痛みを血液と共に全身に運んでゆく。身体の各所が沸騰したように熱く、凍えるように寒い。俺の意志に反して足が痙攣し、俺は首だけで全身を揺らす振り子のようになっている。痛みに叫び声をあげそうになるが、すでに肺に息の蓄えはなく、首が締まっている今呼吸はおろか声を上げることもできない。

「気づいてないと思つた？　ずっと痛みを和らげる魔法を使つていたんでしょ？　うふふ、いい表情だね、かわいいよ、グラン。かわいいからちよつと助けてあげる」

ジータの言葉と共に首にかかる力がなくなり、俺の身体は地面に崩れるように倒れこむ。同時に切望していた空気が体内に入ってきて、全身に行き渡る。白黒に点滅していた視界が元に戻ると同時に意識もはつきりし、その影響で痛みがさらに増幅された。

「うあああ、あ……、がはつ……あああああああ」

耳に手を触れよう思つたら、生暖かい液体しか触らなかつた。あるべきものがそこにはなく、嫌悪感で吐きそうになる。

「人を絶望させるには落差が大きいほうがいいって聞いたことがあつ

てね。だんだんと絶望させていっても慣れちゃうからあまり影響が大きくないけど、一気に落とすとそれだけストレスに感じるらしいよ。耐えられる痛み慣れちゃったから苦しかったでしょ？ でもね今のは普通の痛みなの、耳を根こそぎむしり取られた時に誰もが感じる痛み。それでさーグラン、その痛みが今の何倍にも増幅されたらさ、人間ってどうなっちゃうのかな」

その言葉の意味を理解する前に、脳が恐怖を予感し、身体が打ち震える。

もう痛いのは嫌だ、もう苦しいの嫌だ。

「ジー……タ、もうやめてくれ、お願いだから、もうやめてくれ……もういやなんだ！」

「え、どうしたの？」

くすくすと笑い、ジータが慰めるように俺の頭をなでる。

「壊れないでって約束したのに、もう痛み到我慢できなくなっちゃったの？」

「……だって、もう痛いのは、もう痛いのは嫌なんだって！」

「でもだめだよ？　だってグランは団長なんだから、これぐらいは耐えないとね。それに私はこの何倍もの苦痛に耐えてきたんだから……ほら、今魔法をかけたよ、痛みを何倍にも増幅する魔法をね。ほら立って、縄に自分の首をくくって？」

「いやだ、俺はもう……誰か、ジータ……助けて」

「あと一発耐えられたら一度銃はやめてあげるからね、ほら早く！」

「いやだ！　これが終わっても次があるんだろ？　それが終わっても次が、その次も、その次も……あ、あばあ！」

俺の身体が勝手に宙に浮き、空中の縄に首が固定される。つま先立ちすれば何とか呼吸ができる絶妙で最悪の高さ。俺は必死に呼吸をし、すでに魔法で拘束された身体をそれでも揺らし、なんとか抵抗しようとする。

「時間がないって言ったよね？　それに助けてって何？　私への侮辱

？ グランが私のことを嘲笑ってた時、私がどんな気持ちだったかやっとわかった？ ねえ、こんな苦しみを味わうんだったら死んだほうがましでしょ？、死にたいでしょ？ でもグランはそれを許さなかった、誰もが私を生かして苦しめ続けた。今更、そんなのってないんじゃない？」

ジータが背を向け、銃の置いてある机に向かっていく。立ち並んだ弾の一つを手に取り、慣れた手つきで装填して、銃口を俺に向けて。「次は心臓だよ、今の何倍も何倍も苦痛に感じるようにしてあるから、頑張つて、私のために苦しむきれいな姿を見せてね。大丈夫、死にはしないから」

引き金に指がかけられるのが見える。歯ががたがたと音を立ててなる。恐怖に耐えられなくなり、足の力が抜け、首が締まる。このまま、首が締まり死んでしまえばどんなに楽だろうか。けれども、手の届く範囲に生があることがで、俺の本能が死を選ばせなかった。酸素が欠乏し、意識が落ちようとするその寸前に、勝手に足がつま先立ちになり肺に空気を送る。俺は死ねなかった。

「じゃあ、撃つからね〜」

……引き金が引かれる。銃声が聞こえた気がする、痛みを感じた気がする。身体の反応なのか、口から血が噴き出した気がする。ジータの笑い声が聞こえる、そんな気がする。

声が聞こえる。意識は、あるようだ。痛みはあるような、ないような。平衡感覚がないのか、身体を丸ごと失ったのか、俺の意識だけが存在している、そんな気がする。

「グラン！」

声だ。ルリア……のなのか？

「グラン、ごめんなさい。私はもうあなたが苦しんでいる姿を見たくなくて……」

目を開いたのか、いや俺の目は今でもあるのかさえわからないが、俺はルリアを見ていた。その横にはオルキスが立っている。

「オルキスちゃんも私に賛成してくれて。私たち、アーカーシヤを使ってジータのいた過去を消そうと思っんです。そうすればグランは……救われるから。で、でも、もしグランが嫌だというのなら、ジータを消したくないんだったら……」

ジータを消す。ジータを、俺の姉を存在ごと消し去る、なかったことにする。そんなの……だめだ、それじゃあジータがいなくなる。もつといい方法があるはず……。

「でも、ここでジータを消さないと、グランはまた終わりのない苦痛を受けることになるんです……、それでもグランは大丈夫なんですか？」

苦痛、あの苦痛をまた……。記憶が蘇る、ついさつき味わった死よりもつらい苦痛。それをまた味わうなんて、そんなの嫌だ。でも、ジータを失うのも……。

「どちらかしか選べないんです。ジータを消さない代わりにグランが苦しむか、グランが苦しまない代わりにジータを消すか。私は……グランにはもつと自分のことを大事に考えてほしいです」

そう言うルリアはうつむく。もつと俺を大事に考える。グランは俺、ジータは……他人。他人の生き死になんて、存在なんて、どうして俺の存在より優先して考える？、どこにそんな義理がある？

「俺は……いやだ。もう苦しみたくない。痛いのは嫌だ、嫌だ……嫌なんだって！ ジータはもう、昔のジータはじゃない、ううん、違う。あれはもうジータじゃなかったんだ。あれは他人、俺の知ってる人じゃない。あんなのジータじゃない。俺は知らない人のために苦しみたくない」

「それなら、アーカーシヤを」

俺はついているのかさえ分からない首を縦に振った。それを見たルリアには笑顔が戻り、オルキスのほうを向く。俺には聞き取れない言葉を二人がつぶやき、そしていつか見たアーカーシヤが現れて、そして……

「グラン、グーラーン！」

「おいしい、飯食った後に寝ると牛になるんだぞ？ そりやあいい天気
だけどよお」

「んん？」

目を開ける。ぼやけた視界に二つの顔が見える。何度か瞬きをしてピントを合わせると、青が映える広大な空を背景にルリアとビイの顔が俺を覗き込んでいるのが分かる。

「あ、あれ？ おはよう……」

「おはよう、じゃないです！」

ルリアがふくれっ面を見せる。それが可憐でかわいくて、俺は思わず頭を撫でてしまう。

「あつ、えへへ」

「ルリア、そんなのでこいつを許しちゃだめだろ！」

グランサイファーが悠々と空を翔けていた。見上げれば雲一つない空から、太陽が心地よい光を放つ。時折涼し気な風がアクセントになり、飽きの来ない暖かさに無抵抗のまま俺は大きくあくびをする。幸せだと、素直に感じた。

「それで、ルリアとビイはどうしたんだ？」

「ルリアが今日の予定をグランに聞きに行ったら、寝てたからよお、起こしてやったんだ。そりやあ心地いい天気だから昼寝したくなるのもわかるけどよ、朝飯くったばっかでいくらなんでも早すぎるだろ」「そうだったのか。ええと、今日はよろず屋の依頼がいくつか来てたから……」

違和感があった。俺の口からすらすらと出てくるそれは、俺の知らないものだった。よろず屋の依頼も島の名前も聞き覚えがなかった。

「じゃあ、午前中はずっと空旅なんですね、分かりました！ みんなに言ってこようつと」

「あ、待てよ、ルリア〜！」

二人がいなくなったあと俺の中から違和感が消えることはなかった。依頼も島の名前も知らない。聞き覚えすらない。けれど思い出そうと思えばすらすらと出てくる。依頼だってそらで言えるし、島の特徴や気候でさえも思い出せる。俺の記憶の引き出しに、誰かが勝手に情報を仕舞っていったかのような。誰かに植え付けられた記憶みたいで気味が悪かったが、単に寝ぼけているだけのようにも感じた。

自室に戻ろうと立ち上がる。甲板にはそれぞれの趣味に没頭する団員たちがそれぞれの時間を過ごしている。いつも通りの日常があり、俺はほっとする。何人かに声をかけた後船内に入り、廊下を歩く。俺の部屋までもう少し、武器の手入れでもしようかと思ったその時、違和感が目に映る。

「あ………れ？」

俺の部屋の隣って、何もなかったっけ？ 隣の部屋に誰か大切な人がいた………ような………。

俺の部屋の扉はすぐ先にある。けれど違和感に囚われた俺の足はその場にとどまる。目の端に映る壁に顔を向け、じっと見つめて、手で触る。よく見れば、その部分だけ壁の色が微妙に異なり、肌触りも違う。まるで、ここだけあとで塗りなおしたような。

ラカムに声をかけられるまで、時間を忘れて俺はそこに立ち尽くしていた。

0から1は作れない 後編

「お？、グラン、そんなところでどうしたんだ？」

「ああラカム、久し……ぶり？」

意図せず口をつく久しぶりという言葉はさらに俺を困惑させる。毎日同じ艇に乗り、顔を見合わせているはずのラカムなのに、前に会ってから随分と時間が経っていたような気がした。時間間隔さえもが疑わしい。

「久しぶりっておめえ……、さつき朝食の時に会ったばかりじゃねえか。ははっ、どうした？、まだ寝ぼけてんのか？」

「あはは、そうかもしれないね」

「それで、そんなところでどうしたんだ？」

「いや、この壁に違和感を感じて、ちよつとね」

「言われてみれば少し他の壁と色が違うな。まあ、違うペンキを使ったりやそうなるか。どうだ、この際グランサイファー中の壁を塗りなおすか？、最近資金も増えてきたしよ」

「違うペンキ？」

俺がこの艇に来る前の話か……？　そういえばラカムは子供のころからグランサイファーの整備をしてきたんだから、自分で壁とか部屋とかもアレンジしたのかもしれない。

けれど俺の予想とは違い、ラカムは少しの不機嫌な顔をして、強めの口調で俺に質問をする。

「おいグラン、冗談だよな？　この壁を塗ったのはお前だろ？」

「お、俺？」

情景が浮かぶ。誰かに記憶を挿入されたかのような、さつきも感じた奇妙な感覚。俺とルリアがまだ木目の見える壁の前に立ち、廊下に白いペンキの入ったバケツをおいて、刷毛を持って。俺の塗った場所はムラがあつてそれを見たビィが笑い、ルリアが俺の塗ったところを塗りなおしていく……

「でもなんで？　ここはもともと……そう部屋があつたはずなんだ！

あれ何で、俺は……」

新たな情景が浮かぶ。部屋の壁を壊している俺とラカム。二つの部屋を仕切る壁を取り壊して、一つの大きな部屋にするために。今その部屋は、

「俺の部屋か……」

「ああ、そうだが……グラン大丈夫か？　いつものお前らしくないぞ？」

ラカムが心配そうに俺の顔を覗き込む。けれど俺にはわからなかった。もちろん、この艇で過ごした大切な思い出を忘れてしまっていたのかという疑問もある。でもそれ以上に、今蘇った記憶が、俺に植え付けられた偽りの記憶のように感じたことに違和感を感じた。記憶はある、憧憬も覚えている。俺は確かに自分の手で壁を壊し、ペンを塗って……、でも、それは本当に今の俺がやったことなのか？「知らず知らずに疲れがたまってるのかもしれないねえな。エルステ帝国と国民を救うっていう偉業を成し遂げた後だしな」

「エルステ帝国を救った？、俺が？」

そのあとラカムに本気で心配されながら、ここ数日間の出来事を聞いた。黒騎士と共に帝国に潜入した俺たちはエルステ帝国軍大將アダムとの協力を得て、一時撤退するがタワーに潜入。起動中のリアクターを止めるために内部を奔走し、敵を倒し、そしてフリーシアのところへたどり着いた。魔晶の力を使ったフリーシアが悲願を達成するために自らの命運をミスラに宣誓し、俺たちは黒騎士の言葉に従い過去を変えるために星晶獣アーカーシャを探した。ルリアの力の暴走のせいで一時は危険な状態に陥ったが何とかねじ伏せ、フリーシアを止め、リアクターも止め一件落着……。

ラカムの説明と共に場面場面の光景が脳内に再生され記憶が蘇る。けれど違和感は常に消えることはなかった。その場にいたのは俺なのに、俺にはそれが誰なのかわからなかった。

ラカムがグランサイファアの操縦に戻り、俺は再び廊下に残された。ずっと向こうに騎空団の子供たちの笑い声が聞こえる。俺は壁

の前から動けなかった。こうやって待っていればドアノブがふつと現れて、俺に真実を見せてくれるのをひそかに考えながら、反対側の壁に背中を預け、ぼーっと立っていた。

「その部屋に、何か用があるのか？」

しばらくの沈黙は、威圧的な少女の声に破られた。横を見るとカリオストロが少し離れた場所に立っている。

「今のグランは、0じゃないのか？」

カリオストロが質問を重ねつつ、俺の方へ近づいてくる。いつもの、身内にだけ見せる不機嫌そうな顔なのに、その瞳は期待を浮かべているかのように、少し輝いている。

「ゼロ？ いや、今部屋って言ったか？ 何か知っているのか、カリオストロ！」

植え付けられた記憶が正しければ、まだこの壁が扉だったときにカリオストロとは出会っていなかったはずだ。誰かに聞いた可能性もある。けれど俺はカリオストロがここに一つ部屋があつたときのことを知っていると直感した。

カリオストロは俺の質問には答えず、独り言のような呟きをさらに続ける。

「二昨日は知っている素振りは見せなかった、だが……。おい、ちよつと話すぞ」

そういうと俺の手をつかみ、俺の部屋まで強引に引っ張っていく。ドアを開けようと慌てて鍵を探す俺の耳に、ガチャリとドアの開く音が聞こえ、俺の部屋があらわになる。オレ様にとっては鍵のかかった部屋もそうでない部屋も大して変わりはない。そう言いたげな表情をせずけと部屋に入るカリオストロの、その向こうに見える見知らぬ部屋を俺は茫然と見ていた。

部屋が広い。二部屋を一部屋に作り変えたんだからそれは当たり前だが、その感想を俺が抱くのはおかしかった。だって俺は今朝もこの部屋で起きたはずなんだから。

「広いんだな」

部屋を見回し、カリオストロは鼻を鳴らす。そして部屋の隅に隠れていた机を無遠慮に引っ張ってくる。椅子に座った。一応の客人だから、俺はお湯を沸かしてお茶を入れる準備をする。

お湯が沸くのを待つ間、見知らぬ部屋を探索した。タンスや棚、ベッド、そして壁に掛けられた武器や防具。一見、ものであふれかえっているように見えるその部屋は俺には閑散として見えた。いつも座っている机には―この机の記憶ははつきりとしていた―日誌が置いてあって、ぱらっと中を見た感じでは違和感は抱かなかった。その横には団結成当初の写真が写真立てに飾ってあり、写真には四人と一匹の姿が映っていたが、俺にはどうにも一人足りないように感じた。

お湯が沸いた音に気づき、お茶を入れる。座った態勢のまま動かないカリオストロの前に湯気のたったカップを置き、俺も椅子に座る。カリオストロはただ黙ったままで、立ち上る湯気だけが時が動いていることを示しているみたいで。話すぞ、と言っていたのに何も口にしていないカリオストロを前に俺は何をすることもできず、ただじっと待っていたがそうも行かず。すぐに沈黙に耐えきれなくなった俺は軽く見流した日誌をちゃんと見ようと立ち上がろうとして、その時カリオストロが口を開いた。

「ずっと昔だが、オレ様は錬金術を発明した」

「……」

立ち上がろうと足に込めた力を脱力し、再び椅子に座りなおす。出会ったばかりのころ、カリオストロの昔の話は軽くは聞いたが、それを何故今するのかはわからなかった。

「当時力のあった魔法学会に研究成果を提出した。すぐに認められるとは思わなかったし、それでいいと思っていた。その頃のオレ様はす

でに自分の身体ぐらいなら錬成できるようになっていたし、記憶を高次元に保管しておく方法も見当がついていた。永遠の命を手に入れたも同然のオレ様にとって時間は飾りのようなものだったからな。認められるまでいくらでも待ってやる、そんな気だった。だがオレ様の予想は外れ、すぐに錬金術は当時の魔法学会に認められ、オレ様は錬金術の開祖として有名になった」

すでに湯気もたっていないカップを手にとり、口に運ぶ。少女は表情を崩さぬまま話を続ける。

「万人がオレ様を称賛した。無から有を作った偉人だと崇められた。オレ様も自分の発明に自信を持っていたから悪い気はしなかった。オレ様はさらに錬金術を研究し、何千年もたった今でも錬金術師を名乗る奴はいる。いい研究をした、そう思っていたがほんの数日前に勘違いに気づいた」

美少女の表情をすこし歪め、不機嫌な顔に変わる。元が元なので、前も後も同じように可愛いんだけど、と思いつつもカリオストロの話は続く。

「驚いたよ。エルステ帝国宰相を倒し計画を阻止するっていう大きな仕事が終わりに、久しぶりに一つ上の次元に保管しておいた記憶を同期したら見も知らぬ記憶が、人物が流れ込んできたんだからな。ほんと久方ぶりに驚いたよ。オレ様が知っているのとは全く違う歴史と事実。そしてお前の横に常にいたもう一人の団長……」

「もう一人の……団長？」

自分で口にしたのにも関わらず、懐かしい響きを感じた。心に引つかかったままの違和感が揺れた。俺の言葉も戸惑いも意に介さず、カリオストロは話し続ける。

「すぐにオレ様はお前に会いに行った。あいつはどこに行った、なんですつとあいつのことを忘れていたんだって。けれどグラン、お前は至極不思議な顔をして返答した、そんな奴は知らない。ビーにも聞いた、あいつも長い付き合いだったからな。だが覚えていなかった。ルリアもカタリナも、みんなだ」

カリオストロが手を動かす。さっきみた写真がひらひらと宙を動

き、カリオストロの手に収まる。

「ここにも写っていない。あいつの存在はこの世界から一切の痕跡もなく消えている、オレ様の記憶以外のな。思い当たる節はあった。つい最近話に上がった、星晶獣アーカーシャだ」

星晶獣アーカーシャ。さつき思い出した記憶で俺が戦っていた星晶獣。過去も未来も、すべての歴史を変えることができる規格外の能力を持った生き物。

「まったく中途半端な仕事をするから誰かが苦しむんだ。この世界の次元の歴史だけじゃなくて、すべての次元の歴史も変えればオレ様だって忘れたままでいたのに。だがまあ、今回ばかりは好都合だ。もう一度アーカーシャの力を使い、歴史を改変すればあいつはまたここに戻ってこれる、そう思ったからな。でもダメなんだ。なあ、グラ
ン、」

「0から1は作れないんだ」

その言葉は直接脳内に注ぎ込まれたかのように、頭の中をぐるぐると反響した。本能が全身全霊で何かを思い出そうとしているのを感じた。カリオストロの話の「あいつ」の存在、その存在は俺にとってとても大切な存在のはずだった。でも俺は0だった。

「お前とルリアに、もう一度アーカーシャの起動を頼もうとしたときに気が付いた。オレ様の知っているあいつをお前たちは知らない。姿、性格、あいつの全てをお前たちに説明しても、オレ様の記憶をお前たちに植え付けたとしても、あいつの存在はお前たちにとっては架空の存在。いわば、小説の登場人物のようなもんだ。小説の中の人物は歴史改変したとしてもこの世界には存在できるはずがないだろ？

それと同じだ。あいつはお前たちにとっては架空の人物で、0なんだ。0から1は作れない。オレ様が発明した錬金術も元は科学の知識と魔法を合わせたようなものだ。オレ様は有をさらに大きな有に

変えただけだった」

カリオストロの言葉とは別に俺の頭の中が微かに揺れる。

「アーカーシャはあいつの存在を歴史からなくし、あいつはこの世界で0になった。1から0にすることはできるが、逆はできない。もともとなかった物をあつたように歴史を書き替える、それはもう歴史改変なんて小さいもんじゃない。そんなことができれば、世界を崩壊させるような兵器も、空想上の生き物も、なんだって実現させることができる。あいつはこの世界ではそんな存在になっちまったんだ。でもグラン、お前の感じているその違和感は、お前にとってあいつが0ではない証拠だ。お前なら、ん？、グラン、お前……」

頭の中の振動がさらに大きくなる。これは……声？ 誰かが俺を呼んでいる？

「そうか、お前はまだ……。それならまだ大丈夫だ。お前のいる世界にはまだあいつはいる。いいかグラン、0にしたらだめだ。そうなたらもう取り戻せない」

振動が、声がさらに大きくなり、俺の頭に響き渡る。視界がふっと消え、瞬間的に意識が飛び、戻る。ラクムとオイゲンに無理矢理酒を飲まされた時と同じ感覚。俺は歯を食いしばり、口の隙間から何とか声を漏らし、カリオストロに質問する。

「カ、リオストロ、俺は、何をすればいいんだ？ この話は、一体、カリオ、ストロは俺に、何を……」

「かわいい弟子を一人失う、そんな世界の話だ」

ひと際大きな声が、俺を呼ぶ叫び声が聞こえ、俺の意識は引つ張られる。目の前にいたはずのカリオストロの顔、その期待のこもった瞳に影を落とし、俺の視界が暗くなる。

カリオストロの話はフィクションのようなたとえ話でうまく理解できたかわからないけれど、伝えたかったことはちゃんと受け止めたと思うし、話に出てきた「あいつ」が俺の違和感の原因で、俺にとって大切な人であったことははっきりとわかったし、俺はまだ0でもないし、1のままの未来を迎える方法もあることもぼんやりとわかった。

ぷつんと意識が途切れたような気がして、それなのに背中に冷たく硬い感触を感じて。目を開くとさつきまでの場所とはうってかわって薄暗い部屋に、俺のことを覗き込む顔が見える。

「グラン！ 良かった、やっと目を覚ました……」

「クラリス……」

その瞳に涙をいっぱい溜め、俺を覗き込んでいるのはクラリスだった。

「やっと目覚めたのね。主賓を待たせるなんて、グラン、躰がなってないね、お仕置きだね……」

くすくすと笑いながら俺の方を見る姿を遠くに見た。ずっと思いつけなかった大切な存在がそこにいた。

捕獲

手に感じるのは地面の硬く冷たい感触。目の前にいるのは俺を殺そうとする一人の家族。グランサイファアの居心地良さも、穏やかに立ち上る湯気も、わがままで不機嫌そうな少女の顔も今はない。でもここには現実があつて、ジータがいる。

「そうか、俺はジータを……」

「どうしたのグラン、さつきまでの全部忘れちゃったの？ それがちよつとむかつかくなあ。あんなに苦しそうで狂おしいほど可愛かつたのに。もつと私に、苦痛に歪むあなたの顔を見せてよ」

ジータが挑発するように声を上げるが、俺にはそれがうれしかった。ジータの存在も俺がそれを知っているという事実も心を震わせた。未だ心配そうに覗いてくるクラリスに小声で大丈夫と言ひ、地面に膝をついて上体を起こす。視線の先の薄暗い部屋の奥が、微かな明かりを伴って見える。

「ジータがいなくなった世界の夢を見ていたんだ」

「……そう。それで？」

「俺にはずつと違和感があつた。何かを、誰かを忘れているつて。でも、どこを探してもそれは見つからないし、世界はそれが事実のままに進んでたんだ。ちよつと先の、未来の話だった」

リアルな夢は別の世界線で別の自分が体験した事実。どこかの島のどこかの村の村長が話していたのを唐突に思い出す。

「でもたった一人だけ覚えていたんだ。そして教えてくれた。俺やみんなが忘れてたその誰かは教えてくれなかったけれど、もつと大事なことを教えてくれたんだ。単純だけど、とても大切なことを」

部屋の奥におぼろげな力を感じ、俺は確信する。この部屋の奥にはアーカーシャがいる。歴史をも改変させる強大な力の片鱗が、俺の知らないところで生きている別の自分が体験した事実を、俺に夢見させたということに。

「夢の中で教えてくれたんだ。いつもの不満げで気の乗らない声だつ

たけど、その目には期待が込められて。何度も何度も、無にしちやいけない、0にしちやいけないって。俺も目が覚めて気づいたんだ、疑いなく知っていたことを忘れるそのつらさは、一時的な痛みなんかよりもつらいって。だから残念だけど、ジータの望みは聞けない。死なせないし、歴史から存在を消すなんて、そんなことはさせない」

「それが私の望みとは正反対で、私がさらに苦しむことを知っていないも？」

「ああ。俺が君から、昔のジータを取り戻してみせる」

「今の私が、過去に隠していた本当の私だとしても？」

「それは……えっ、どういうこと」

「だから、グランたちと仲良くやっていたのは本当はただのごっこ遊びで、本当の私は昔から死にたくて仕方がなかったジータちゃん。もしそうだったらどうするのってこと」

「そんなはず……」

俺はジータの顔を覗き込むように見る。その顔は昔のジータのような、まつすぐで温かみのある顔だった。透き通るような瞳は嘘をついているとは思えず、一瞬元のジータに戻ったように錯覚する。

「違うよ、これが本当の私なんだよ」

心の中を見透かされたかのように、ジータが返答する。

「だって……いやそんなはず……。俺の知っているジータはみんなに優しくして、真面目で、俺のことを支えるって約束してくれた……」

「そんなこともあったね。あの時は義務感でそんなこと言っちゃったけど、今ではすごく後悔してるんだ。弟の夢に付き合うなんて奴隷みたいで……。ほんとバカみたい。それに星の島に行く？、なにその適当で子供みたいな夢は。勝手にやってろって感じだよね」

「俺が魔法の才能に悩んだ、ときだって……」

昨日のことのように記憶が蘇る。あの言葉にどれだけ助けられたか……。

「だって単純に体力差を考えれば私が剣術でグランとかに勝てるわけないじゃん？ あの時にはもう限界が見えてきたから魔法でも学ぼうかなって思い始めてね、タイミングが良かったからあんなこと

言っただけだよ？ それを何？、かわいいグラン君は優しいお姉ちゃん
の言うことに感動して涙が出ちゃった？」

鼻で笑うジータの手には、どこからともなく現れた縄紐が握られている。またあれが始まるのか、そんな恐怖感よりも、俺にはジータを失ったかのような虚無感が押し寄せてきていて、正常な思考が働いていなかった。

「かわいそうなグラン。私に構わなければ、死ぬこともなかったのに」
ジータの手から放たれた紐が蛇のように俺の首に絡みつき、締め上げる。目に見えない力が重力をもともせず俺の身体を空中へと押し上げ、全体重が首にのしかかる。身体が苦痛を思い出し、意図せず俺は震えだすが、それに抵抗するように精一杯つま先を立てて、のどの奥に力を込める。叫びたかった。大声で反論したかった。でも心の中には冷静な自分もいて、本当にジータはそうだったんじゃないかと、そう思う自分がいて。思えば古戦場前日の夜にジータの部屋を訪れたときも、いつもとは少し違った雰囲気だった気がする。あれが本当のジータだとしたら。中途半端な決意が出すのはくぐもった声だけで、ジータに投げつけられたのは返答変わりの短剣だった。

緩やかな速度で俺の腹に突き刺さった短剣から、ジータの魔法で増長された痛みが伝わる。耐えようとすると、こらえきれない痛みが肺の空気と共に身体から吹き出し、痙攣する足は地を離れる。酸素の供給が絶たれ、点滅する視界は左右にゆっくりと揺れる。

「もう、もうやめてよジータ！ こんなになつて、もう私、グランの苦しむ姿を見たくない……ねえ……」

「あ、ごめんねクラリス。グランへのお土産がグランの後に死ぬなんておかしかったね。はい、これでどう？」

ジータが片手をあげそこから魔法が放たれる。身体を自由を奪われ倒れこむクラリスが苦痛に声を上げるが、すぐにそのど元には縄紐が襲い掛かり、引きずられるようにして俺の目の前に吊られる。俺とは違い、足をどんなに伸ばしてもぎりぎり地面に着かないようだった。身体が左右に揺れ、その顔はゆっくりと赤みを失っている。

「これで大丈夫だね。ほらグラン、死ぬ前に仲間の苦しみながら死ぬ

ところを見れるなんて運がよかったね。私に感謝してくれないと。そうだ、あとさつき言ったのは全部う……」

突然耳をつんざいた衝撃音は幻聴か。音のする方向に視界が赤く点滅する顔を向けると、2対の短剣が、空色の刀身を淡い紫色で覆いながらまっすぐに飛んでくる。質素な壁と金属の扉があった背景には、土埃しか見えない。ジータも最後の最後まで痛めつけるなんて容赦がないなど頭が回らないまま、首元に近づいてくる剣を、剣に刻まれた模様を垣間見る。どくんと高鳴る心臓。のどのすぐ横をかすめた得物は、見事に縄紐だけを切り裂き、俺の身体はどさりと地面に落ちる。慌てて手をついた俺は自由に身体を動かせることに気づき、同じように目の前で膝をついているクラリスと目を合わせる。

俺とクラリスを解放した2本の短剣はそのままジータをめぐらして飛んでいく。不意のことにも驚かずにジータは魔法を放つが、耐魔法用の武器なのかそれらを反射してなおも突き進む。すぐに武器を構えたジータは剣と剣の応酬に火花を散らす。

「戻れ」

聞き知った声が部屋に響く。土埃が晴れ、二対の短剣は持ち主の元へと戻る。

「そろそろ誰か助けにくるかなと思ったけど、まさかシエテとカリオストロとはね。あの帝国兵たちとはどうなったの?」

意外そうな声色で剣を鞘にしまいながらジータが問いかける。二人がいつジータに会ったのか、あの帝国兵とは何のことなのか、そして何よりもまず市街地で市民の救援を行っているはずの二人が何でここにいるかが分からず、返答に耳を傾ける。

「それはさすがにオレ様を舐めすぎじゃねえか? 開闢の錬金術師様がそこら辺の帝国兵に遅れを取ると思うか?」

「ふーん、結構手傷は負わせたと思ってたんだけどな。シエテは? ガンダルヴァはどうしたの?」

「二国の中将に負けてたら、全空を統べる騎空団の長なんてやっつられないねえ」

「そっか。はあ、流石に私も甘く見すぎてたかな。ここの帝国兵がそんなに強いわけないもんね。でも、人数が増えたところでどうって話だけどね、私にとっては逆に楽しみが増えてうれしいって感じかな」
ジータが両の掌に小さな光球を浮かべる。その独特の色合いを見て、俺は声を上げて警告する。

「シエテ、カリオストロ、あれに当たっちゃダメだからね。身体を拘束されて……俺の二の舞になるから」

「おい、チャンスは一度だからな」

「ああ」

俺の言葉に耳を貸さず、シエテは剣を構え、カリオストロはジータを見たまま動かない。ジータも笑顔のまま、光球を宙に漂わせたまま様子をうかがっている。

光球が放たれるのと、二人が飛び出すのは同時だった。高速で襲い掛かる魔法をシエテは剣で弾き、カリオストロは寸前のところで避ける。そのまま俺のすぐ横を走り去る少女の声俺の耳に微かに残る。

「じゃあなんでグランは今動けるんだ？」

「えっ?」

ジータの掌から第二波の光球が放たれ、その全てを前に出たシエテが剣で薙ぎ払っていく。あとを追うように背中につくカリオストロが何かを呟くとともに腕の周りに魔法陣が浮かぶ。機械的な音が部屋に響く。

シエテが振り降ろした双剣を、ジータは抜刀した両手剣で受け止め、そのままシエテを身体ごと後ろへと斬り飛ばすべく剣を振るう。軽い二本の剣は重い一本の剣には敵わず、弾かれたシエテの上体は崩れるが、その懐から光り輝く剣拓が二本煌めきを放って飛びだし、一瞬反応が遅れたジータの手から剣を弾き飛ばす。

「カリオストロ！」

後ろへ倒れこむシエテと位置を変えるようにしてカリオストロが

飛び出す。両手に浮かび上がらせた魔法陣は回転しつつ、得物を失い態勢を崩すジータに触れようとするがあと一步届かず。勝ち誇った表情のジータから特徴のある色をした魔法が放たれ、カリオストロの腹部に命中する。

「あともう少しだったけど、残念だっ……」

「油断するなといつも言っていたらどろ？」

動けるはずのないカリオストロの足が地を蹴り、両の掌がジータの身体を捕らえる。一瞬の発光後、驚きを浮かべたジータの服の上に古代文字で刺繍された魔法陣が刻まれる。手足の自由が利かなくなつたのか、ジータは力が抜けたかのようにそのままの態勢で地面に倒れこむ。

「これで一件落着か？」

俺の方を振り向くカリオストロの顔はいつにも増して満足げだ。

声は届かず

――

「おい、どうやらこの建物は魔法に対する耐性は万全だが、錬金術に關しては素人並みてえだぞ？」

「へえ、でもそれでどうするんだ？」

「お前の見立てだと、オレ様達がいる真上なんだろう？ だからこうやるのさ」

少女が天井に向かって手を伸ばす。その先から数本の小さな光が糸のように漂いながら昇っていき、天井へと付着すると仄かに部屋全体が明るくなる。そのまま十数秒間、少女は上を向いたまま動かない。身長差だけ見れば父のような風貌の剣士は、隣に立っている少女の行動を訝し気に見ながらも静かに待っている。

「一瞬だからな、仲間を見極めて助けるぞ」

準備ができたのか少女は口を開き、そばにいる剣士を見、にやりと笑う。

不意に地面が消えた。

黒騎士がその手に持つ黒剣を振りおろすために足で踏みしめている地面が、オイゲンとラカムが星晶獣のブレスを避けるために右に左に動いていた地面が、フリーシアが魔晶で纏う、蜘蛛のような外骨格の6本の脚を支えている地面が消えた。その部屋にいた全員が、存在に疑問さえ感じていなかった支えを失い重力に伴って下に落下する。

「うわっ、なんだこれ！ どうなってんだ？」

落下とともに体勢が崩れたラカムが驚きの声を発する。自分と同

じ速度で落下していく人や物、星晶獣の背後で壁が下から上へ流れていく。下に目を向けると二人の人影が上を見上げているのが見える。それが誰なのかを理解したラカムはため息をつきつつ、加速していくその速度が急に収まっていくのに、ほっと溜息をつく。すぐに目に見えない何かで身体全身が包まれ、体勢も元に戻り無事に新たな地面に足を着けた。横を見るとオイゲンと黒騎士も無事に立っている。

「オルキスー！」

落下している最中に拘束から逃れたのかオルキスもすぐそばに立っていた。それを見た黒騎士がオルキスの元へ駆け寄る。

「大丈夫か、オルキス？」

「うん……大丈夫」

「オルキスちゃんも無事に戻ったが……カリオストロ、これは一体どういうことだ？」

オイゲンが痛みにも苦悶の表情を浮かべるフリーシアを見つつ、カリオストロに問いかける。フリーシアは無事に着地できなかったのか背面から地面に激突していた。外骨格自身の重さのせいなのか、衝撃に耐えきれず蜘蛛のような機械にはびびが入り、ダメージが直接フリーシアに伝わったようだった。先ほどまで部屋を囲っていた星晶獣たちは拘束力が弱まったのか、幻のように宙を漂っている。

「カリオストロお、階段でこのおっきな建物を上るの疲れちゃったの。だから上にあるものを下に引きずり降ろしちゃえばいいって思ったんだ。カリオストロは天才錬金術師だからあ、こんなこともできるんだよ！」

「ああ、そうか。まあ結果的にうまい具合に事が運んだから良かったが、もうするなよ」

「ああ、もうしねえ。仲間だけ選んで助けるってのは随分面倒な作業だったからな。今度は堂々と扉をぶっ壊す。だが、ああこっちは外れだったか。おい、グランの居場所はどこかわかるか？ そこにあらはいるはずなんだ」

「いや俺たちは知らねえ。傭兵君二人が先にリアクターを止めに行ったが。多分グランもいるはずだ、そして……ジータも」

「ん？、知ってたのか、なら早い。オレ様達はちよつとジータに貸しがあつてな、なあシエテ」

「リアクターを止めるのが先決だけどね？、でも、うん、貸しがあるね」
「お前ら、リアクターの場所の心当たりとかねえのか？、少し急いでるんだ」

「それなら、オルキスが分かる」

三人の会話を聞いていた黒騎士が口をはさむ。シエテがその顔を見え少しの驚きを浮かべ、もとから顔見知りだったのか話しかける。

「これは珍しいね。七曜の騎士様にこんなところで会えるとはね」

「私もこんなところで空を統べる騎空団の団長に会えるとは思っていなかった。だが今はそんなことはいい、オルキス、リアクターはどこだ？」

「さつきよりも……弱い気配だけど、あっちの方向にいる」

オルキスが斜め上を指さす。カリオストロも大体の方向が分かったのか、にやりと笑い踵を返す。

「もうこの場は大丈夫だよな？、まさか魔晶の力を奪われて、さらに負傷してる一人に負けるなんてことはないよな、黒騎士殿」

「もちろんだ、こちらの心配はするな」

「じゃあオレ様は、ジータを一発ぶん殴りに行ってくる」

――

「というわけだ。だから黒騎士たちの方は無事だし、フリーシアに關してももう問題はないと思うよ」

シエテは自らのマントを地面に敷き、その上にクラリスとルリアを寝かせている。ルリアは気絶しているだけで、けがはないみたいだった。

「バイ君は大丈夫そうなのか？」

「うん。思いつきり壁に叩き付けられたんだけど、なんでか怪我がな

「いみたいなんだ」

俺はカリオストロに治療してもらった腕でビィを優しく抱きかかえている。ジータを拘束した後、カリオストロはリアクターの停止を確認し、俺とクラリスの傷を治療したのだった。カリオストロの掌から放たれた滑らかな魔法が身体全身包み込んで傷跡すべてを消したのだが、彼女曰く、治療ではなく錬金術なので多用はできないらしい。クラリスは傷の治療を受けた後に一言礼を言おうと、緊張の糸が途切れたように眠ってしまった。

地面に転がるようにして倒れているジータをちらりと視界に捉えながら二人に問いかける。身体全身が動かないように錬金術を刻まれたのか表情はびくりとも動かないが、その瞳の奥には憎しみの炎が燃え上がっているようで、俺には直視できなかった。さつきまでの緊迫感はずでになく、部屋は静けさで満たされている。

「カタリナたちは？ 帝国兵をみんなに任せてきたんだけど」

「オレ様達が来た時にはほとんど勝負がついていたな。だが全員でここに来ると厄介だから、黒騎士たちと合流するように言っておいた。的が増えると守りづらくなるから……。さて、お前の質問コーナーは終わりで、次はオレ様が質問者だ。まず、リアクターはお前が止めたのか？」

「俺じゃないよ。ジータが、壊したらしい」

「こいつがが？」

そばに倒れているジータ一瞥し、カリオストロは続ける。

「なんの気の迷いなんだか、おかげでこれで全てに決着がついたわけだが。それじゃあ次だ、こいつは一体何なんだ？」

カリオストロがジータを指さし、問いかける。俺は二人に再興の島でのこと、そしてそこでジータがミスラに誓約した内容を推測を交えて話した。団員全員に話したときは俺も頭が混乱していて、詳しい状況は話していなかったせいで、二人にとって初耳の話ばかりだっただろう。けれど、こんな状況もいまのジータも、もうすぐアーカーシャを使ってすべて元通りに解決できると思うと心が軽い。

「星晶獣との契約か……、こいつも随分と厄介なものに手を出したな。だがなんでジータはミスラに誓約する必要があったんだ？」

「いや、それについては詳しくは分からないんだ」

「そうか。星晶獣との契約となると、断ち切るには自身が死ぬか、契約した星晶獣が死ぬかだな。なんならいつそ、星晶獣をやっちまえば良かったのにな、なあ星晶獣殺しの息子さん？」

「手厳しいな……」

「冗談だ。それでその両方の手段はとらずに、アーカーシャの力を使って契約を破棄しようって魂胆か。聞いたところそのアネバルテっていう星晶獣はアーカーシャよりは強くないから問題はないだろうが……。一個人の目的のためにアーカーシャを利用するのは、どうなんだ、シエテ？」

「あんまり褒められたものじゃないかもね」

「で、でも……」

「オレ様もシエテとは同意見だ。目的は違うとはいえ、やっていることはフリーシアとそう変わらない。アーカーシャの能力は星の民にも恐れられた、歴史を改変する能力。使い方一つでこの世界を終わらせることも可能だ。もちろんグランにその気がないことは分かっているが、小さな歴史改変の一つでも、その影響は離れたところで大きな変化になりうるんだ。バタフライエフェクトって、ずっと昔の研究仲間が言っていたな。お前はすべての責任が持てんのか？」

「俺はジータを取り戻すだけだって！ そんなことで悪い方向に進むことなんてないだろう？」

予想外のまさかの反論で俺の言葉にも熱がこもる。

「リアクターを止めたのは誰だ？ どうして都合よくタワーの扉が開いていた？」

「それは……」

「すべてジータが帝国側についていたからだ。フリーシアはそれで油断して門を開けた、ジータは暇つぶしでリアクターを破壊した。偶然の産物といってもいい。ジータを取り戻したときに、お前はもう一度帝国を止める歴史を繰り返すことができるのか？」

「……」

カリオストロの正論に俺は言葉を返すことができない。敵はファータ・グランデ空域を牛耳る一大帝国、こっちは小粒ぞろいとはいえせいぜい百人単位の一騎空団。今日の勝利をもう一度つかみ取るのは難しいのかもしれない。

「アーカーシャの能力でジータは取り戻せるが、時間を巻き戻すわけじゃないんだろ？ あっちの世界でフリーシアが勝っていたら歴史を改変したとたんにオレ様たちは勝利から敗北へひっくり返るわけだ。だったら、ジータ一人の犠牲で世界を救った方がみんな幸せなんじゃないか、幸いこいつも死にたがっているみたいだしな」

あごでジータをさすカリオストロに、シエテが苦笑交じりに口を出す。

「カリオストロ、もうグランをいじめるのはやめてやれよ。本心は違うんだろ？」

「ふっ、うるせえな。まああれだグラン、オレ様達は都合のいいことに今はお前の団の団員だ。団員は団長の命令には従わなくちゃいけないからな。ほら、さっさとこの世界からおさらばして、お前の姉を取り戻しに行くぞ」

「……いいの？」

「当たり前だ。それともなんだ？、お前は天才錬金術師がこんなへっぽこ帝国に負けるとでも思ってるのか？ そいつは心外だが」

「いやー、そんなことはないけど」

「ならいいだろう。さてどうする、今のそのジータに挨拶していくか？」

「うん、ちょっと聞きたいことがある」

カリオストロがジータの身体に刻まれた魔法陣に触れ、何かを書き足すように指を動かしていく。それに呼応するように古代文字が一瞬輝く。

「ほらできましたぞ。これでこいつもしゃべれるはずだ」

「ねえ、ジータ……」

この世界を変える前に聞いておきたかった。歴史が変わっても昔のジータは昔のジータのままなんだから、もしジータが本当にそうなのなら、俺には……。だが俺の言葉はジータによって遮られた。

「カリオストロ、どうやったの?」

「ん、どのことだ? お前をそうやって拘束していることか、それともお前の魔法に当たっても無事だったことか?」

「全部。まあ今ので頭が冴えてなんとなくは分かったけどね」

「それで合ってると思うがな。街での戦闘でお前が言っていたことをそのまま使っただけだ。オレ様の錬金術が致命的にクラリスの錬金術に弱いことは分かった。だがお前の錬金術の師はオレ様なんだ。だとしたら、日ごろお前が使っている錬金術がオレ様の使っている錬金術と同じなのは予測がつくだろう? だったら、それに策を講じて代わりにオレ様がクラリスのを使えばいい」

「だと思った。シエテが剣で魔法を弾けたのは、先に剣に纏わせてたからかな」

「ああ。シエテを守るためだったがあれば危険だった。いつものジータだったらすぐに違和感に気づいただろうからな」

「うん、油断しすぎたね。それで今私を縛っているこれは?」

ジータが視線を下に向け、自身に刻まれた魔法陣に目を動かす。

「これか。これはオレ様がくそ長い間縛られていた魔法陣だ。お前とグランが解いてくれたやつでもあるな。その古代文字を見ることぐらいしかできなかつたから、じっくりと考察できたわけだ。今じゃ自由に使える拘束術だよ」

「そっか。あとさ、アーカーシヤで歴史改変をしたらこの世界はどうなるの? なくなるのかな?」

「それについては知らないな。歴史改変しても、誰かがしたとしてもそれをオレ様たちが観測することはできない。だからこの世界が消えるのか、それとも残るのかは誰も分からない」

「残るって、どういうこと？」

カリオストロの口から聞き覚えのない事実が飛び出し、俺は口をはさむ。

「ん？、そんなのも知らなかったのか。まあ、いろんな学者が提唱している説のいくつかだ。歴史改変をしたときに、この世界がそのまま過去に遡って変化した歴史を繰り返すっていう考えだとか、この世界はもともと並行世界で別の世界線にスライドするだとか、いろいろあつてな。歴史改変する前の世界は残るのか、消えるのか、それさえも分かかっていない」

「ありがとう、カリオストロ。いい時間稼ぎになったよ。私がしゃべれるようにするために体内の拘束を解いたのは間違いだっただけだね」

不意に、ジータを中心として魔法陣が形成される。無数の古代文字を空中に踊らせながら、ゆつくりと広がっていくそれにカリオストロは目を走らせていく。そして何かを察したのかジータの服を、そこに自身で刻んだ魔法陣を見る。

「お前、自分の血で……、おいグラン、早くここを離れるぞ！」

「え、うん、でもこれは何？　なんでジータから？」

「話はあとだ。シエテ、お前もだ！　そこに転がっている奴らも連れてこい！　部屋を出るぞ！」

カリオストロの声から察したのか、すぐにシエテはクラリスとルリアの二人を抱きかかえる。俺もビィを持ったまま扉へと急ぐ。魔法陣はなおもゆつくりと広がっていき、氷が割れるような音を時折発している。扉へ向かう目の端に、床に横たわったまま動かないジータが映り、数瞬俺は立ち止まる。

「カリオストロ、ジータは？」

「なに言ってるんだ、無理に決まってるだろ！」

俺とシエテが部屋を出たのを確認し、カリオストロが扉を閉める。その直前に、魔法陣の中心がひび割れ、そこにできた漆黒の隙間にシエテのマントが吸い込まれるのが見えた。

「なに……あれ」

「ちよつとそこをどいてろ！」

カリオストロが扉の前に手をつく。同時に目の前の扉、そして壁に焼け焦げた縄の痕のようなものが何重にも巻かれていく。部屋の中では暴風でも流れているのか轟音が聞こえ、扉が耳障りな音を立てて振動する。

カリオストロはさらにいくつか手を加え、目の前の壁に拘束を施していく。その様をただ俺は見ていることしかできなかつた。

すぐその遠い距離

「これで一安心か」

地に掌をつき一人苦闘していたカリオストロが立ち上がり、大きく息をつく。古代文字で構成された縄状の紋様が目の前の扉、そして壁全体を巡っていて、その隙間を無数の魔法陣が埋め尽くしている。全てをひとりでこなした少女は顔に汗を浮かべ、少しの悪態をつきながら俺に口を開く。

「グラン、お前の姉はほんと優秀だよ。その才能を今まで通り仲間のために使ってくれれば良かったのにな」

状況が分かっている俺が困った顔を向けると、少し逡巡した様子を見せる。扉の奥は先ほどどうってかわり、何物もないかのように静まり返っている。

「初対面の時だ、お前たちがオレ様の封印を解いたとき、オレ様の姿は見えていなかっただろ？ オレ様がジータを拘束した魔法の完全版があれなんだ。そしてジータはその完全版を今使おうとしたんだ」

「封印しようとしたってこと？ でもジータの身体は拘束されてて、錬金術も魔法も使える状況じゃなかったんじゃないの？」

俺の質問に苦虫を噛み潰すような顔をしながら、カリオストロは答える。

「ああ、そのはずだった。オレ様は天才錬金術師だから奴にかけた拘束術は完璧だった。だが、そのあと魔法の拘束を緩めたのが間違いだったんだ。ジータは自分に掛けられた魔法陣の古代文字を見て、どこに何を書き足せばさらに拘束が緩むかを理解したんだろうな」

「それをさっき言ってた、血で？」

「そうだ。体内だけでも自由になれば、魔法で血管中の血圧やら血流やらをいじることができる。そうすれば、ピンポイントに出血させて、魔法陣に血で文字を書き足すこともできる。頭がおかしくなるような繊細な作業だな」

「そこまでして……」

ジータは何がしたかったのか。俺には分からなかった。死にた

かったのか、俺を殺したかったのか、それとも。ジータに最後に言われた言葉がさらに俺の頭をかき混ぜ、ジータをどうすればいいのか、何もわからなくなる。

「それであいつは自分を中心とした封印魔法をかけようとした、というか実際にかけた。オレ様が封印されていた完全版だ。あれが完成すると、効果範囲内の全てのは別次元に飛ばされる。そうするともう手も足も出ない。だから、説明もなくお前たちに部屋を出ろ、とிட்டんだ。さっきまでやってたのは魔法効果範囲の制限と、この次元にジータの魔法を固定するのと、それと……」

カリオストロの話が難解になり俺の理解を超えたところで、それを察したシエテが口を開く。

「カリオストロ、それで今その部屋はどういう状況なんだ？ 俺たちは何をすればいい？」

「お前たちにできることは、そうだな……、市街地の混乱の收拾ってどこか。これからやるのは今かけた魔法の解凍と、鍵をこじ開ける作業だ。ジータの魔法との兼ね合いを考えながら丁寧にやらないと、さっきがジータとの最後の対面ともなり兼ねないから、慎重にやっっていく」

「どうして？ カリオストロの時みたいに封印を解けないの？」

「今回はそれとは状況が違う。あの時はオレ様は外側から封印されたんだ。部屋の外からかける鍵みたいなもんだから鍵さえあれば誰でも開けられる。だがジータは内側から鍵をかけたんだ、引きこもりみたいなもんだな。こっちは誰一人鍵を持っていない、だから無理矢理こじ開けなくちゃいけねえんだ」

「じゃあアーカーシャを使って歴史改変すれば……」

本当はこの世界のジータとも分かりあってからしたかったが、仕方がない。そう思ったが、それにもカリオストロは首を横に振る。

「偶然が恣意的なのか分からねえが、封印範囲はさっきまでいた部屋とその奥の部屋まで行き届いている。確かめてはいないが、奥にはアーカーシャがいるんだろ。残念ながら今はジータの手の中だ、オレ

様たちには触ることも操作することもできない」

「それじゃあ……」

「だから言っただろ、今のお前たちにできるのはこの島の混乱の收拾だ」

扉の前に立って手を前に伸ばすと、ドアノブまであと少しというところで目に見えない壁が俺の掌の障害となって軽い力で押し返す。このたった少しの幅にある、カリオストロがかけた何重もの魔法の壁が俺を阻んでいる。そしてその先には……まるで世界も自身も仲間も、すべてを拒み、否定するかのようにジータが閉じこもっている。すぐそこにジータも、そのちよつとさききにすべてを元に戻せるアーカーシヤもいるのに、俺には何もできない。

「遠いな」

目の前の扉も、ジータの心とも。

――

すぐに始めると言ったカリオストロとそれを見ていると言ったシエテを部屋の前に残し、俺は外で待っているはずの仲間のもとに行くことにした。床に寝かされていたルリアはそのままにしておこうと思ったが、昼寝から目覚めたように急に起きだしのんびりとあくびをする。それにつられてなのかビイも意識が戻り、目を開いて同じようなくびを続けた。二人とも俺の顔を見るといろいろと思いつたのかきよろきよろと周りを見回しだったので、俺はみんなが揃ってから話すよ、と声をかける。

ビイとルリアを連れ、タワーを出ようとする俺にカリオストロが声をかけた。

「三日でジータに会わせてやるよ。それに遠くなんてねえさ、すぐそこにいる」

俺は一言お礼だけをいい、その場を後にした。

タワーを出ると潜入組の仲間たちがみんな無事な様子で俺たちのことを待っていた。フリーシアは後ろ手に拘束された状態でリーシャに捕まっていた。説明を欲しているみんなに、俺はリアクターは停止したことを説明した。

「まあ、だろうな。さっきまで倒れてたやつらの意識が戻り始めてる。少し混乱しているようだったが障害とかは残ってねえみたいだ。あとで検査は必要だと思うがな。それでグランのそこに行ったシエテとカリオストロはどうした？ ジータとの決着はついたのか？」

俺はシエテとカリオストロ、それとクラリスも無事なことを話した。ジータに関してはもう少しだけ待ってくれと、それだけを伝えた。俺にもどうすればいいのか、これからどうなるのかが分からない今、何をどう説明すればいいのか分からなかった。

説明は不十分なはずだったが、みんなはそれで一応は納得してくれた。俺の表情を見て察してくれたのか、それ以上説明を求めることはなかった。俺はその後すぐに指示を出し、続々と意識を取り戻し始めるリアクターの犠牲者の介抱に向かわせた。俺自身はこの後のことを相談するため、アダムの居場所を聞きそこへ向かう途中、別の騎空士たちに指示を出すシャロカルテの姿を見た。

「ああ、グランさんじゃないですか？ 帝国との一応の決着はついたようですねえ」

「ああ。この騎空士たちは？」

「黒騎士さんの傭兵さんに頼まれたんです。到着は少し遅れてしまいました。今こうやって街を整備してもらってます」

「ドリンクか。ほんと気が利くやつだな。ありがとう！」

「はい。ああグランさん、依頼というわけではないんですが少しお話がありました」

「ん、なに？」

「ええ、つい最近お仕事をお願いした再興の島の長老さんからお手紙が届きました。星晶獣が元に戻ったおかげで島民の皆さんの自

信がついたようで、大勢の島民が夢を叶えるために島を離れることになったそうなんです。それでですね、四日後に島を挙げての送る会をするようで、まあお祭りみたいなものなんですが、その時に顔を見せていただきたいとのことでした。状況が状況なので無理そうだと返事はしましたが」

俺の心が鋭く痛む。エルステとのいざこざは終わってもまだ終わらない問題の全てがあそこから始まった。再興の島に恨みはないが、少しの躊躇いがある。どちらにしろ四日後だと難しいかもしれない、二つの意味で。

「四日後だと少し難しいかもしれない……、でも一応頭には残しておくよ、ありがとう」

よろず屋に礼を言い、アダムに会うためにその場を離れる。

その後三日間、俺はエルステの市街地を行ったり来たり、タワーを上ったり下りたりと忙しくしていた。リアクターによる混乱はすぐに収まったがエルステのトップだったフリーシアの所業が噂話で市民の間を流れ、その結果新たな混乱が起こり始めていたからだ。根も葉もない噂から、真実に比較的近いものまでさまざまなのが流れ、一時はタワーの前に人が群がる事態になったが、アダムの巧みな説明と、モニカから秩序の騎空団のおかげでそれも収まりつつあった。今は実質的なトップとしてアダムを置き、市民の生活を元に戻そうと苦心しているところだ。

タワー内部ではしばらくの間帝国兵による抵抗があったが、フリーシアが捕まったこととアダムの説明があったことによりすぐに全員が白旗を挙げた。今は意識を失った市民や帝国兵らの検査、救援・整備に來ている騎空士の宿泊場所として開放している。

そして扉の前ではカリオストロが俺に謝っていた。

いや、どちらかといえば不機嫌な様子のカリオストロに俺が困って

いるといった感じか。事の始まりはついさつき目の前の壁の異変に俺が気づいたことから始まる。

この三日間、街の復興は仲間に託し、タワー内部の調査を続けていた。無事に意識を取り戻したルリアが少し経って、タワー内部の様々などころから星晶獣の気配を察知しそれを俺に相談してきたのだった。アーカーシャの強い気配に隠れていたが、魔法によって封印されているため、弱い気配が現れ始めたのだろう。三日前に遭遇した男が言っていたことも思い出した俺は、ルリアとオルキスの力を使って帝国によって強制的に捕まえられた星晶獣の解放作業を続けていた。そして時々、カリオストロの作業の進展を見に来ていたのだった。

作業は順調に進んでいるようで、封印を封印するためにカリオストロが設置した魔法陣やその類は日に日に少なくなっていくた。それなのに、今朝、作業を始めて三日が経った今、壁や扉には元のように魔法の数々が所狭しと刻まれていたのだった。

最初にそれを見たとき、俺は単純に何か封印解除に手違いがあり、それに気づいたカリオストロが再度かけなおしたのだと思っていた。けれど、戦闘後のような衣装の汚れ、カリオストロの不満そうな表情、そしてそばに立っていたクラリスの困ったような苦笑いにも気づき、俺の思っていることとは違う何かが起こったことに気づいた。

不機嫌な時のカリオストロは怖い。けれど真相は知りたい。俺は一時中断して、カリオストロのそばに座り、真実をしゃべってくれるのを黙って待っていた。

「単刀直入に言うとな、」

俺が座ってそれなりの時間が経って、真実を知っているらしいクラリスが口を開きかけたときにカリオストロがぼそりとつぶやいた。

「お前がジータに会えるのは今日からまた三日後だ、すまないな」

「何があったの?」

俺の質問には答えず、カリオストロは作業を続ける。困った俺がクラリスを見ると、一度少女の顔を見た後、語りだした。

クラリスはルリアやビィと同じように無事意識を取り戻すと、自ら希望してカリオストロの作業を見ていた。俺の知らないところで何かあったのか、前よりもカリオストロに親近感が湧いたらしい。そのクラリスが言うには、今日の朝には封印の解除に成功し、部屋に入ることが可能になったらしい。そのままグランを呼ぶはずだったが、カリオストロは弟子の始末は師匠がつける、といって単身部屋の中に入ったのだった。そして数分間の沈黙ののち、爆発音がしたかと思えばカリオストロが額に汗を浮かべて部屋から出てきて、再度部屋全体を封印したようだった。

「ふふ、それならグランさん。再興の島に行くことができますね〜」
「シエロー、一体いつから……」

クラリスの話を聞き、カリオストロになんて言うか迷っていたときに、どこからともなくシエロカルテが現れた。そういえばそんなことを言われたなと思い出しつつも、グランサイファーを動かせない今の状況で再興の島に行くのは難しいと答えようとする。それに確か、その祭りとやらは明日だったはずだ。今日出てからじゃあ間に合わないだろう。

「無理だと思ってますね〜？ でもこうなることを予想して小型騎空艇を用意しているんですよ。乗れる人数は少ないですけど、今から出ても余裕をもって再興の島に着ける最高の艇なんですよ〜、うぷぷぷ〜」

「それでも……」
「グラン、行きませんか？ 私、またアネバルテに会いたいです。そうすればもしかしたらジータのことも何か分かるかもしれないかもしれません……」

ジータのことで手も足もでないぐらいに追い詰められている俺に祭りを楽しむ余裕はなく、それでも断ろうとしたが、そばで聞いているルリアにも言われてまた悩まされる。

「もちろん今の状況で祭りを楽しむのは難しいと思いますよ。でも長老さんはただただグランさんに感謝をさせていただきただけのようですよ〜」

――

シエロカルテに案内されて、エルステの小さな隠し港に止めてあつた小型騎空艇に乗り込む。万事屋ほどもなれば帝国が支配する島でさえ一つ二つの隠し港の場所を把握しているらしい。狭い艇内は俺とルリアとビイが入るだけで定員となつてしまった。荷物はほとんど持たず、万事屋に説明された地図だけを持っている。

「確か目的地を設定するだけで自動で航行してくれるんだつたな」

目の前に設置された大理石に軽く触れると白く輝きだし、すぐに手に持った地図と同じものが現れる。シエロカルテに言われたとおりに目的地を設定すると、重低音な機械音を響かせながら機体が持ち上がったような感覚を覚える。

「流石に走艇よりは速くはありませんが、それなりに速いので気を付けてください。それでは、良い旅を」

ハーヴィンの商人は大きな声を上げて俺たちに手を振る。椅子の下から伝わる振動は見る間に大きくなり、大きく後ろに引つ張られる感覚と共に俺たちは隠し港を飛び出す。後ろを振り向くルリアが見る見るうちに小さくなっていくアガスティアの島に歓声を上げるのを耳にしながら、俺は青と雲の海に飛び込んでいく。

――

「ああフェンリル、こんなところにいたんだね。随分な様子だけど、どう？、傷は癒えた？」

「ちつ、うるせえな。本気を出せばオレを見つけるなんて簡単なことだろ？」

「うん、まあね。でも僕は今怒ってるんだ。観客は観客らしく劇を静かに見ていなくちゃだめだろ？」

「劇？」

「そうだよ。帝都アガステイアという舞台で、一大帝国と一騎空団が闘う舞台劇さ。演者が一生懸命演じているのに、それを僕ら観客が邪魔しちゃダメだろう？ それが喜劇でも悲劇でもね」

「いつも思うが、一体何を考えているんだか」

「ふふつ、すぐに分かるよ。さあフェンリル、観客席に戻るよ。まだ劇は終わっていないんだ、だって劇にはクライマックスがあるものだからね」

「帝国は負けたんだろ？ 帝国の王のはずなのに敵側に手を貸したり……どっちの味方なんだ？」

「どっちもこっちもないさ。ただ彼らが何を演じようと、僕にとって
は喜劇だ」

告白

空と雲の境界に沈みゆく太陽が視界を橙色に染め上げる頃、搭乗席に座っている俺の目には、おぼろげながらも目的の島の輪郭が映り始めていた。シエロの言っていた通り余裕を持つて小型艇は俺たちを島まで導いてくれたが、さすがに狭い空間で疲れたのかルリアは頭を俺の肩に傾けたまま静かに寝息を立てている。俺の頭に乗っかってるビーも羽根を伸ばせず居心地が悪いのかさつきからせわしない。

「んっ?、あれじゃねえのか?」

「そうみたいだね」

そんな短い会話の内にも、その島の外観ははつきりとしてきて。とても懐かしく感じるのは、故郷のザンクティンゼルと似ているからだろうか。といっても旅に出始める前に島の外観を見たことは数度しかなく、というか見た目は全く似ていない。それなのに最初に見たときに、俺もジータも懐かしく感じたのはなぜなんだろうか。一度も……来ていなかったはずなのに。

すぐ目の前まで島は迫ってきていたので、シエロに言われた通り自動航行から手動に切り替えて着陸の準備をし始める。山々によって光が遮られているところでは、すでに街灯の明かりがつき始めていて、粒のように小さい人々が歩いているのが見える。その様子が最初に訪れたときに感じた灰色とは全く異なっていて、俺の心は温まってく。薄く記憶に残っている港の位置を目の前の島に当てはめて探してみると、すぐに何隻かの騎空艇が見つかり、そこへと艇を傾ける。空いている場所を見つけそこに停めるときに、港の入り口に誰かが立っているのが見えた。

「んっ……、あれっ、グラン、着いたんですか? 私、眠っちゃって」

「うん、着いたよ。ほら、行くよ?」

「ちよつと待つてくださいいよ〜」

――

艇を降りるとさつき見た人影はすぐそこに立っていた。その姿に一瞬言葉を躊躇っていると、向こうから話しかけてきた。

「グランさん、ルリアさん、ビィさん、こんばんは。そして本当にありがとうございました」

「こんばんは、アネバルテ。それにいいんですよ？ この人はこう見えてすごくお人好しで、困っている人を放っておけないので。それに私たちもうれしいですしね」

「そうだぜえ！ 頭下げることにはねえって！」

深々と頭を下げるアネバルテにルリアとビィが声をかけるが、それでも頭を下げ続けるアネバルテに俺も声をかける。

「そうだよアネバルテ。頭を下げる必要なんてないって。それよりさ、ほら、街が今どうなっているか見せてよ。お祭りの前だしみんな明るくなってるんでしょ？ 俺もそういうのを見て依頼が成功したことを実感したいんだ」

顔を上げたアネバルテは泣くのをこらえた顔をして何度か感謝の言葉を繰り返し、すぐに笑顔に戻って俺たちを案内するかのようには手を上げる。

「はい、そうですね。僭越ながら私が街を案内させていただきます。夕食ができる頃に長老が鐘を鳴らして知らせてくれることになっているので、一旦はそれまでですが、行きましようか」

「まるで俺たちが来ることを知っていたかのようなだね。艇を停めようとしたときももう港にいたし」

「それについては案内をしながら話しますね」

笑顔のまま背を向けたアネバルテは街灯が明るい街の方へと足を進めていく。その姿は俺たちがこの島を離れたときと同じ、ジータの姿で、それが俺をざわつかせる。

アネバルテに案内されて通る商店街は、以前来たときとは比べられないほどの活気があり、人通りも多くにぎやかだった。その様子に口を開けて歓声を上げているルリアとビィに、アネバルテは優しく微笑み、まだまだこんなもんじゃないと先を促すのだった。通りを少し歩いていくと、まだ記憶に新しい芳しい小麦の香りが漂ってきて、いち早くそれに気づいたルリアが俺の顔を覗き込む。

「グラン……」

「分かってるって。ほら、これで買ってきてもらっていい？、俺の分も」

「はい！ 行きましょう、ビィさん！」

財布をもらってあのパン屋に駆けていく少女の背中を見送りながら、俺は島の再興をかみしめていた。依頼をこなして依頼人に感謝されるのもうれしいが、それよりも自分の行動により世界が良くなるのを身に染みて感じるのが、騎空士の醍醐味ともいえるだろう。俺はエルステでのいざこざ、ジータのことを忘れ、つかの間の休息を得ようとしていた。この島にいるときだけでも、そう思う俺の耳にアネバルテの声が飛び込んでくる。

「グランさん、あの、ジータさんはもう、お元気なのですか？」

「ジータ……まあ、元気かな……。この島を離れたあとちゃんと意識も戻ったし……。ね」

「今日は来られていないようですけど」

「それは……。今の依頼先でちよつとしたいざこざがあつてね。全部終わったら、またみんなで来るよ」

それが叶わない未来だと知りながら、心苦しくも俺はこの世界では叶うことのない希望を口にする。ジータを救う、それはすなわちアーカーシャを使って歴史改変をすることであり、この歴史上、世界線上ではこの島に来ることはないだろう。そして失敗したら……。ジータはこの世界からいなくなる。

歯切れの悪い俺の言葉に、空気を読んだのかアネバルテはそれ以上

何も言わなかったが、ジータそのものの瞳が俺の目を貫いて、心の底まで見通されるかのようだった。落ち着かない俺はその視線から目を離したくなるが、なぜかそうはできず、明るい声と共に戻ってきたルリアたちに救われる。ルリアが袋を持ち、なぜかビイはその手にリングを抱えて戻ってきた。

「グラン！、買ってきましたよ」

「あ……ああ、早かったね」

「即決だったもんな！」

「ビイさんがあのアップルパイ食べたいってうるさかったからですよ？　はい、グラン。あと、はい、アネバルテ！」

「私の分も？」

「もちろんですよ！　みんなで食べたほうがおいしいじゃないですか！」

「ありがとうございます」

「お店の人、どうだった？　元気になってた？」

「はい！　顔を覚えてくれていたみたいで、すぐに私たちに気づいてくれたんですよ？　すごく明るく私たちに話しかけてくれて……ビイさんなんかサービスでリングもらってましたし」

「それでリングか」

「だけだよお、生のリングとアップルパイ、どっちを先に食べるか迷っちゃまってよお……」

そんな風に談笑しながらアップルパイを食べていると、ふと疑問を浮かべたようにルリアがアネバルテに質問をする。それは俺がここに来た当初から聞いたかった質問であり、俺は静かに耳をすます。「そういえばここに来てからずっと思っていたんですが、アネバルテはどうしてジータの姿のままなんですか？」

「はい、それについては私も言わなくてはいけないことなので……」

――

そうですね、何かから話しましょう……。気の遠くなるような昔、私は星の民によってこの世に生を受けました。星の民にとっては私た

ちは機械のようなもので、何かしらの役割を持って生まれてきます。私のそれは今も昔も変わらず、人の心を支えるというものでした。最初に私が支えたのは私の創造者。けれども彼は私自身よりも、私の役割を重要視したのでしょうか。私は心は持っていました。姿を持たないままこの世に生まれました。彼は応急策として、私の姿を彼自身の姿にし、私は最初の役目を果たしました。

その後私は彼に命じられてこの空域に降り立ち、今は再興の島と呼ばれているこの島を住みかとししました。無人だったこの島も長い年月とともに人が住み始め、私は自身の役割を果たすべく、人選し、心を支えてきました。そして、私にとってはつい最近のことですが、この島は再興の島と呼ばれるようになり、空域中から関心を向けられるようになりました。

けれども人は増えど、私は孤独でした。心を支える人と話すのは一番最初だけで、それ以降は私の分身のようなものがその人を助け続けます。私自身はその最初の時だけこの世界に見える姿で顕現し、それ以外は漂う風のように実体なく存在しています。それは私の創造主が私に話してくれた、人間の傲慢さと嫉妬によるものです。私は比較的小おしゃべりが好きなので、人間たちと話すことは楽しいのですが、私力が持っている以上それは枷となります。私の役目は真に自らを再興したいものを助けること。けれど私が特定の人と話してしまうと、その人の傲慢さ、そして他の人の嫉妬が彼らの心を蝕みます。私の創造主はそれを危険視し、拘束力はありませんがそのことを私に注意しました。

私は創造主の言葉を守りました。誰かと話して何か致命的な問題が起こるのであれば、その根本的な原因、つまり私が誰とも話さなければいい。それがつい先日まで、もう何年も何年も続いてきたのです。

今回の連続した事件、一か月前に起こった事件と数日前の事件は私が誰とも話さず、私の中に灰色の感情をため続けてしまったことにあります。だから、あなたがたが島を離れた後、私は長老と相談し、今までの方針を変えることにしました。また私が一人のままでしたら、

問題が起こる可能性がある。それよりも、人間の力を信じようと。傲慢や嫉妬という感情は誰しもが持っているものですが、それを抑え、本来の目的を成就するという強い意志を持っているということ。そこで私は、常にこの島に見える姿で存在し、いつでもこの島の皆さんと話せるようにしておこうと思ったのですが……

――

「……そこで、問題が起きたんです」

「問題？」

「はい。皆さんに見せる姿がなくて……」

少し顔を赤らめ、恥ずかしそうにアネバルテは口にする。

「先ほど申しましたが、私の創造主は私の姿を作りませんでした。誰かの前に現れるときはその人自身の姿になる、それを今までずっと続けてきていたのでこんな状況は初めだったので。今まで通り話す相手の姿になればいいと長老には話したのですが、それでは島民が私を私と認識づらくなるとおっしゃって。その時に長老に言われたのです、その姿でいいじゃないかって」

「その姿っていうのは、今の、ジータの姿？」

「はい。私自身、特定の誰かの姿のまま丸一日を過ごすことが初めてだったので、その時にはこの姿が私にはぴったりの者のように思えてきていました。長老も島の救世主なんだから、それを称える上でもいいんじゃないかって」

「それじゃあ、それ以来今の姿のままってこと？」

俺はタワーで会った囚われていたアネバルテの欠片を思い出す。あのアネバルテもジータの姿をしていたけれど、それは本体がジータの姿だったからだろうか。ということはルリアの言っていた、星晶獣は力を分割されても本体と何か、どこかでつながっているというのは本当なのかもしれない。

「もちろんみなさんが迷惑なのであれば、すぐに姿を変えます。まだジータさん本人にも許可をもらっていませんし……」

「それぐらいなら別に許可なんていらんよ？ ジータも、悪い顔はしないと思う」

「そうですか……良かった」

アップルパイを食べ、歩きながらアネバルテの話聞いていた俺たちは気づいたら見覚えのある、中央に噴水の坐した広場に来ていた。広場の何人かがアネバルテを見、挨拶をしていく。その中の一人が深々とこちらに頭を下げていて、それが顔の知っているエルーンの女性なことに気づく。

「あの人は……」

「彼女はあれから毎日ここにきて自身の罪を悔いています。私はもう大丈夫だからと、彼女のことを許しているのですが、彼女の気がそれではすまないようで。あのように私に会うたびに、頭を下げていくのです。本当につらいのは……そうですね……私も」

何か思いつめたような顔をして、アネバルテは歩みをとめその場に立ち尽くす。言葉を逡巡するかのようになり淀んだ彼女は噴水を見、口を開き、そして閉じる。静寂の中で水の音だけが耳に響き渡り、そしてそれを貫くかのように聞き知った声が届く。

「私は人の心を見ることができません。といってもすべては分かりません、人間の感覚で言えば……心の色が分かるという感じです。私はそれによって、偽りの意志なのか真の意志なのかを見極め、人を選んでいきます。……先ほど私は質問しましたね、ジータさんのことを。口ごもるあなたを見て、してはならないことだと分かっていたのですが、心を覗きました。あなたは嘘は、ついていなかった。そこには優しさと苦悩しか見えなかった、私が傷つかないよう、けれど嘘はつかないよう、どう答えればいいのかと。いえ、それだけじゃないですね……」

俺はなんて答えばいいかわからず、無言のまま次の言葉を待っていた。静かな水音の中、アネバルテは苦しい表情のまま絞り出すように口を開いた。

「あれから何度かジータさんの心を覗きに行きました。遠く離れていても、最初に会った時のその心の純真な音はすぐに見分けがつくと思っていたんです。けれど……彼女は変わってしまった。グラ

ンさんやルリアさんの心の音色を頼りにやつとこのことでジータさんを見つけ出したとき、彼女は、彼女の心は私の知っているものとは違っていた。黒くて、怒りや憎しみに満たされていて、私はそれが本当にジータさんのものなのか疑いました。けれど何度確かめても、時間が経っても変わらなかつた。そして今ではどこかに消えたのか、接触することもできない。……グランさん、ジータさんは今……どうしているのですか？」

「……」

俺は数瞬戸惑い、けれどちやんと答えようと口を開く。けれど俺の声はアネバルテの声と重なり、かき消される。

「いえ、いいんです。私には、そんなことを聞く資格なんて……、違う、私こそ謝らなくちゃいけないことがあるんです。保身のために、隠していた、あの日の事実を。私はただ、もう苦しみたくなくて、傷つきたくなくて……」

二つの瞳から涙が零れ落ち、アネバルテは崩れるようにその場に跪く。首を垂れたその姿は墮落した神のようにも見えた。

「本当は私、見ていたんです。気づいていたんです。あの日、この場所では何が起こったのかも、ジータさんが何を宣誓したのかも、そしてその意味と、ジータさんがこれから背負っていくのもその重みも全部。それなのに、私は自分が可愛くて、また何かされてしまう、苦しめられてしまうってそれだけで、黙っていて……」

だんだんと細くなっていく告白は涙声にかき消されて。懺悔する星晶獣を前にして、夜は更けていく。

――

アネバルテの口から発せられた言葉はある意味では俺を裏切らず、ある意味では俺を裏切った。ジータがガロンゾの星晶獣との間に結んだ誓約は俺が予想していたものとはほとんど同じだったが、ジータがその言葉に込めた思いの強さは俺の想像を超えていた。再興の島をもう一度訪れれば何かつかめるかもしれない。アガステイアを出発した俺の心の片隅にはそんな思いがあつたが、俺に与えられたのは解

決策は一つしかないことを示す事実そのものだった。

翌日の夕方、俺たちは長老に見送られて港を出ようとしていた。お祭りムードの再興の島は日が沈んだ後もその賑やかさは衰えず、街の中心からは陽気な太鼓の音に乗せられた歓声が時折聞こえてくる。それに背を向け、小型騎空艇に身を入れようとする俺の横には、アネバルテが立っている。

アネバルテの告白の後、彼女は俺たちに同行することを希望した。行って、直接謝りたいと。俺はそれを断ろうとした。暴走状態ともいえる今のジータに何を言おうと何も返ってこないだろうし、それ以上にみんなの安全のためにこれ以上誰かをジータの近くに近づけたくなかった。

でも俺は断れなかった。直接行って、ジータの目の前に立って謝る。そんな単純な行動を、アネバルテが切望していることが痛いほどわかったからだ。俺は了承し、島を出発する時間を告げた。

「長老、行ってきますね」

「ああ、ジータさんよろしく頼むぞ」

「はい。それじゃアルリアさん、お願いします」

「はいー」

狭い艇の中にこれ以上誰かが入るのは無理なため、アガスティアまでも道のりはルリアの中に入ってもらうことにしていた。ルリアが星晶の力を発現させ、一瞬の蒼光とともにアネバルテの姿は消失する。

「それじゃあ行ってきますね」

一言長老に言い、頭を下げて乗り込む。ルリアとビィが続けて乗り込み、俺たちは長老に見送られながら最後の目的地へと艇を飛ばす。

私のもの

「ふう。ようやく入れた。外にいる小さな錬金術師が予想外にできるやつだね。あの子に察知されないようにここに侵入するのも一苦労だった。……ああ失礼、君に会うのは多分……三度目かな？ そんなに険しい顔をしないでくれよ、僕は君を助けてあげようと思っっているんだから」

「おいロキ、オレたちは観客じゃなかったのかよ？」

「そうだね、でも僕は違う。僕はこの劇の脚本家であり、監督でもあるんだ。演者が勝手な演技をしないように、終劇を見失わないように導く必要があるんだよ。このままじゃこの劇は喜劇になっちゃうんだ」「結末がどうあれ喜劇になるんじゃないか？」

「そう、このままでもこの劇は十分面白い。でもね、僕がひと手間加えれば、抱腹絶倒の劇になるんだよ」

「そうか……」

「ああごめんね。……はい、これでどう？ 体に力が入ってくるのが分かるでしょ？ でも頭のいい君なら分かると思うけど、ここで力を出してしまえば外の錬金術師に気づかれて今度こそお陀仏だ。だから、待つんだ。最後の最後まで、本当に殺したいと思う相手が絶対の隙を見せるまで……ね。それじゃあ行こうかフェンリル。観客席に戻ろう」

――

アガステイアの大部分の住民がまだ夢見る早朝に、俺たちが乗った小型艇は無事に港に着いた。どこで俺たちの到着時間を知ったのか、意外にもカリオストロが出迎えに来ていた。いつものように少しの不機嫌さを湛えた少女は俺たちが艇から降りるとすぐに踵を返し、タワーへと向かおうとする。

「カリオストロ！、出迎えありがとう。でもどうやって俺たちの到着

を知ったんだ？」

「よろず屋がさつきオレ様のところに来てな。もうすぐ到着するから迎えに行けど。どうもその小型艇の場所はこの空域内ならどこでも把握できるらしい。詳しいことは教えてくれなかったがな」

「それでこんなにタイムミングよく……」

「それとだ。ジータが施した封印だがすべて解除し、今は逆にこつちから封印魔法をかけてある。あの部屋内ではあらゆる魔法、錬金術が使えないようになっていいるから注意しろよ。念のためにジータの体力も限界ギリギリまで吸い取っておいた。といつてももう五日間は何も口に入れていないだろうし、その状態でそれなりに体力を使う封印魔法を二発撃ったんだ、吸収するものもほとんどなかった。流石に餓死されるのは困るから、今はこつちから最低限のエネルギーは送っている」

「そうか。それじゃあ早めに……」

「早めにどうするんだ？」

カリオストロが一瞬足を止め、俺の顔を覗きこむ。

「これはオレ様の助言だが、あの部屋に入ったらすぐにアーカーシャを起動しに行け。ジータは部屋にいるだろうが無視して歴史を改変しろ。あいつの身体から魔晶の効力は奪い取ってあるが、それでも何が起きるかは分からない。どうせ歴史を変えるんだからオレ様としては息の根を止めておきたいんだ。だがお前の意志を酌んで今の状態にしてある。だから安全策をとって、すぐに……」

「そもいかないんだ」

俺はルリアの顔を見て、合図を送る。頷いたルリアが星晶の力を発揮すると、ジータの姿をしたアネバルテが姿を表す。

「お前は……、そうかお前が話に出ていたアネバルテか。……おいグラン、お前は真正銘の馬鹿だな。いいか、ジータがどこまで自身の記憶を錯乱しているかは分からないが、今のジータの状況を作った元凶がこいつなんだろ？ そんな奴をジータの前に出したら、何が起るかなんてすぐに分かるだろ！」

ああ、分かるさ。でも、やっぱだめなんだ。

「魔晶の力はほとんど取り払ったが、一度使用したその身体は蝕まれて、すべてを取り払うことができない。そして魔晶の力は怒りによって増幅し、その影響は計り知れない。お前だってその身をもって恐ろしさを知ったはずなのに、なんでそこまでして」

「歴史改変をしたら今のこの世界がどうなるかは分からない、そうだろう?」

「ん、なんだいきなり? ああ、今のところわかっちゃいない」

「歴史改変された新しい世界はできる。でも今俺たちがいるこの世界も同じように残ったら? そしたらその時この世界に残った俺は、俺たちはすごく困ると思うんだ。だから俺はできるだけこの歴史上でもできるだけ後悔のない選択をした後で、アーカーシャの力に頼りたいんだ」

「だがな。そんなことはオレ様たちの知ったこっちゃやない。歴史改変で二つの世界ができたとしても双方同士の間は残らない。オレ様たちは見ず知らずの関係になるんだ。それなのにお前は どうしてそこまでのお人好しなんだ」

「そういう性格だからね、どうしようもない。ごめんカリオストロ、でも俺の意志は変わらないんだ。卑怯だけど、ここは団長命令を使わせよう」

「それならオレ様の願いも聞け、そうしないとあの部屋は今すぐ封印してこの団を降りることにする」

「……願いつて?」

「グラン、お前の記憶も保存させろ」

「記憶の保存?」

夢の中で会ったカリオストロを思い出す。あのカリオストロも久しぶりに記憶を同期したら、知らない記憶が入ってきたって言うたっけ。

「ああ。オレ様は常に二つ上の次元に記憶を保存している。魔法で記憶喪失になったりしたときの保険だな。そこにお前の記憶も保存させろ」

「それは、なんで?」

「当たり前だろ？ 事のはじめはどうってことない、民間人がこの星晶獣に害を与えたっていうただそれだけ。それがここまで大きくなって、伝説ともいわれる星晶獣の力を使うところまで来ている。あれは防げる過去だったんだ。歴史改変をしてまた繰り返すのはごめんだからな。あつちの世界で今の記憶を勉強して、同じことが起きねえようにしてもらわないと」

「うん、分かった。アーカーシャの能力は上の次元には影響しないらしいしね」

「……お前、なんでそんなことが分かる。まだオレ様は試したいことはないのに」

「えっ……と、いや、勘かな」

隠し港と街をつなぐ通路を出、タワーへと向かう。寝静まった街は俺たちが帝都を出発したときとあまり変わらないが、復興の兆しといえる、街並みの修理の経過は見て取れた。

「この街の住民がやっている街の復興は、アーカーシャの力を使えばすべて水の泡となって消える。お前のやろうとしていることの大きさが分かるか？」

「そんなこと、分かっているさ！……でもだからって、みんなに何もしなくてはいいです、とは言えないだろ？」

カリオストロがそんなことが言いたかったわけじゃないことは分かっていた。それに俺も嘘で塗りたくられた俺の言葉に気づき始めていた。俺もカリオストロもそれ以上何も言わず、俺たちはタワーへと足を急いだ。

復興中の街並みを通り抜け、帝国兵やら救援中の騎空士やらでごつた返したタワーに到着し、すぐに上階へと登る。寄り道もせずまっすぐにあの部屋の前へと進んでいく俺の目には誰の姿も映らない。早く、今すぐにも決着をつけたい。そう思う俺を来客が、最後の障害が待っていた。

「黒騎士……」

部屋の前にはクラリスが座り込み、居心地悪そうにカリオストロが新たに刻んだらしい扉の紋章に目を向けている。その後ろには、エルステ軍大将アダムと、腕を組みオルキスを連れた黒騎士が品定めをするように立っていた。

「グラン、お前の計画にはオルキスが必要はずだ」

「ああ、そうだ。でも……」

「オルキス、行ってこい」

「えっ、どうして」

アーカーシャの起動のためにはオルキスの力を借りなくちゃいけない、けれど黒騎士がそれを簡単に認めるとは思っていなかった。帰りの小型艇の中で、様々な案や説明を考えつくしたが、黒騎士を納得させるようなものは出ず、どうしたら折れてくれるのかと途方に暮れていたのだが……。

「どうして、オルキスを……いいの？」

「言い忘れていたがグラン、オルキスの歴史に干渉したらどうなるかわかっているな」

俺の質問には答えず、黒騎士は一言くぎを刺す。てくてくとこちらに歩いてくるオルキスを見ながら、質問を重ねるべきか感謝するべきなのかを迷う。

「あ、ああ、大丈夫だ。黒騎士も分かっていると思うが、歴史改変をするのは、ただ単にジータの過去だけだ。オルキスのことは、ジータと一緒に、正々堂々とお互いに納得したうえで決着をつけたいと思っている」

黒騎士はそれ以上何も言わなかった。その横に立つアダムも特に何を言うつもりはないのか口を閉じたままだ。カリオストロが扉の前まで歩きだし、俺もおおずとおおずとついていく。ゆっくりと手を伸ばすと、何にも遮られることなく扉に触れることができる。

「もう遠くはないぞ、この扉を開ければ、すぐそこにいる」

「うん、ありがとう」

「グラン、なんで黒騎士もアダム大将も何も言わずに通してくれてか
らって言うよね、カリちゃんが団のみんなと一緒に説得してくれたか
らなんだよ」

「えっ」

「おい、クラリス！ それ以上言うとな一生しやべねえ体にしてやる
ぞ。グラン、これを持っていろ」

カリオストロから渡されたのは透き通った小球。

「歴史を改変する瞬間にそれを握っている。それは記憶の同期、保存
を媒介するものだ。それを握っている間はお前の中の記憶が上の次
元に保存され続ける。まあ、細かいことはいいが、分かったな」

「うん。それと、説得ありがとうね」

「礼をもらうのはまだだ。改変後の世界で記憶を同期して、すべてが
うまくいったことが分かったら改めてもらいに行つてやる」

「うん、分かった。それじゃあ……行こうか」

――

部屋の外がざわざわと騒がしくなった。そろそろ来るのかな、私も
準備しないと。つていつても、別に何をやるわけでもないけど。

この数日間何もすることがなかったから、カリオストロにかけられ
た封印を解くことで時間を費やしていた。体内の血管を操作して魔
法陣に文字を加えていくという地道な作業。けれどほかに暇つぶし
もないため、集中してやっていたら身体は動かせるようになった。け
ど。

二度の魔法の施行のせいで体力はぎりぎり、今では逆に体力を送り
込まれていて病人のよう。魔晶の力も奪い取ったし、これなら部屋に
入っても安全だね。

とでも思ってるのかな。

数日間閉じていた扉が重々しい音を立てて、開いていく。はじめに見えたのはグランの顔。こつちをちらつと見て、はっとした顔になるのは劇でもやっているかのようにならなくて。グランの後に続くのはいつもの通り、ルリア、そしてビィ。アーカーシヤの起動のためだろう、どうやって黒騎士を説得したのかは分からないけどオルキスが続く。それで終わりかな、そう思った私の目が意外な来訪者を捉える。

私に瓜二つの……アネバルテ。その姿を認識した途端、心の奥底から湧き上がる感情があいつを殺せと命令してくる。冷静に時を待たなくちやいけないのに、そんなのも無視して、今すぐ殺せと私に囁きかける。

アネバルテが部屋の扉を閉める。グランが私の前まで歩いてきて、しやがみ、私に声を投げかける。怒りと誘惑に支配された本能を抑えるために、冷静な思考が咄嗟に音の情報を遮断して、私は暗闇の世界に落とされたかのように錯覚する。口をパクパクと動かす人形のようなグランを見ているうちに、それが滑稽に思えてきて、怒りは徐々に薄まっていく。

グランに続きルリアとビィが私に何か話しかけたようだった。何も聞こえない私は無反応を装う。そしてグランが場所を空け、アネバルテが私の目の前まで歩み寄り、涙ながらに何かを話しかける。

もちろん私の心には響かない。むしろ、再び怒りがこみ上げてきてそれを抑えるのに必死だった。諸悪の根源、私を今の状態にしたすべての理由が目の前にいた。

今の私にとってはこの世界が夢の中だろうと現実だろうと関係なかった。ただ単に、憎い。その憎しみを行動に移せる唯一の瞬間のために、私は全身全霊で怒りを抑え込み、無表情を演じる。

アネバルテが急にグランの顔を見る。グランが何かを言ったのか悩むような表情を見せ、結局首を縦に振り、口をはいと動かした。

反応しない私にあきらめをつけたらしい。グランがルリアとオルキスを向き、何か指示を出す。二人が頷くのを見て、グランは顔を奥の部屋の扉に向ける。もう、私は視界に入っていないようだった。

それでいいよ。そのまま、私を無視して、先に進めばいい。

グランたちが私の横を通りすぎる。下を向く私の顔の、瞳の隅にその忌々しい顔がまっすぐ前を向いて歩き去っていくのが見える。瞬間的にかつとなった頭の中を、血が出るほど拳を握りしめて唇を噛んで耐える。ロキに言われたでしょ、絶対の隙を見せるまで、私は私を出しちやいけないんだって。

視界からグランたちの姿が消える。私は無意識に遮断していた音の情報を回復させ、極限まで耳を尖らせる。後ろの部屋、アーカーシャがいる空間へとつながる扉までの距離はすでに把握している。だから後は、気配だけ。きつとグランは扉の前に立って、自らドアを開ける。その瞬間こそが、私が待ちわびた一瞬の隙。

一定の周期で私の耳に伝わる足音は、標的までの距離を確実に私に伝えてくれた。私はすぐにでも殺したいという、走り出しそうな心と体を抑えるのに必死で。頭の中では何度も何度も、得物を仕留めるその動作を繰り返し替えて。

そして……

足音が止む。グランの意識が目の前の扉へと注がれる。いや、グランだけじゃない、この部屋にいる私以外の全員の意識がその扉に集中している。鋭敏になった私の五感が、その時が来たことを告げた。

足に力を込め、蹴る。地面が抉られ、その衝撃音が空間を伝わっていくのが見える。けれど私の身体はすでにその先を行っていた。手にはすでに、さつきまで転がっていたグランの剣を握っている。それ

を選んだのは単純に、自分の剣に殺されるのが一番滑稽だと思ったから。

案の定全員が全員、向こう側を向いていてまだ私に気づいていない。自然と笑みがこぼれる。笑い出しそうだ。心が空高く舞い上がるような感じ。こんなにも生きていると感じるのは久しぶりだった。

腕を曲げ、狙いを定める。腕を伸ばせば切っ先が届きそうな距離でも、最大限に幸福を味わうべく、筋肉が悲鳴を上げるほど腕を曲げ、全身の力を込め剣先を、グランの心臓めがけて、伸ばす。

途端に目の前の景色の進み方が一気に緩やかになった。私の握る剣はのろのろと空を泳ぎ、グランの背中までの距離が途方もなく遠くなったように感じる。焦る気持ちを抑えようとするが今の私にはそれは無理だった。刃を突き刺したときの感触、苦痛にうめく耳障りな声、泣き叫ぶ周りの仲間の醜い顔。そのすべてが待ち遠しくて、はやく、早く殺したくて、これ以上伸びない腕をぎりぎり伸ばす。笑みが、笑いが止まらない。

それなのに、どうしてか。私の希望、期待を裏切るがごとく、剣先とグランとの距離は離れていく。ゆったりとした動きの中で私は何度も何度も叫び、腕を伸ばしたのに、それなのに。理由はすぐに分かった。グランの真横にいたアネバルテが私に気づき、助けるために、グランの背中を押していたのだった。私の目の前で標的が、グランの背中がアネバルテのものへとすり替わっていく。

最後の最後まで忌々しくて、私の邪魔をするなんて。憎しみで顔が歪み、歯が震える。けれどすぐに私は笑顔に戻った。だって、両方串刺しにすれば、一石二鳥じゃん。

私はより一層腕を伸ばした。引きちぎれてもいいと思った。いつそ投げようか、いやそれだと肉を切り裂いたときの感触が味わえない。旨みはすべて味わいたい。

グランの背中が傾き、倒れていく。でも私の剣は到達しない。いや到達したともいえる。すでに剣先はグランをかばい、前に出たアネバルテの背中を穿っていた。このまま突き刺してグランごと斬り降ろそう。そう思った矢先、私は自分の剣が動かないことに気づく。時間

の流れが戻っていく。

グランが地面に転がる軽い音が耳を襲う。私は剣を引き抜くことはおろか、動かすことさえできなかつた。目の前に転がった獲物に、私は何一つ害を与えることができなかつた。

「アネバルテ、放してよ……放してよっ！」

「いいえ、放しません」

後ろからでも分かつた。切っ先を優しく挟み込むその両の手はすでに血だらけで、身体を貫く金属の塊からは耐えず痛みが供給されているというのに。私には、分かつた。アネバルテは、笑っている。

「どうして、笑っているの」

「……分かりません。でも、助けたい、そう思った人を助けられたからでしょうか。こうやってだれかを、直接助けられたのは、はあ、初めてなので」

不意に既視感が襲い、私はめまいに体勢を崩しそうになる。脳裏によみがえるのは故郷での一幕。ヒドラの凶爪からグランをかばったのは、今みたいにグランを救ったのは、私だった。

「なんで、どうしてグランばっか……。私は、私は救われることはなかつた」

「そ、そんなことないですよ！」

「うるさいっ！」

耳障りなルリアの声が耳を傷めつけ、私は拳を握る。剣の柄が砕け、その破片が掌に突き刺さるのも構わず、私は思いつき引き抜く。が、どこからその力が湧いてくるのか、剣はピクリとも動かず、耐えきれなくなつたのかぼきりと折れる。

「うっ、ぐっ……」

前に倒れていくアネバルテを倒れていたグランが優しく受け止める。その姿に吐き気がして。けれど今にも息絶えそうなアネバルテの表情が私の嗜虐心をくすぐる。折れた剣先もまだ鋭く、これでもグランを殺れることを確かめた私は、アネバルテがこと切れるその瞬間を楽しむことにした。これが初めてなんだ、この世界で、私が本当に殺したいと思つた相手を殺せるのは。だったら最後まで楽しまない

と。

周りにいるルリアやビイの悲痛で醜い顔は見ていて楽しい。けれど、なぜか無表情のまま顔を崩さないグランを見ると虫唾が走る。アネバルテの姿は淡い光に包まれていく。

耳障りな音を立てて、心が剥がれ落ちる。誰かがその奥底で、不快な声で叫んでいる。

やがて全身に行き渡ったその淡い光は、一つ二つと宙へ浮いていき。光が離れるたびに、アネバルテの身体は欠け、消えていく。宙へと浮いていく光は、どことなく彷徨いながら、そのはかない光を失っていき、ぷつんと消える。それが今では、大量の蛍のように宙へと飛び、その淡い光で部屋は仄かに照らされる。すでにアネバルテの姿は地面にはなかった。

こんなきれいな最後なんて見たくない。惨めに私に命乞いをするような、もっと醜くて恥ずかしい死にざま。それを期待していたのに。私は剣を握り直し、座り込み宙を見上げるグランへと切っ先を向け、振り上げる。振り下ろそうとした矢先、不意に視界が霞み、目をこすると手に水滴がついているのが見えた。私は……泣いていた。

仄かな灯りは、一つずつ消えていく。そのたびに、心が削がれ、耳障りな音と共に誰かが叫ぶ。瞳からは否応なく涙が流れていく。いやだった。目の前の風景も、グランも、私も。

死んで……死んで、死んで！

耳障りな音と声にどうにかなりそうになりながら、私は剣を振り降ろす。顔色の変わらないままのグランに、削がれた心の欠片が叫ぶ。

「グラン、死んでよ！」

グラン、どうしてグランは、今のこの状況に、仲間が一人殺されて、今まさに家族の一人に殺されそうになっているのに、そんなに無表情なまま、私を見据えることができるの……。

天井まで届いた最後の光球は、一瞬部屋全体を煌かせ、そして再び暗くなる。私が握る不完全な剣は、その切っ先はグランの顔の寸前のところでとまっている。何か、特別な力が働いたわけじゃない。グランが止めたわけじゃない。私が止めたのだ。

剥がれ落ちた心は私のものじゃなかった。不快な叫び声は、私自身のものだった。私は、私を止めようとしていた。聞く耳を持たなかった私に、無理だと分かっているながら、必死に、全力で。

最終話 背中

何度願ったことか。

傷ついた仲間の手当てをするとき。

人の姿の、人だったものの前に立ち尽くしたとき。

消え入りそうな星空を、独り仰ぐとき。

そして、家族の一人を失いかけたとき。

その願いが叶わないからこそこの世界。この世界。そうは分かっているも、ふとした瞬間に立ち止まって、悔いる。些細なものも、人生の一部を大きく変えてしまったものも、すべてひっくりくるめて、願う。それが叶わない願いだとしても。

そう、叶わないと思っていた、思っていたんだ。

だからその話を聞いたとき、俺の心は期待で膨れ上がった。ずっと、何度も思っては諦めてきた願いは、夢なんかじゃなかった。全然なんていう贅沢は言わない、でも、せめて家族だけでも。叶うと知った俺の心は輝いた。俺の願いを叶える星晶獣が手の届く範囲に存在することを知り高揚した。そして、同時に俺の世界から、輝きは消えた。

この世界は二律背反で、俺に両方を願うことは許されていなくて。俺は一人を救うために世界を捨てることを強いられた。

最初は慣れなかった。俺の言うすべての言葉に、行うすべての行動に、俺の本心が囁く。どうせ、この世界は消えてなくなると。反論した。そんなことはない、たとえ歴史を変えようと、この世界での物語から意味がなくなることはないって。

そんなのは偽善的な、言い訳に過ぎないって、俺自身が一番よくわかっているのに。

世界から輝きは消えた。俺にとってこの世界は不必要で、日々捨てられる廃棄物と同価値だった。それでも俺は色のない灰色の世界で、自分自身でいようと抗った。アーカーシヤに頼らない方法でジータを取り戻せる方法を模索し、ジータを追いかけ続けた。意味がない行動だと分かりながらも、団員たちに指示を出し、帝都アガスティアの住民を救おうとした。俺自身も、今までの俺でいようと努めた。

でも、もう、そんな偽善心も、自己満足さえも、俺には残っていないかった。ジータの横を通り過ぎ、視界から彼女の姿が消えた途端、俺の眼にはアーカーシヤにいる部屋へと続く扉しか映らなくなり、俺の頭からはこの世界への思い出も、未練も、すべて消えた。結局俺はアーカーシヤの話聞いた時から、一人を救うために世界を捨てることを決めていたのだった。

だから、目の前でアネバルテが命を落としたときも、それを行ったのがジータであることも、そして次の標的が俺だと分かったときも、俺の心は動かなかった。仲間一人二人死んでも、もう俺は何かを感じることができなかつた。最悪、俺が死んでも構わない。誰かが、ルリアとオルキスを導いて奥の部屋へとたどり着き、アーカーシヤの力を行使すればいいんだから。

だから、ほら、早く次の世界に行こう。

――

ぽたっ、ぽたっ……。

水が地面に滴る音が聞こえる。思ったよりも近くで聞こえるそれに、私は私がここにいることを思い出す。

目をあけるとすぐ前に地面が見えた。水滴でぬれた地には私の顔がぼたけて映っている。時折波立それは、うつむく私の顔を流れる涙が作ったものだった。膝を曲げ、両の掌を地面につけ、私は泣いていた。

どうして私は……泣いて……。

やめておけばよかった。理由を求めた私に、すぐに記憶が答えを覚えてくれた。今では遠い昔のように思える再興の島、その依頼で助けたはずの相手を、今日の前に見えるこの手で、私は……。

そのまま私の思考は暴走し始める。やめたいのに、考えることをやめたいのに、私の頭は誰に指示されることもなく、記憶をたどりはじめる、言い訳を探すために。

それはただの邪念。最低な私が、自身を守るために。そんなことを考える私でさえ、もういやなのに。

それなのに思考は暴走し、私は言い訳を探し続ける。事実上、私は敵はもちろん、仲間でさえも傷つけた。傷だけじゃない、命さえ奪い取った。その行動に、理由があれば、例えば誰かに操られていたから、他に訳があつて仕方のないものだったら。そんな、ただ私を守るだけ

の、最低な理由がありさえすれば。そうすれば、私は嘘だらけの私を守ることができる。

ありがたいことに、そんな言い訳も、都合のいい記憶もなかった。アネバルテの壊れた心を私の中に閉じ込めたとはいえ、それに操られる危険性も覚悟もないままそんなことをしたのは、すべて私の責任。それに私は、誰に操られることもなく、自分の意志で、それも嬉々として、人を殺していた。どうしてそんなことをしたのか、そんな感情を持つていたのか、そんなことは私にはわからない。今の私に与えられているのは贖罪だけだ。

「グラン……」

ゆっくりと顔を上げると、グランが私の声に応えるかのようにこちらを振りむく。その顔は、私がグランに剣を振り下げようとしたその時と全く一緒な無表情で、私にはもうグランが何を考えているのか分からない。もともとの私を知っているから、誰かに操られない限りこんなことをする奴じゃないって知っているから、だから怒りも、悲しみもなくいることができるのか。私には分からなかった。

「グラン、もういいから。私はこの歴史を受け止めるから、だからアーカーシヤを使ってなかったことになってしないで。アネバルテの命を奪った罪も、みんなを傷つけた罪も全部認めて、どんな罰も受け入れるから……だから！、お願い……」

グランの表情に初めて少しの戸惑いが浮かぶ。グランが口を開くまでに、少しの間があった。

「……それは、……できない」

「どうして？ 私がやったことを全部なかったことにするの？ 私が犯した罪を？ グランが思っているほど私は正しくないの。私は誰にも操られていなかったし、誰にも命令されてなかった。私は自分の意志で、全部やったの。……グランだって、私のせいで……」

「そうじゃないんだ、ジータ。これは勝手な俺の願いで、俺の思いなんだ。俺は、もうこの世界では死んでるんだ」

「それは私のせいでしょ、だったら……」

「違うー」

グランが怒ったように叫ぶ。けれどその怒りは私に向いていないようだった。

「俺はアーカーシャの存在を知ったときから、この世界ではもう死んでるんだ。ジータのせいじゃない。この世界の歴史を改変できることを知って思ってしまったんだ、できなかつたことも、失敗したことも全部なかつたことにすればいいじゃないかって。俺は団員みんなと、失敗も成功も全部含めて積み重なってきた思い出を、捨てたんだ。それが正しくないなんて、もちろん知ってた。でも心の奥底ではいつも、どうせ歴史改変するんだからって思ってた。ジータと一緒にで帝国兵も殺そうとした、正直アーカーシャの力を使えさえすればあとはどうなるろうと構わなかつた。……俺だって、正しくない人間だ」

「でも、私は……」

「だからこれは勝手な俺のわがままだ。団も仲間も関係ない。カリオスト口は気づいたのかもしれない、俺の考えに。だから、カリオスト口は俺に記憶を保存することを条件に、歴史改変を認めた」

「歴史……改変？」

「そう。だから歴史改変をした後も、この世界のことを思い出すことができる」

「それって……」

グラン一人で私の罪も全部背負おうとしているってこと……？

「俺もダメな人間だ」

最後にそうつぶやき、グランが背を向ける。その向こうに、アーカーシャのいる部屋の扉が開いていて、そこから青白い光が漏れていた。ルリアとオルキスが星晶の力を使って、アーカーシャの力を行使しようとしているのだろう。ルリアたちに聞かせたくない話だったから、グランが指示したのかもしれない。

「お願いだよグラン。お願いだから私に償わせて……」

グランを追いかけようとしても、衰弱しきった体は言うことを聞かない。

「グラン！」

償うべきは私なのに、覚えていなくてはいけないのは私なのに。罪をすべて忘れて、何もなかったことにされるなんて……。

言葉にならない感情を名前に乗せて、私は力の限り避けろ。でも、グランの心には届かない。扉をくぐり、蒼色の光に照らされる背中に、何度も何度も名前を叫ぶ。私の声が届かない部屋は、その輝きをますます強くして……。

この世界で償うことも、次の世界で償うことも許されなのまま、世界の歴史が変わる直前まで、私は弟の名前を呼び続けた。

エピローグ 初めての再会

「……っ！」

はっと目が覚めた。心臓が戦闘時のように激しく鼓動している。深呼吸をして落ち着こうとするが、顔が濡れているのに気づいて、動揺する。

まだまだ暗い部屋の中で手探りし、明かりをつける。時計を見ると日の出一時間前ぐらい。もう一度眠りについいたら、またさっきの夢を見るような気がして。椅子に掛けてある服を羽織って、部屋を出る。廊下を歩き甲板に出ると、すぐに新鮮な空気が体中を巡っていく。

嫌な夢だった。妙にリアルな夢。未だに手に微かに残るのは、剣を握り、それを振り下ろす感覚。目の前に立っていたのが仲間じゃなかったら、どんなに良かっただろうか。

私は夢の中で、グランを、仲間を殺そうとしていた。帝国兵は何人手にかけてかわからない。憎悪で動く身体は私の指示を聞かずに動き、時に嬉々として目の前の相手を死に至らしめる行動に身震いさえした。

夢なんだから。そう割り切ってもいい。けれど、私にはそうはできなかつた。心の奥底から、みんなに謝らなくちゃいけないと感じて、何について謝るのかさえも分からないのに、居ても立っても居られなかつた。

柔らかな陽光が遠くの空から差すのに気づくまで、私は悶々としたまま雲の間を泳ぐように翔けていくグランサイファーの上でうずくまっていた。

いつものようにルリアとビー、そしてグランも起きてくる。平和なおはようを交わし、私たちは食堂へと向かう。今日の朝食当番はロー

アインとフアラだっけ。グランの眩きにルリアが返答するいつもの朝。けれど、私はみんなを直視できなかった。後ろめたい何かを隠しているようで、そんな記憶なんて全くないのに、謝らなくちやいけない気がして、三人の会話を黙って聞いていた。

食堂に入るとすでに何人か団員がいて、こちらに挨拶をしてくる。その中に、いつもはあまり見れないペアで座っている二人がいて、私たちはそこへと向かう。

「おはよう、シエロ、それとカリオストロ。珍しい組み合わせだし、それにカリオストロがこんな早く起きてるなんてどうしたの？」

「みなさんおはようございます。お疲れのことと思いますが、一つ頼みたい依頼がありました。」

「でもシエロも知ってると思うけど、今日からみんなお休みデーだよ？ 流石に帝国を相手に勝利をつかむ大仕事をしたばっかだから、しばらくは羽を休めようと思ってるんだ。これからアウギユステに遊びに行こうと思っただけ……」

「はい、それも知っています。ただ、たまたま今回の依頼がアウギユステに行く途中にある島でしたので。」

「うくん。まあ話をまず聞いてみようか……、それでカリオストロは？」

グランとシエロが話している間、カリオストロが私を何度かちらつと見ていたのは気づいていた。様子をみるようなそのさまは普段のカリオストロらしくなく、けれど私も後ろめたさからカリオストロに視線を合わすことができなかった。彼女には謝罪だけでは済まされないよな、ひどいことをしたような……そんな気がする。

「あ、ああ。オレ様も久しぶりに驚いたことがあってな、それについてなんだが……。話にするとややこしくなるから、とりあえずグラン、お前はオレ様の部屋に來い。お前に渡すものもあるし。」

「へっ、なんで？ それに渡すものって？」

「話はあとだ。依頼の話は、その、ジータだけで大丈夫だろう？」

「えっ、うん、大丈夫だよ」

「それじゃあこいつはちよつと借りていくから」

カリオストロに引きずられて食堂を出るグランを見送りながら、私たちは席に着き、よろず屋の話を聞く。依頼は星晶獣絡みのものだったが、そこまで力の強くない星晶獣ようで、私はそれを受けることにした。島の詳細を聞き、ラカムに行き先変更を伝え（ようと思ったら、すでによろず屋が手を回していた）、私たちは依頼の島を目指すことになった。といっても島まで早くても一日の距離であり、結局その日一日は空旅に決まったが。

忙しいのかすぐに艇を出発するシエロカルテを見送る。陽も高く上りはじめにぎやかになり始めた艇上で、視界に団員が入るたびに謝罪の言葉が頭をよぎる。みんながみんな笑顔で私に挨拶してくれるのに、私はひきつった笑みしか返せない。いつそ団員全員を集めて謝ろうか、そう思いながら部屋に戻ろうとした私の前方からクラリスが歩いてきた。

動悸がする。夢で見た光景がよみがえる。仲間とわかっていながら非情な攻撃で身動きのできないほど衰弱したクラリスを痛めつけ、鼻歌を歌いながら髪を引っ張り、市街地を歩く。そんな光景が、目の前を歩いてくるクラリスに重なる。後ろめたさを超えた罪悪感から、その場から逃げたくなる。

「おお、ジータっ、おっはよく。今日からしばらく休みなんですよ？、クラリスちゃん頑張っちゃったからねえ〜！」

「う、うん、そうだね……」

「どうしたのジータ？ 調子悪そうだけど……、大丈夫？」

「ううん、違うの……。ねえクラリス、その……ごめんなさい……！」

「へ、へえ？ うち、何かジータにしちゃったっけ……」

困った顔をするクラリスに私は頭を下げる。そうでもしないと、私の心が壊れてしまうような気がして。クラリスに理由を聞かれても、今朝見た夢の内容を話すわけにもいかず、謝罪だけを残して私は逃げるようにその場を離れる。

シエテにも謝りに行った。ルリアにも、バイにも謝った。でもみんな

な不思議そうな顔をして、私に理由を聞いてきた。それならそれでいい。私の気が晴れればいい。

けれど、カリオストロに謝ったときだけ反応が違った。明らかに動揺した表情、そして、何か記憶にあるのかという質問。私が夢の内容について話そうか迷っているうちに、ごまかされたけれど何かを知っているようだった。

そして、グランに謝ったときも、一瞬だけ強張った表情を見せた。

――

「……………っ！、はあ、はあ……………」

まただ。またこの夢だ。

顔に手を触れると、昨日と同じように雫がつく。寝ている間かそれとも、私は知らないうちに泣いていた。明かりをつけ時間を見ると、日の出一時間前を示す時計の針。椅子に掛けてある上着を羽織り、私は部屋を飛び出す。

甲板に出て瑞々しい空気を吸っても、憧憬は消えなかった。昨日よりも悪化した夢の内容はただの夢でいいのか……。昨日カリオストロとグランが見せた反応も相まって、私には今見た夢も昨日見た夢も他人事のように思えなかった。

陽が出ていないためまだ外は肌寒い。もう一度部屋に戻る気もせず、食堂にでも行こうかと思つた矢先、声をかけられる。

「ジータ、おはよう」

「へっ、グラン？」

薄暗闇に目が慣れてきて、グランが少し離れたところに座っているのが見える。湯気が出ているカップを手に持ち、毛布を肩にかけたグランが顔だけこちらに向けている。

「こんな朝早くに起きているなんて、ね」

「こつちのセリフだよ」

「コーヒーあるけど、飲む？」

私があるのを待っていたのか、グランのすぐそばにはカップがもう一つとコーヒーポットが置いてある。私が頷くを見ると毛布から腕を出し、カップにコーヒーを注いでいく。香ばしい匂いが鼻腔を刺激し、私はグランの横にうずくまるようにして座る。カップを受けとり、一口飲み、息を吐く。白い息が宙へと漂って消える。

「グラン、私、夢を見たんだ」

「……そうか」

沈黙は思い出したくない夢の内容を思い出させる。それが嫌で、ふと気づけば私はひとりごちるように話し出していた。

「アーカーシャがいた手前の部屋があったよね、多分そこだと思う。グランが空中に浮かんだ縄に首をくくってね。助ければいいのに、なんでか私、グランを痛めつけてるの。拷問みたいに、机の上にはいろんな武器が並んでいて……。その一つ一つを取って、記憶にない思い出話を語って、グランに……」

「……」

「ほかにも見たんだ。部屋は同じなんだけど、そこで私は大切な仲間を一人……自分の手で殺した。誰だか思い出せないの、団員じゃないと思う、顔はぼやけて思い出せなくて……。わ、私、夢の世界なのにその人と会っている気がして……。それで、謝らなくちゃって……」

「……」

グランは何も言わなかった。聞いているとは思う、でも空の彼方を見据えたまま表情も崩さず、黙っていた。グランの反応は寂しくもうれしくて、心の淀みを発散するように、私は夢で見た光景をグランにうち明け続けた。

空の色が黒から、群青色を混ぜた紫へと変わり、そして不意に一条

の光が差す。おぼろげで今まで見えなかった島が、漂う雲に今日最初の影を落とす。その島を見た私の心臓がどくと、大きく鼓動する。

「あれが……」

「再興の島だ」

初めて見るはずの島に懐かしさ、そして心の底から湧き上がる感情がある。気づく間もなく、私の心は聞きたかった、でも聞けなかったことを聞いていた。

「グラン、あの後、何があったの？」

顔も名前も思い出せないから、私にその人を仲間と呼ぶ資格はない。でもその人は私にとって大切な人で、そう

、私はその人を助けようとしたはずなのに、結果的に手にかけた。その後私は、そしてそばにいたはずのグランはどうしたのか、どうなったのか。忽然とそこで途絶えた夢の場面は、もう一度夜を迎え、でも二度と巡り合えない、そんな気がしていた。

脈絡のない、言ってしまうば意味さえ分からない質問。けれどグランの顔が、何かしら私が知りたいことを知っていることを告げていた。

「知っている……の？」

「……うん」

私の方を振り向くグランの横顔を陽光が橙色に染める。

「でも……ごめん。まだジータに話すことはできないんだ。ううん、違う。俺の勝手なわがままなんだけど、まだ話したくないんだ。ジー

夕が見た夢の決着はまだついていないんだ、それは俺にとってもジータにとってもね。いつか必ず話す、だから俺を信じてほしい」

――

朝食を昨日と同じように食べ、何人かの団員に声をかけて今回の依頼のメンバーを決めていく。その中に普段は面倒くさがり外にもでないカリオストロが混ざっていることに少し驚きながらも、昨日シエロに聞いた依頼の内容を説明していく。全員の了解を取ったあと、島への上陸の準備をする。

再興の島の港に艇を停めた私たちはグランを先頭に島へと上陸した。大部分の団員たちは休養のために艇に残し、今回の依頼は少人数で行うことになっていた。みんなが下りたのを見届け私も艇から降り、地に足を着ける。その瞬間、私の心が何かに囚われた。

早る心臓に驚きながらもゆっくりとグランの後をついていく。港の入り口に立っている男性が今回の依頼主だろうか。けれど私の視線はその後ろの街中を向いていた。行かなくちゃいけない場所が、会いに行かなくちゃいけない人がいるような気がして、一人で足が走り出しそうになる。一度それを許してしまえば止められなくなりそうなのほどの衝動を抑えられたのはほんの数分だった。

グランが依頼主と話をし、港を出て街へと入って数歩、抑えきれなくたった私の心がグランに声をかける。

「ねえ、グラン！」

前を歩くみんながこつちを振り向く。そんなのも気にならないほど私は早く、できるだけ早くそこに行きたかった。

「わ、私っ！」

「ジータ、行ってきていいよ。いるんでしょ？、この島に」

「えっ……う、うん！」

「俺もすぐに後を追いかけるから」

「うん、ありがとっ！」

「ジータっ！」

背を向ける私をグランの鋭い声が引き留める。振り向くといつにもまして、真面目な顔をしていた。

「俺も仲間も、俺たちはみんなジータの味方だから、だから、無茶はしないで、俺たちのことを頼っていいんだからね？」

「もちろん、分かってるって！」

グランに返事をし、みんなに背を向け走り出す。後ろから、お前も早く行くんだよっ！、っていうカリオストロの罵声が聞こえる。

走った。

初めて来た街中を、誰の顔も知らない人々とすれ違いながら。

どこかは分からない。でも会わなくちゃいけない人がそこにいるのが分かる。心でつながっているように、鼓動が伝わってくるのが、距離とは関係なく、分かる。

「どっっ、どっににいるの？」

立ち止まって耳を澄ます。水の音、人々のしゃべり声。見当たらない情景が心に流れ込んできて、辺りを見回す。ふと視界の隅に、蒼い髪の少女の手を引いて走る、女の子の姿が映る。

「あれは……」

自然とその方向に足が動き出す。少し陰った裏路地のような道。遠く路地のその先に微かに、ひらけた空間が見える。

あそこだ。

心を感じ取り、私に指し示す。

足が走り出し、私は小道を駆けていく。息をするのも忘れるほどの全速力で、心臓が破裂しそうになるのも抑えず、裏路地を抜けて、そ

して。

水の音。人のしゃべり声。

いた。

そうだ、なんで忘れていたんだろう。名前も顔も、声も。見知った、聞き知ったその姿も。全部知っていたのに。

一步近づく。もう一步、さらにもう一步。そこで私の足は止まる。

何を、言えばいいの。謝るの、それとも感謝を？

彼女が私に気づき、笑顔を向ける。それがなぜか私には辛くて。地面に水滴が落ち、痕が残る。ああ、私泣いているのか。

彼女は少し戸惑った表情をし、ゆつくりと私の方へ歩いてくる。

泣いている暇なんてなかった。迷っている場合じゃなかった。

よし。

悩むことなんてなかった。だって、言うことなんて決まっていたんだから。

伝えたかったことを、夢を、世界を超えて言いたかったことを言うために、私は大きく息を吸い込む。

そして。

広場にいるみんなが振り向くような声は、心からの思いは、灰色だった島に色を届け、島の再興を告げていく。

—
完
—